

は、子孫の子孫に至るまでいかんぞ忘られん。彼の功を想ひて、今坐次は、この隅の根に坐ゑて、年に月に議りて給與賞賜を汝に與へん。侍奉きて過さん、子孫の子孫に至るまで「勅ありき。」

又成吉思合罕は、李幹兒出に宣はく「小き時に、葦毛の驢馬八匹を盗まれて、路に三たび宿りて追ひて行ける時に遇ひ合ひたるぞ。汝そこに言はく「艱みて來つる伴に伴なはん」と云ひ、家に父にも話なく、騾馬の乳を擠り居たるに、その大皮桶皮斗に野にて蓋して、尾脱の栗毛馬を放たしめて、我を脊黒の青馬に乘らしめて、汝自ら速き淡黄色の馬に乗りて、その馬羣をば主なく放ちて、急ぎて野より便ち我と伴なひて、

又三たび宿り追ひて、葦毛の驢馬ごもを盗みたる團の處に到れば、團の邊に立てるを奪ひて追ひて逃げて將ち來しぞ、我等二人汝の父納忽伯顔は「富人にて」ありき。(明譯に「你父納忽」のを見れば、原文「ありき」汝は、彼の獨子、何を知りてか我に伴なひたりし。(明譯「你父納忽伯顔有家財、只你一子、爲甚肯教與我作伴」とあるは、原文の「心の傑れたるにより伴なひたるぞ、汝」(閣復の撰意とや、異なり。)王玉昔帖木兒の碑に「祖博爾朮、諡武忠。武忠志意沈雄、善戰知兵。太祖聖武皇帝在潛義均同氣、初要兒斤部卒、盜吾牧馬。武忠共往追之、時年十三、知其眾寡不敵、乃爲出奇、從旁夾擊之、寇捨所掠而去」とあるは、即ちこの事にして、元史博爾朮の傳は、この碑に據れり。要兒斤は、祕史の禹兒乞、また主兒勤なり。)その後想ひて行きて、我は別勒古台を遣りて、伴ならんこ云へば、汝は拱脊の栗毛馬に乗りて、青き毛衣を馬に駄けて、伴となり來つれば、三つの篋兒乞惕、我等の處に來て、不兒罕を

三たび繞らしめたる時、共に繞りたるぞ、汝又その後塔塔兒の民に荅闌捏木兒格思にて對抗して宿りたれば、雨は晝夜斷えず霖降りたる時、夜我を睡らせんごと、毛氈の表衣を覆ひたるにより、我が上に雨を漏らさず、夜盡くるまで立ちて、片方の足を只一度換へたりき、汝汝の傑れたる效なりしぞ。

(元史博爾朮の傳に「嘗潰圍於怯列太祖失馬博爾朮累騎而馳頓止中野會天雨雪失牙帳所在臥草澤中與木華黎張氈裘以蔽帝通夕植立足蹟不移及旦雪深數尺遂免於難」とあるは、閻復の廣平王の碑に據れるなり。潰圍於怯列とは合刺合勒只惕の戰を云へるにて、累騎の事は幹關台と孛囉忽勒との事を誤り傳へたるなり。氈裘の覆ひの事も、塔塔兒との戰を客例亦惕とし、雨を雪とし、孛兒出一人を木合黎と二人としたるは、皆傳聞の異辭なり。)それより外は、いかで汝の傑れたることを言ひて盡さん。孛兒出木合黎二人は、我が善き事をば行くまで拽きて、我が善からぬ事は立つまで止めて、この位に到らせたり。今眾の上に坐

に坐て、九度の罪に勿罪なひそ。孛兒出は、右の手の阿勒台山に凭れる萬戸を知れ」と勅ありき。(蒙語篋迭は、本の義は知るにて、が古言のしるに同じ。古の知太政官事今の府縣知事などの知も、同じ意なり。管する意に用ひたる篋迭を知ると譯したるは、皆古言のしるなり。)

又木合黎に成吉思合罕宣はく「我等、豁兒豁納黒主不兒なる忽秃刺罕を戴ける部眾の踊りける繁れる樹の下に下馬したれば、木合黎に皇天の神告を告げ給へる言明なる故に、我そこに古溫豁阿(卷四なる古溫兀阿)を想ひて、木合黎に言を了へたりき。(約束を定めたりき。この事は、前に見えす。豁兒豁納黒の下馬は、札木合約ありて、その後主兒勤の亡びたる時、先約に従ひ服屬したるなり。)それに依り坐に上りて坐りて、木合黎の子孫の子孫に至るまで眾民の國王となれ」とて、國王の號を賜ひたり。木合黎國王は、左の手の合喇溫只敦に凭れ

る萬戸を知れ」勅ありき。(合喇溫只敦の所在確ならず。王罕の少き時は薛涼格河の邊にありて、これと異なり。巴勒主納の水飲の時、太祖を尋ねて合喇溫只敦の嶺どもを合撒兒の辿りたるは、この山なるべし。興安嶺の山脈の内なる一峯の名なるべしとは誰も考ふることなれども、李幹兒出の阿勒台山と對して擧げられたるを見れば、興安嶺の一峯の名には非ずして、興安嶺全體を呼べる舊き名なるべし。閣復の廣平王の碑に「國初官制簡古置左右萬夫長位諸將之上首以武忠居右東平忠武王居左翊衛辰極猶車之有軸身之有臂電掃荒屯鼇奠九土挂天之力競矣と云へり。武忠は李幹兒出、忠武は木合黎なり。)

豁兒赤の讖言

成吉思合罕、豁兒赤に宣はく「讖言して、(明) 你會說先兆的言

語、我が年少くあるより今まで久しく濡るゝに濡れ合ひ、寒きに寒え合ひて、福の神となりて行きたるぞ、汝豁兒赤は、かの時に言はく「讖言實ならば、上帝に心に適はれば、我に三十人の妻有らせよ」と云ひき、汝今實なる(讖言實と)故に、恩賜して、これらの降れる民の好き婦人を好き處女を見て、三

三十妻の舊約

林民の萬戸

十人の妻を選びて取れ」と勅ありき。又豁兒赤に「三千の巴阿鄰の上に、塔該(即ち速勒都)、阿失黑(即ち阿失)二人と共に、阿荅兒斤の赤那思(出でたり。赤那思は、喇失惕額丁に據れば、察喇孩領忽の子なる堅都赤那兀嚕客真赤那の裔なり。赤那思氏分散して阿荅兒斤に屬し居たる故に、阿荅兒斤の赤那思と云へるなり。)脱幹列思帖良古惕(脱幹列思は、卷十に脱額列思、蒙古集史に秃刺思とあり。帖良古惕は、卷十の林)を合せ萬ごなして、豁兒赤知りて、額兒失河に傍へる林の民に至るまで營盤を自在に營盤して、林の民を鎮むべく、豁兒赤萬戸を知れ」と勅ありき。豁兒赤に相談無くては、林の民は、ごにかくに勿行ひそ。相談なくて行ふものをば、何ぞ猶豫はん」と勅ありき。

主兒扯歹の合刺合勒只惕の戦功

又成吉思合罕は、主兒扯歹に宣はく「緊要なる汝の功は、客

喇亦惕と合刺合勒只惕の沙漠に戰ふ時、愁へて居る時、忽亦
 兒答兒安答は、口を開きたるぞ。彼の従事を、主兒扯歹汝は、従
 事したるぞ。従事する時、主兒扯歹汝は、突進して只兒斤を、禿
 別干を、董合亦惕を、忽哩失列門（卷六の豁）を、千の侍衛を、緊要
 なる軍を、都てを敗りて、大中軍に到りて、桑昆の紅き腮を兀
 出馬（箭の）にて射たる故に、長生の上帝に門の手綱を引開け
 られたるぞ。桑昆に傷けずあらば、いかにかもなりけん、我等。
 主兒扯歹の緊要なる大い功にそれは做りたるぞ。かくて離
 れて合勒合河に沿ひ起つ時、主兒扯歹を、高き山の遮護の如
 く思ひて行きたりき、我、かく去りて、巴勒主納の湖に水飲み
 に到りたるぞ。さて巴勒主納の湖より出馬する時、主兒扯歹

高山の遮護

第二次の戦功

を先鋒として、客喇亦惕に出征して、皇天后土に力を添へら
 れて、客喇亦惕の民を窮めて虜へたり。緊要なる國を滅され
 て、乃蠻、篋兒乞惕は、顔色を挫きて、立ち合ひ（對陣）かねて散ら
 されたるぞ。篋兒乞惕、乃蠻を散らしたる戰の内に、客喇亦惕
 の札合敢不は、二女の女の縁に依り、己の従ふる部眾にて圓
 全住みたりしぞ。二たび敵になり離れたるを、主兒扯歹誘ひ
 て、計略にて札合敢不を離れ畢へたるを手に掛けて拿へて
 事了へたりしぞ。かくて札合敢不の部眾を二たび滅し虜へ
 たり。主兒扯歹の第二次なるその功は、かくありしぞ。二宣ひ
 き。殺し合ふ日に、命を出したる故に、死に合ふ日に、鏖戦した
 る故に、成吉思合罕は、亦巴合別乞（札合敢不の長女。斡魯木列）

亦巴合別乞を賜ふ時の勅諭

別吉ベキなり。喇失惕ラシチ阿卜哈合屯アハカトを主兒扯歹チエダイに恩賜オンキして與アタふる
 時トキ亦巴合イハカに宣ノリはく「汝ナンチを厭いとひ汝ナンチの智懷キヤウクワイなく見みえ容惡カチアしと云い
 はざりしぞ、我われ懷ふところに脚あしに入りたる列つらに列つらりて坐あたる汝ナンチを主チウ
 兒扯歹チエダイに恩賜オンキするは、大おほなる道理道理を思おもひて、主兒扯歹チエダイの戰たたかふ
 日ひに楯たてとなりたる敵てきなる人ひとに防ふせぎとなりたる、離はなれたる部部
 眾しうを聚あつめたる、散ちりたる部眾部しうを纏まとめ合あひたる彼かれの功いさをを考かんがへ
 て、汝ナンチを與あたへたり。久ゆく後すゑ我が子孫そんは、我等われらの位くらゐに坐あて、かくの如ごと
 き功いさををなせる道理道理を想おもひて、我が言ことばに違たがひなさず、子孫そんの子し
 孫そんに至いたるまで、亦巴合イハカの位くらゐを勿斷なちそと勅みことありき。又また成吉思チンギス
 合罕カガンは、亦巴合イハカに宣ノリはく「札合敢カガン不ふなる汝ナンチの父ちちは、汝ナンチに二百人ひやくにん
 の媵臣ユウジンを、(蒙語引者思、婦人の嫁ぎに隨ひ往きて仕)汝ナンチに阿失黑帖木アシクテム

遺念の媵臣

四千の兀嚕兀惕
の長

兒る厨子カシハデ阿勒赤黑厨子アラクシクカシハデ二人ふたりを與あたへてありき。今いま兀嚕兀惕ウルクウチの民たみ
 に汝ナンチ往ゆくには、遺念カタミとして我われにその媵臣ユウジンより阿失黑帖木兒アシクテム
 厨子カシハデを一百人ひやくにんを與あたへて往ゆけと宣ノリひて取とれり。又また成吉思チンギス合罕カガン
 は、主兒チエ扯歹ダイに宣ノリはく「亦巴合イハカを汝ナンチに與あたへたり。四千せんの兀嚕兀ウルクウ
 惕チを汝ナンチ知しりて居をらずやとて恩賜オンキして勅みことありき。(元史兀赤台の
 從征チウテイ怯列亦キエリヤク、自罕哈ジカンカ、啓行キコウ、歷班真海子リヘンジンカイ、間關カンカン萬里マンリ、每遇ミョウゴ戰陣センジン、必爲キツヒ先鋒センポウ、帝嘗諭テイショウ之曰チ朕テン
 之望シノゾク汝ナンチ如ごと高山カクサン前日ゼンニチ影カゲ也。賜嬪御木八哈別吉引者思百俾統兀魯兀四千人にん、世世セセ無な
 替カヘと云いへるは、この文ぶんの意いを約やくめたるなり。高山カクサン前日ゼンニチ影カゲは、高たか
 き山さんの遮護セゴの誤ごり、引者思インシャスは、媵臣ユウジンの蒙語モンゴを正ただしく音譯オンせり。)

成吉思汗實錄卷の八終り。

成吉思汗實錄卷の九

忽必來の力

四狗

四駿

又成吉思合罕は、忽必來に宣はく、力ある項力士の臀を壓
 けてくれたるぞ、汝此等忽必來者、勒篋者、別速別格台(即ち速別額台)
 汝等四人の狗を、思ふ處に向けて遣れば、到れよ云ふ處に岩
 を碎き、引けよ云ふ處に崖を破り、光る石を碎き、深き水を斷
 切りたりしぞ、汝等忽必來者、勒篋者、別速別額台、汝等四人の
 狗を指したる地に遣りて、孛斡兒出、木合黎、孛囉忽勒、赤刺溫
 巴阿秃兒、これら四人の駿馬(蒙語)朶兒邊曲魯兀惕(を側)に置け

二先鋒

十功臣

注意せらるゝ別
都温

忽難の忠勤

ば、(元史木華黎の傳に「與博爾朮博爾忽赤老温事太祖俱以忠勇稱」)戰ふ日
 こなれば、主兒扯歹、忽亦勒答兒二人を、兀魯兀惕忙忽惕を率
 るて前に立たしむれば、都て心安くありき、我(元史)に宣へり。(木華
黎の傳に、木華黎薨じて子孛魯嗣ぎたる後丙戌太祖二十一年夏、詔封功臣戶口、
爲食邑曰十投下、孛魯居其首と云ひ、畏答兒博羅歡の傳にも十功臣の目見えた
るは、この十人を)汝忽必來は、軍の事務都てに長として居らず
 や、こて恩賜して勅ありき。又別都温の拗けたる故に、我怪み
 て行きて、千戸を與へざりき。汝は彼に好くあるぞ。汝と共に
 千戸となりて議り合ひて行かれん、と宣へり。又この後別都
 温に注意くるぞ、我等に宣へり。(別都温は、即ち卷三の抹赤別都温なり)
 又成吉思合罕は、格你格思の忽難につきて、宣はく、汝等孛
 斡兒出、木合黎が頭たる官人ごもに、朶歹、朶豁勒忽等の扯兒

謀臣忽難闊闢
思

拙赤の傳となる
忽難

忠直なる四臣

賓に。この忽難、黒き夜は雄狼、明き晝は黒き老鴉となりて、起
 くる時は休まざりし、休む時は起きざりし、歹き人と共に非
 き面して居らざりし、讎ある人と共に別なる面して居らざ
 りし、忽難、闊闢思二人に相談無くて、勿事を做しそ。忽難、闊
 闢思二人に相談して事を做せ、と勅ありき。我が子ごもの
 兄にて拙赤はあるぞ。忽難は、格你格思に頭として、拙赤の下
 に萬戸の官人こなれ、と勅ありき。(元史世系表に「太祖皇帝六子、長朮
疏略なるが、洪鈞の元史譯文證補に補傳あり、また、又說の二字)忽難、闊闢思、
 迭該、兀孫額不干(即ち巴阿鄰の)この四人は、見たる事を諱まず、
 聞きたる事を匿さざりき。云云にて、これら四人はありしぞ。
(これら四人の上には、但會聞見的事、不會隱諱、便來對我說了、この一

節は明譯に「又説」とある如く、太祖の勅語なるべし。

をさななじみの者勒篋

又成吉思合罕は、者勒篋に宣はく「札兒赤兀歹翁は、風匣を負ひて、者勒篋は搖車の内より「擧げられて」不兒罕合勒敦より下りて來る時、斡難の河邊の迭里溫孛勒答黑に「我が母」我を生みたる時、貂鼠の襁褓を與へてありき。かくて伴となりたるに依り、闕の奴門の近習となりたるぞ。者勒篋の功は多くあるぞ。生るゝと共に生れたる、長くるゝと共に長けたる、貂鼠の襁褓なる根源ある福ある慶ある者勒篋、九次の罪を犯すゝも刑に勿入れそ」と勅ありき。

父と別に千戸となれる脱命扯兒必

又成吉思合罕は、脱命（卷八な）に宣はく「父と子と別に千戸をいかでか知りたりし、汝國民を聚め合ふ父に片方の翅を

なり、拽き合ひて國民を聚め合ひたる故に、扯兒必の號を與へたるぞ。今己の得たる置きたる「民」に依り己千戸となりて、秃嚕罕に議り合ひて居らずや、汝と勅ありき。（秃嚕罕の名は、前に兄弟多ければ、その兄弟の一人なるべし。）

艱難を共にせる汪古兒

又成吉思合罕は、汪古兒厨官に宣はく「三人の脱忽喇兀惕（脱忽喇温の複稱）五人の塔兒忽惕蒙格秃乞顔の子汝汪古兒、敝失兀惕巴牙兀惕を率ゐ、汝等我に一つの團となりて、汝汪古兒は、霧の裏に迷はざりしぞ、汝亂の裏に離れざりしぞ、汝濡るゝに濡れ合ひて、寒きに寒え合ひて行きたりしぞ、汝今いかなる恩賞をか要むる、汝と宣へば、汪古兒申さく「恩賞を擇ばしめば、我が巴牙兀惕の兄弟は、部落部落ごとに散りたり。恩賜

汪古兒に屬する巴牙兀惕部

せば、巴牙兀惕の兄弟を聚らしめんと申せば、然り。かく巴牙兀惕の兄弟を聚めて、汝千戸を知れと勅ありき。又成吉思合罕勅あるには、汪古兒、孛囉兀勒二人は、右左の側にて汝等二人の厨官は、食物を配る時、右の側に立てるもの坐れるものに缺けさせず、左の側に列れるもの未なるものに缺けさせず。汝等二人にてかく給散すれば、我が喉噎はず心安くあり。今汪古兒、孛囉兀勒二人は、馬に乗りて行きて、食物を多くの人に給散せよと勅ありき。坐に坐る時は、大なる酒局の右左の側に食物を掌りて坐れ。脱命等と共に北に向ひ坐れと坐を告げて與へたり。

訶額倫の育てたる葉兒四人

又成吉思合罕は、孛囉忽勒(即ち孛囉兀勒)に宣はく、我が母は、失吉

忽秃忽、孛囉忽勒、古出闊闊出、汝等四人を、民の營盤より地より得て、脚の處に入れて、子こし育てて養ふに、汝等の項を引きて、人こ齊しくならしめて、汝等の肩を引きて、男こ齊しくならしめて、子こもなる我等に伴こなり、影こならしめんとて養ひたるぞ。汝等を養へる徳に、我が母に蓋幾ばくかは報い恩を廻したり。汝等、孛囉忽勒は、我に伴なひて、劇しき出征に、雨の夜乏しく宿らしめざりしぞ。汝、抗合ひて居る敵の處に、湯なく宿らしめざりしぞ。汝、又御祖なる父を失ひたる讎あり怨ある塔塔兒の民を屈服せしめて、讎復し怨報い、塔塔兒の民を車轄に比べて根絶しに夷ぐる時、殺されたるに、塔塔兒の合兒吉勒失喇、賊こなり出でて、却困窮して飢ゑて入

合兒吉勒失喇に拖雷の盜まれ

りて來て、母の處に家に入りて、善く尋ねさすること有り、我
 こ云ひて、「善く尋ねさすること有らば、そこに坐れ」と云はれ
 て（明）他説是尋衣食的、母親説既是尋衣食の時、那裏坐（西邊）の床の門後に端に坐りて居る時、拖雷五歳なる外より入り
 て來て、却走りて出でて去りたるを、合兒吉勒失喇起ちて、幼
 兒を腋に夾みて出でて行きて去りながら、刀を引きて抜き
 つゝ行く時、孛囉忽勒の妻阿勒塔泥は、母の家に東に坐りて
 居りき。母叫びて「子を失へり」と云へると共に、阿勒塔泥續き
 合ひ走りて出で合ひて、合兒吉勒失喇の後より趕ひて、彼の
 辮髮を拏へて、次の手にて、刀を抜き、ある彼の手を拏へて、
 扯くと共に、その刀を落しけり。家の北に哲台者勒篋二人、角

勇婦阿勒塔泥の働

哲台者勒篋に盜人の殺され

頭功の争ひ

なき黒牛を食はんと殺して居る時、阿勒塔泥の聲にて、哲台
 者勒篋二人、斧を執りて、拳を赤くして、走りて來て、塔塔兒の
 合兒吉勒失喇を斧にて刀にて、すぐそこに殺しけり。阿勒塔
 泥、哲台者勒篋三人、子の命を救へる頭功を争ひ合ひたれば、
 哲台者勒篋二人言はく「我等無かりせば、疾く走りて到りて
 殺さざりせば、阿勒塔泥は、婦の人、いかにありけん。子の命に
 害を致したりけん。頭功は、我等のなるぞ」と云へり。阿勒塔泥
 言はく「我が聲を聞かざりせば、汝等いかで來にけん。我走
 りて趕ひて彼の辮髮を拏へて、刀を抜きたる彼の手を扯き
 て、刀を落さざりせば、哲台者勒篋二人到りて來るまでに、子
 の命に害を致さずや、はありけん」と云へり。言ひ畢へたれば、

阿勒塔泥のとなれる頭功

斡歌歹を救ひたる孛囉忽勒

頭功は、阿勒塔泥のとなれり。孛囉忽勒の妻は、孛囉忽勒に第二の轅となり、拖雷の命に功となり。又孛囉忽勒は、客例亦惕と合刺合勒只惕の沙漠に戦へる時、斡歌歹は頸脈を箭に射られたれば、倒れたれば、孛囉忽勒は、上に下り合ひて、凝りたる彼の血を口にて唾ひて、夜宿り合ひて、明朝馬に乘らしめて、坐りかぬるを、尻馬に乗りて、斡歌歹の後より抱きて、塞れる血を唾ひ唾ひ口の縁を赤くして、斡歌歹の命を安らかに送りて來てありき。我が母の養へる勞りたるに報い、我が二人の子の命に功となりたるぞ。孛囉忽勒は、我に伴なひて、招き喚びに、聲應後れたるここなかりしぞ。孛囉忽勒は、九次罪を犯すとも勿罪なひそと勅ありき。

女子の恩賞

別乞とせらるる、豁兒赤兀孫翁

又女子家族に恩賞を與へんと宣へり。

又成吉思合罕は、兀孫翁(豁兒赤)に宣はく、兀孫、忽難、闊闊、搠思迭該、この四人は、見たる事聞きたる事を諱み匿さず告げ居たりき。心附きたる事考へたる事を語り居たりき。忙豁勒の體例には、官人の制に別乞となる法ありき。巴阿鄰は、兄の子孫なりき。(巴阿鄰の遠祖巴阿哩歹は、孛端察兒の長)別乞の制は、我等の内にて上より爲る法なれば、別乞に兀孫翁爲れ。別乞に戴くこ、白き衣を着せて、白き駟馬に乘らしめて、位の上に乗せて、侍きて、又年月に議りてかく有れと勅ありき。(別乞は、族長の稱號なり。蒙古の諸部長往別乞と稱する者あり。薛徹別乞は、合不勒合罕の長子の孫にして、禹兒斤の長なり。忽察兒別乞は、也速該の兄の子なるが故に、別乞と稱せり。兀都亦惕、篋兒乞惕、脫黑脫阿別乞、その長子、脫古思別乞、朶兒邊の合只、溫別乞、斡亦喇惕、忽都合別乞は、皆その一族の長なり。王罕に事へたる必勒

別乞の稱號

格別乞も或一族の長なるべし。但太祖の女豁眞別乞、阿刺合別乞、桑昆の妹察兀兒別乞、札合敢不の二女亦巴合別乞、莎兒合黑塔泥別乞の如く、女子にして別乞と稱するは、美稱に用ふるのみにて、族長の別乞とは異なり。又輟耕録の白道子の條に「國俗尙白、以白爲吉」とあれば、別乞の白衣を被るは、優禮に出でたるなり。黑韃事略に蒙古の衣服の事を述べて「色用紅紫紺綠、以日月龍鳳、無貴賤等差」と云ひて、白衣の事を少しも云はざるを見れば、この優禮を受くるものは極めなるべし。」

まづ口を開きたる忽亦勒答兒の遺族の恩賞

又成吉思合罕宣はく「忽亦勒答兒安答は、戦ふ時に命を差出して先口を開きたる功の故に、子孫の子孫に至るまで孤兒の恩給を受けて居れ」と勅ありき。

札木合に殺されたる察罕豁阿の遺子の恩賞

又成吉思合罕は、察罕豁阿（卷四の察合安兀阿）の子納鄰、脱幹哩勒に宣はく「汝の父察罕豁阿は、我が前に慎みて戦ひとなり、答闌巴勒主惕に戦へる時、札木合に殺されき。今脱幹哩勒は、父の功にて孤兒の恩給を受けよ」と宣はれて、脱幹哩勒申さく「恩

賜せば、我が捏古思の兄弟は、他の部落ごごに散りたり。恩賜せば、その捏古思の兄弟を聚めてん」と申せば、成吉思合罕勅あるには「しかあらば、捏古思の兄弟を聚めて、汝は子孫の子孫に至るまで知りて居らずや」と勅ありき。（捏古思氏の人、元傳に「徹徹、担古思氏」とあるを、錢大昕の氏族表に「担亦捏之譌」と云へり。）

鎖兒罕失喇父子の舊恩

又成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に宣はく「我を、小き時に泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒秃黑兄弟に嫉みて拏へられれば、そこに兄弟に嫉まれたり」とて、鎖兒罕失喇は、赤刺温、沈伯なる子ごもに、合答安なる女に世話せしめて、匿して居て、我を放ちて遣りたるぞ、汝等汝等の彼の恩好きを想ひて、黒き夜の夢の裏に、明き晝の宵の裏に、想ひて行きたるぞ、我、汝等は、

薛涼格の營盤自在の願

却て我に泰赤兀惕より遅く來しぞ。今我汝等に恩賜せば、いかなる恩賜をか欲する。汝等と宣へり。鎖兒罕失喇は、赤刺温、沈伯なる子ごもご共に申さく「恩賜せば、營盤自在ならん。篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤として自在ならん。又別に恩賜せば、成吉思合罕知しめせ」と申せり。その時成吉思合罕宣はく「篋兒乞惕の地なる薛涼格を營盤として、營盤又自在なれ。子孫の子孫に至るまで、箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて、自在なれ。九次の罪に刑に勿入り」と勅ありき。又成吉思合罕は、赤刺温、沈伯二人に恩賜して「前に赤刺温、沈伯二人の言へる言を想ひては、いかなぞ忘れん。汝等を」赤刺温、沈伯、汝等二人、心に言ふことあらば、不足を求むることあらば、間の人

直に願を言ひ得る許し

鎖兒罕失喇巴歹
乞失里黑三人の
答兒罕

に勿語りそ。己身にて口にて我に汝等自思へることを語れ。不足を自ら求めよ」と勅ありき。又鎖兒罕失喇、巴歹、乞失里黑、汝等は自在なれ。又自在なるには、多き敵に馳りて、財を得たるに依りて取れ。野の獸を圍獵せば、殺したるに依りて取れ。ご勅ありき。鎖兒罕失喇云へば、泰赤兀惕の脱迭格の家人なりしぞ。巴歹、乞失里黑二人云へば、扯唵（忽闌巴阿秃兒の子也客扯唵）の馬飼なりしぞ。今は我が信臣、箭筒を帶ばしめて、喝蓋せしめて、自在に快活なれ」と勅ありき。（自在なるは蒙語は答兒合刺、忽得たる官人を）

答兒罕（龍飛日、朝廷草創、官制簡古、惟左右萬戶次及千戶而已。丞相順德忠獻王、之曾祖啓昔禮、以英材見遇、擢任千戶、錫號答兒罕。至元壬申、世祖錄勳臣後、拜王宿衛官、襲號答兒罕。とあり。答兒罕は、即答兒罕、啓昔禮は、即乞失里黑、忠獻王は、世祖成宗の朝の名相）

成吉思汗實錄卷の九

正主を廢てかねたる納牙阿の恩賞

又成吉思合罕は、納牙阿に宣はく「失兒歌禿翁(卷五の失兒古額禿翁)は、阿刺黑納牙阿なる子ごもご(即汝等ご)塔兒忽台乞哩勒禿黑を我等の處に拏へて來る時路にて忽禿忽勒の隅に到りて、そこに納牙阿言はく「正主の君をいかで廢て、拏へて往かん、我等」云ひて、廢てかねて放して遣りて、失兒歌禿翁は、阿刺黑納牙阿なる子ごもご來て、そこに納牙阿必勒只兀兒(必只兀兒は、雲雀なり。納牙阿の號か。)言はく「正主の君を塔兒忽台乞哩勒禿黑を手てに掛けて來ぬるに、却て廢てかねて放して遣りて、我等は、成吉思合罕に力を與へんご來ぬ。その君を手てに掛けて來なば、「正主の君を手てに掛けたる人、久後いかんぞ倚信せられん、此等の「人」云はれんご云ひき。その君を廢てかねたり」云へ

右左中の萬戸

者別速別額台の封戸

迭該の封戸

古出古兒木勒合勒忽の封戸

ば、そこに「正主の君を廢てかねたる理は、大なる道理を思ひけり」さて、彼等の言を善しとして「一つの句當を委ねん」云ひき。今孛斡兒出に右手の萬戸を知れ(知らしめ)、木合里に國王の號を與へて左手の萬戸を知らしめたり。今納牙阿は、中の萬戸を知れ「勅ありき。

又「者別速別額台二人は、自得たる置きたる「民」に千戸なれ」云宣へり。

又迭該なる羊飼に、(卷三に、迭該は羊を牧すること見えたり。)埋れたる(明無戸籍的百姓)を聚めて千戸を知らしめたり。

又古出古兒木匠は、(卷三に、古出古兒は家車の修造を掌れること見えたり。即木匠なり。)民缺けて、こゝよりそこより收めて、札荅欄より木勒合勒忽親しきに

依り伴なひき。古出古兒、木勒合勒忽二人は、一つに千戸となりて議り合ひて居れ。と宣へり。

親衛を萬に滿た
する勅

國を共に立てたる共に艱難したる者どもを千戸の官人となして、千を千として、千戸百戸十戸の官人を任して、萬を萬として、萬戸の官人を任して、萬戸千戸の官人どもに、恩賞を與ふべき者には、恩賞を與へて、恩賞の勅ある者には有りて、成吉思合罕勅あるには、前に八十の宿衛あり、七十の侍衛の番士有りたりき。今長生の上帝の力にて、天地に力勢を添へられて、普き國民を匡して、獨の調度の内に入れたる時、今我が處に番直する侍衛を千戸千戸より選びて入れよ。入るゝには、宿衛、箭筒士、侍衛に入るゝには、萬に滿たせ入れよ。

番士を選び弟と
從士とを隨へし
むる勅

と勅ありき。又成吉思合罕は、番士を選びて入るゝことを勅を千戸千戸に傳へけらく、我等の處に番士を入るゝに、萬戸千戸百戸の官人の子ども、白身の人の子ども入る時、技能あり、好き者を、我等の前に行くべき者を入れよ。千戸の官人の子どもを入るゝには、十人の從士あり、彼の弟一人を隨へて來よ。百戸の官人の子どもを入るゝには、五人の從士あり、一人の弟を隨へて來よ。十戸の官人(即牌子頭)の子どもを入るゝにも、白身の人の子どもを入るゝにも、三人の從士あり、亦一人の弟を隨へて、初より乘馬氣力を調へて來よ。我等の處にて前に行かしまるゝことを勵ますに、千戸の官人の子どもには、十人の從士を本の千戸百戸より科斂して與へよ。そ

の父與へたる分民あらば、彼の身自得たる置きたる人口駟馬幾ばくか有らば、昵近の分民より外にて、我等の限りたる限りに依り科斂して、かく科斂して整へて與へよ。百戸の官人の子ごもに五人の従士を、十戸の官人の子ごもに白身の人の子ごもに三人の従士を、只亦法に依り彼の昵近の分民より外にて、只かく科斂して與へよ。勅ありき。千戸百戸十戸の官人眾の人、我等の此の勅を致さしめて聞きてありながら越えたる人は、罪あるごなれ。我等の處に番直に入れられたる人にて避けて爲らざる人、我等の前行くことを難しごせば、別なる人を入れて、その人をば罪なひて、眼の陰（眼力及ばざる處）に遠き地に遣れ。勅ありき。我等の内裏に前に行き

勅を越ゆる罪

千宿衛の長也客捏兀鄰

て學び合はんご云ひて我等に来る人を勿妨げそご宣へり。
 成吉思合罕の勅ありたるに依り、千戸より選びて、百戸十戸の官人の子ごも、その勅に依り選びて出して来て、前に八十の宿衛ありしを八百に爲したり。八百の上に千に満たせよご云へり宿衛に入る者を勿妨げそご勅ありき。宿衛にハ也客捏兀鄰長ごなりて、千夫を知りて居れご勅ありき。（宿衛を也客捏兀鄰統べてと譯すべきなれども、統ぶるの蒙語阿合刺は、阿合即長となると云ふ義なる故に「宿衛を」の「を」に「と」改めたり。下皆これに準ふ也客捏兀鄰は、何人なるか知らず。晃豁壇の）「前に四百の箭筒士を選びたり。選びて、箭筒士に者勒篋の子也孫帖額長ごなりて、秃格の子不吉歹ご議り合ひて居れご云へり。（也孫帖額は、憲宗紀に葉孫脱等と共に「務持兩端坐誘諸王爲亂並伏誅」とあり。者勒篋の子孫の顯れざるは、也孫帖額の誅せられたるが爲ならん。秃格は、即卷四なる統格、木合黎の從弟にし

箭筒士四班の長也孫帖額不吉歹豁兒忽答忽刺ト刺合

て、九十五の千戸の第十に列せり。その子不吉歹は、太祖に代りて許婚の饗に赴きたる不合台と音近けれども、同じきか否か知らず。侍衛と共に箭筒士の班班に入り合ふ時、也孫帖額は、一班の箭筒士に長となりて入れ。不吉歹は、一班の箭筒士の長となりて入れ。豁兒忽答黒は、一班の箭筒士に長となりて入れ。刺ト刺合は、一班の箭筒士に長となりて入れ。〔豁兒忽答黒は、卷十二にも見あり。〕箭筒を帶ぶるものに、侍衛の班班に貼く。箭筒士に、かく長となりて入れ。箭筒士を千に満たせて、也孫帖額長となりて居れ。勅ありき。

千箭筒士の長也孫帖額

八千侍衛の長八人

不合 幹格列扯兒必

前さきに幹格列げれ扯兒ちえ必びこ入りたる侍衛さいゐの上に千せんに満たせて「ホ幹兒おる出ちゆの親族しんぞくより幹格列げれ扯兒ちえ必び〔出幹兒〕は知れしこ宣のりたまへり。」「木合里かの親族しんぞくより不合か〔木合里〕は一千せんの侍衛さいゐを知れしこ宣のりたまへ

阿勒赤歹

り亦魯該いの親族しんぞくより阿勒赤歹あに、一千せんの侍衛さいゐを知れしこ宣のりたまへ

朶歹扯兒必

り。〔阿勒赤歹は、卷六に見えたる合赤温の子阿勒赤歹と名同じけれども、異なる人なり。元史憲宗紀に按只解とあり、憲宗即位の年、葉孫脱等と共に諸王を亂に誘へり。〕一千せんの侍衛さいゐを朶歹だ扯兒ちえ必び知れし。一千せんの侍衛さいゐを

孕豁勒忽扯兒必

朶豁勒忽ど扯兒ちえ必び知れしこ宣のりたまへり。一千せんの侍衛さいゐを主兒ぢゆ扯歹ちえの親

察乃

族ぞくより察乃ちや知れし。一千せんの侍衛さいゐを阿勒赤あの親族しんぞくより阿忽台あ知

阿忽台

れ。〔元史に見えず。たゞ特薛禪の傳に、按陳の弟火忽と云へるは、甲戌の年に哈

阿兒孩合撒兒

老温迤東塗河潢河の閑火兒赤納慶州の地を住所として賜。〕一千せんの侍衛さいゐを阿兒孩あ合撒兒か知れし。二千せんの選えらびたる勇士ゆうを知りて、多おほくの日

は侍衛さいゐこなれ。戦たたかふ日は前まへに立たちて勇士ゆうこなれ。こ勅みことありき。〔卷八なる九十五の千戸の處に、亦魯該は阿兒孩ならんと云ふ疑ひを陳べたれども、こゝに亦魯該の名ある續きに、又阿兒孩合撒兒あるを見れば、同じ人はとも思。〕千戸せん千戸せんより選えらびて來きつるもの、八千はつの侍衛さいゐこなれ

萬の番士よりなれる大中軍

番直の宿老四人
不合阿勒赤歹朶
歹朶豁勒忽

り宿衛は、箭筒士と共に二千となれり。三つ(宿衛、箭筒)并せて萬の番士となれり。成吉思合罕勅あるには「我等の身に貼ける萬の番士を勵まして大中軍となり居れ」と勅ありき。

又成吉思合罕勅ありて、侍衛の四班の宿老たる者に任し不合は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。阿勒赤歹は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。朶豁勒忽、扯兒必は、一班の番士を知りて、番士を整へて入れ。こて、四班の宿老を任して、番直に入る勅を傳へ、番直に入るには、番直の官人己の處に番直する番士を點檢して、番直に入りて、三たび宿り合ひて、代り合へ。番直ある(番直に)人番直を脱さば、その番直を脱

番士の點檢

缺勤の罰

したる番士に三つの答を與へよ。その番士又二たび番直を脱さば、七つの答を與へよ。又その人、身に病なく、番直の官人等に相談なく、又その番士三たび番直を脱さば、三十七の答を與へて、我等の處に行くことを艱しとしたれば、(眼の陰に遠き地に遣らん)と勅ありき。(番直の宿老、蒙語に客失昆幹脱古と云

録に曰く「國朝有四怯薛大官。怯薛者、分宿衛供奉之士爲四番。番三」番直の宿

老は、第三第三の番直に(當番の三日)この勅を番士に聽かせよ

(明)掌護衛的官人、凡換班時、將這言語省會一遍。聽かせずば、

番直の宿老罪となれ。勅を聽きてありて越えば(犯さ)勅の旨に依り、番直を脱さば、番士は罪となれ。と勅ありき。番直の宿老は、長となられたりこのみ云ひて、同等に入りたる我が番

宿老番士の同等

士を我に相談無くて勿責めそ。法度を動かさば、我に告げよ。斬らしむる理あるならば、我等は斬らしむるぞ。打たるゝ理あるならば、臥さしめて打つぞ。長こなれりこのみ云ひて、同等の我が番士を己が手足を致して答打たば、答の報に答を亦拳の報に拳を亦回さん」と宣へり。

千戸より上にあ
る番士

又成吉思合罕勅あるには「外に居る千戸の官人より我が番士は上に在るぞ。外に居る百戸十戸の官人より我が番士の家人は上にあるぞ。我が番士に、外に居る千戸ども、同等となりて竝びて、我が番士と殴ち合はば、千戸の人を罪せん」と勅ありき。

又成吉思合罕勅ありて、班班の官人ごもに勅を傳ふるに

箭筒士侍衛厨官
の勤方

宿衛の勤方

は「箭筒士侍衛等、番直に入りて、晝の行ひを各その道道に行ひて、日の光あるに宿衛に譲りて、外に出でて宿れ。我等の處に夜は宿衛宿り居れ。箭筒士は箭筒を、厨官は器皿を宿衛に渡して去れ。外に宿れる箭筒士侍衛、厨官は、我等湯を飲むまで、聚馬處に坐りて、宿衛に届けて、湯を飲み畢へば、箭筒士は箭筒の處に、侍衛は坐の處に、厨官は器皿の處に復り合へ。班班に入る者は、只只道理に依りこの體例に依りかく爲せ」と勅ありき。「日落ちたる後、斡兒朶の後より前より越え行く人を拏へて、宿衛は拏へて宿りて、明朝宿衛は彼の言を聞け。宿衛は、番直に代り合ふには、その符を渡して入りて來よ。代りて出づる宿衛も、渡して出でて去れ」と宣へり。「宿衛は、夜斡兒

宿衛の威嚴

朶の周圍に臥して門を壓へて立てる宿衛は、夜入る人をば、
 その頭を打割り、その肩を落つるほど斫りて去けよ。急ぎの
 話ある人夜來なば、宿衛に話して、帳房の北より宿衛と一處
 に立ちて話さしめよ。宣へり。宿衛より上の坐には、誰も勿
 坐りそ。宿衛より言なくては、誰も勿入りそ。宿衛の上を誰も
 勿行きそ。宿衛の間を勿行きそ。宿衛の數を勿問ひそ。宿衛の
 上を行く人を宿衛は拏へよ。間を行く人を宿衛は拏へよ。數
 を問へる人をば、宿衛は、その人を、その日乗れる驢馬鞍あり
 轡あるを、被たる衣服ごめに宿衛は取れ。勅ありき。額勒只
 吉歹は、信任ある人なるに、夕に宿衛の上を行けるありて、宿
 衛にいかんぞ拏へられける。(額勒只吉歹は、合赤溫の子阿勒赤歹、即
 世系表に按只吉歹とある人と名似た)

れども、異なる人なり。後文にも元史にも屢見ゆ。八十八功臣の中には見えず。か
 の名前の内に阿勒赤と云ふ人あり、餘り名の聞えぬ人なり。阿勒赤吉歹の吉歹
 を脱したるにあらすやとも疑はる。(

成吉思汗實錄卷の九終り。

成吉思汗實錄卷の十

老宿衛

成吉思汗合罕宣はく雲ある夜我が天窓ある房の廻りに臥
ちんぎすか がんのりたま 額兀列
 して静に睡らしめてこの位に到らせたる老功の我が宿衛
して 静に 睡らしめて この位に 到らせたる 老功の 我が宿衛
幹嚕克訥塔 温塔兀勒 額捏 幹嚕 温都兒 幹嚕 幹脫古思 額額噠
 星ある夜我が帳殿の房の周圍に臥して蒲團の内を驚かさ
星ある 夜 我が 帳殿の 房の 周圍に 臥して 蒲團の内を 驚かさ
星 帳殿 蒲團 驚かさ
 ざりし慶ある我が宿衛は高き位に到らせたり變動し居る
ざりし 慶ある 我が 宿衛は 高き位に 到らせたり 變動し 居る
幹勒澤 温都兒 幹嚕 幹嚕 幹嚕 幹嚕 幹嚕 幹嚕
 風雪に顛かし居る冷氣に瀉ぎ居る雨に我が編壁ある房の
風雪に 顛かし 居る 冷氣に 瀉ぎ 居る 雨に 我が 編壁ある 房の
風雪 顛かし 居る 冷氣 瀉ぎ 居る 雨に 我が 編壁 房の
 周圍に休を爲さず立ちて心を安からしめたる誠の心ある
周圍に 休を 爲さず 立ちて 心を 安からしめたる 誠の 心ある
周圍 休を 爲さず 立ちて 心を 安からしめたる 誠の 心ある
 我が宿衛は快活なる位に到らせたり亂れ居る敵の中に我
我が 宿衛は 快活なる 位に 到らせたり 亂れ 居る 敵の 中に 我
我が 宿衛は 快活なる 位に 到らせたり 亂れ 居る 敵の 中に 我

大侍衛
老勇士
大箭筒士

愛撫すべき萬の番士

が土堤ある家の周圍に、瞬もせず勸めて立ちたる頼ある我が宿衛、樺皮の箭筒を動し爲せば後れて立たざりし快く行く我が宿衛、慶ある我が宿衛、老宿衛（宿衛士）と云へ。幹歌列、扯兒必ご入りたる七十の侍衛、ごもを大侍衛と云へ。阿兒孩（即ち阿兒）の勇士、ごもを老勇士と云へ。也孫帖額、不吉歹等の箭筒士、ごもを大箭筒士と云へ。ご勅ありき。

「我が九十五の千戸より身に貼く近臣に選びて來つる萬の親近なる我が番士を、久後我が位に坐りたる子ごも、我が子孫の子孫は、この番士を遺念の如く想ひて、怨みしめず、善く扱へ。この萬の番士を我がめでたき福の神と云ひて居らずや」ご宣へり。

宿衛の掌る雜務

又成吉思合罕宣はく「幹兒朶の侍女（蒙語）扯兒賓幹（侍從）の家僮（蒙語）格倫可兀惕子（家の）駱駝飼（蒙語）帖篋額臣（元史兵志に「牧駱駝」あり）牛飼（蒙語）忽客臣を宿衛は取締めて、幹兒朶の房車を調へよ。纛鼓朶囉（明本語譯には下とあり）鎗を宿衛調へよ。器皿をも宿衛調へよ。我等の飲物食物を宿衛支度せよ。稠き肉の食物をも宿衛支度して、煮よ。飲物食物不足ならば、支度せられたる宿衛に尋ねよ。ご宣へり。箭筒士に飲物食物を配るに、支度したる宿衛に相談無くて勿配りそ。食物を配るに、まづ宿衛より始めて配れ。ご宣へり。幹兒朶の房に入り出づるを宿衛整へよ。門には宿衛の門者（蒙語）額兀迭臣（家）に倚りて立て。宿衛より一人入りて大酒局を執りて居れ。ご宣へり。宿衛より營盤官（蒙語）

嫩秃兀臣（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」行きて幹兒朶の房を下せ（据ゑつ）宣へり。我等鷹使ひ圍獵する時、宿衛は我等と共に鷹使ひ圍獵しに行け。車（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」に獲物の半を分けて置き（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」）

宿衛の軍を出さざる理由

又成吉思合罕宣はく我等の身軍に出でずば、宿衛は我等より外に軍に勿出でそ（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」）

車大老營を起つ時居る時調ふること容易からんや。かく重き離れ離れの働きあることを云ひて、我等より外に別に軍に勿行きそ（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」）

宿衛の陪審また雑務

幹兒朶の右左前なる箭筒士侍衛の屯營

又勅あるには失吉忽秃忽の裁斷に、宿衛より箭筒弓甲器械を調へて裁斷を共に聽け（元史兵志に「預怯薛之職而居禁近者分冠服弓矢食飲文史」）

殿中を監視する
朶歹扯兒必

勇士ゆうしごもは、斡兒朶おどの前にまへ行けゆと宣のりたまへり。宿衛しゆくゑいは、斡兒朶おどの家いへ車くるまを調ととのへて、斡兒朶おどの前まへの左ひだりの邊ほとりに行けゆと宣のりたまへり。(明譯ちやうてんの
まへのひだりみぎりの字脱ちたるなるべし。)許多あまたの番直はんちよくする侍衛せいゑいを、斡兒朶おど
の周圍まはり、斡兒朶おどの家いへ僮こを、馬飼うまかひ、(語阿都元臣)羊飼ひつしかひ、(語豁你臣)兵志へいし
に、(牧羊者曰火)駱駝らくだ飼かひ牛飼うしかひを、常つねに朶歹扯兒必おどちえり必氣きを付つけて居をれ、
你赤とあり。)ご任ことよまし給たまへり。朶歹扯兒必おどちえり必は、常つねに居をて、斡兒朶おどの後うしろより枯草かれくさ
を喫くひて乾糞かんぶんを燒やきて行ゆけと勅みことありき。(末の一語は、掃除せよとの意なるべきか。確なら
ず。朶歹扯兒必は、一千の侍衛の長にて、番直の宿老即ち四怯薛長の一人となり、兼ねて殿中監の職務をも執れるなり。この職務は太祖始めて合罕となれる時、
家の内の婢僕どもを統べんと云へるに同じ。)

合兒魯兀惕の降
附

忽必來那顏くびらいのやんに合兒魯兀惕かゑるうとを征こむけさせたり。合兒魯兀惕かゑるうとの
阿兒思闌罕あゑしらんかんは、忽必來くびらいに降くだり來きぬ。忽必來くびらい那顏のやんは、阿兒思闌罕あゑしらんかん
を率ひきゐ來きて、成吉思合罕ちんぎすかかんに見まえさせたり。敵對てきたいせざりきこと、
成吉思合罕ちんぎすかかんは、阿兒思闌あゑしらんを恩賞おんしょうして、女むすめを與あたへんと勅みことありき。

合兒魯黒の異文

(合兒魯兀惕は、合兒魯黒の複稱、唐書の葛邏祿なり。葛邏祿は、鐵勒諸部の一にして、唐の世に北庭の西北金山の西に居り、その盛なる時は碎葉怛邏斯の諸城をも有ちしが、宋の世に至りて國衰へ、西遼の屬國となれり。烏古孫仲端の北使記元史鐵邁赤の傳に合魯親征錄太祖紀沙全の傳儒學伯顏の傳に哈刺魯哈刺解の傳に哈魯也罕的斤の傳に匣刺魯とあり。鞍耕錄の色目三十一種の中には哈刺魯とも匣刺魯とも書けり。珀兒沙の亦思塔黑哩の書には喀兒列怯、普刺諾喀兒闌尼の紀行には科囉刺と云へり。元史地理志の西北地附錄には柯耳魯とありて、經世大典の圖に柯耳魯は阿力麻里即ち阿勒馬里克今の伊犁の西北に載せたり。親征錄に辛未春、上居怯連河時、西域哈刺魯部主阿昔蘭可汗來歸、因忽必來那顏見上とあり。元史も太祖六年辛未の條にこの事を記せり。多遜は、主吠尼の史を譯して、突兒克喀兒魯克の酋長にして喀牙里克の君なる阿兒思闌汗、阿勒馬里克の君なる斡匣兒二人とも合喇乞台の古兒汗の臣なりしが、一二年來て成吉思汗に從ひ、成吉思汗は、阿兒思闌に宗女を與へたりと云へり。喇失惕の記載は、秘史に同じくして、只皇女をば主吠尼と同じく宗女とし、阿兒思闌汗の號存すべからざるに依り、撒兒惕の號を賜へりと云へり。合兒魯兀惕の罕は、喀牙里克の君を兼ねるとあれば、その國は、喀牙里克の邊、即ち巴勒喀什湖の東南にあるべし。喀牙里克は、嚙卜嚙克の紀行に喀亦刺克と云ひ、元史憲宗紀二年夏分遷諸王於各所の條に、海都於海押立地とありて、太宗の孫なる海

喀牙里克の君を兼ねる合兒魯黒罕

世世元の駙馬

都の分地となり、海都の亂に世祖の兵は阿勒馬里克に進み、阿刺套山を隔てて相對し居たり。大佐裕勒はその地は、今の關帕勒に近しと云へり。一八五七年、ある塔兒人、關帕勒の古墳より古き金環を寶石と共に發見し、その金環に突兒克字にて阿兒思蘭と刻みてありしは、珍らしき堀出物なりき。露西亞の地學協會の報告、一八六七年第一編第二百九十一頁に、諸公主表に「脱烈公主、適阿爾蘭子也。先不花駙馬とありて皇女とも宗女とも云はず。又表には阿兒思蘭を駙馬と云はざれども、諸書みな阿兒思蘭に妻せたりとあれば、これも先に阿兒思蘭に配し、後にその子に配したるを公主表は諱みて後の駙馬のみを擧げたるならん。又脱烈公主の次に「八八公主、適也先不花子、忽納答兒駙馬、某公主、適忽納答兒子、刺海涯里那駙馬」とあれば、阿兒思蘭の後には、曾孫までも世世元の駙馬となり。」

篋兒乞惕の遺孽の勦滅

速別額台巴阿秃兒は、鐵の車にて、篋兒乞惕の脱黑脱阿の

丁丑の年なる嶺河の戦

忽秃赤刺温等なる子ごもを追ひに出征して、垂河に追詰めて窮めて來ぬ。(親征錄に曰く「辛未、遣將脱忽察兒、率騎二千、出哨西邊、戎丁西前鋒、脱忽察兒二千騎、合至嶺河、遇其長、大戰、盡滅、蔑兒乞還」と云ひ、喇失惕も、この戦を記して牛の年の事とし、嶺河を眞河と書けり。元史本紀は、三年戊辰の也兒石河の戦に「討蔑里乞部、滅之」と書きて、十二年丁丑には速不台の征戦を載せず。速不台の傳に曰く「滅里吉部、強盛不附。丙子、帝會諸將於秃兀刺河之黑林、問

康都に奔れる忽都

誰能爲我征滅里吉者。速不台請行。帝壯而許之。乃選裨將阿里出領百人先行、覘其虛實。速不台繼進云云。己卯、大軍至蟾河、與滅里吉遇、一戰而獲其二將、盡降其眾。其部主霍都奔欽察、速不台追之、與欽察戰于玉峪、敗之。丙子、十二年丁丑の河と書き、その戦を一二一年に垂河に戦ひ、卯の年に餘孽悉く平ぎたるならん。親征錄の嶺河、喇失惕の眞河、多遜の哲姆河、速不台の傳の蟾河は、祕史の垂河と同じきか異なるか、知らず。霍都の欽察に奔れることは、卷八にも、忽都合惕赤刺温等の篋兒乞惕は、康鄰欽察兀惕を過ぎ去りきと云ひ、土土哈の傳には、太祖征蔑里乞、其主火都奔欽察、欽察國主亦納思納之。太祖遣使諭之云云。亦納思答云云。太祖乃命將討之とあれども、西域の諸史には、更にその事なし。喇失惕は、忽都合惕察克に奔らんとしたるを、蒙古の軍に捕へ殺されたりと別列津卷一第七十三頁に「云ひ、多遜の史には、篋兒乞惕の會秃克脱干は、蒙古に逐はれ、眾を率ゐて氈篤の北に走り、その下に殺され、蒙古はその眾を海哩哈米赤兩河の間に敗りて滅ぼせり」とあれども、欽察に奔れりと云へるは、傳聞の誤りなるべし。(實)

古出魯克罕の勦滅

者別は、乃蠻の古出魯克罕を追ひて、撒哩黑昆に追詰めて、古出魯克を窮めて來ぬ。(親征錄戊寅、太祖十三年、木華黎國王南征の次に別遣大將哲別、攻曲出律可汗、至撒里桓地、克

古出魯克の西遊纂奪

之とありて、その簡略なること、祕史と同じ。遼史天祚紀の末に、西遼の興亡を附記し、遼の德宗耶律大石の自立より大石の妻感天太后塔不煙、その子仁宗夷列

を略きたれば、亦都兀惕の辭命として秘史に載せられたる面白き韻文は、骨拔泥鱒となれり。公主表高昌公主位の處に、也立可敦公主、太祖女適亦都護巴而述阿兒忒的斤とあり。可敦は、安敦の誤、也立安敦は、即ち阿勒阿勒屯なり。喇失惕は、正后の出にあらずと云へり。

拙赤の北征

兔の年（我が土御門天皇承元元年丁卯、宋の開禧三年、金の泰和）拙赤を右の手の軍にて林の民の處に出征せしめたり。不合は嚮導して往きたり。

忽都合別乞の降附

（親征録には、この年遣案彈不兀刺二人、使乞力吉思部とありて、拙赤北征の事なし。拙赤北征の事は、この年より十一年後なる戊寅の年、太祖十三年、哲別の曲出律を滅したる次に記し、先吐麻部叛上遣徵兵乞兒吉思部、不從亦叛去、遂先命大太子往討之、以不花爲前鋒とあり。集史もほゞ同じ。不花は即ち不合、八）幹亦喇惕の忽都合別乞（前に十一部十八功臣の中なる不合駙馬なり）幹亦喇惕の忽都合別乞（前に十一部の人）は、秃綿（萬）幹亦喇惕の前に降り入りて來ぬ。來て拙赤を引きて、秃綿幹亦喇惕の處に導きて、失黒失惕に入らしめた

り。（親征録には、丁卯の年、乞力吉思部降附し、その翌年戊辰の冬、二たび脱脫曲り。出律を征する時、幹亦刺部長忽都花別吉等、遇我前鋒、不戰而降。因用爲鄉導。至也兒的、石河云云とありて、拙赤に降れる忽都合を脱黒脱阿征伐の軍に降れりとせり。喇失惕も同じ。洪鈞の朮赤補傳の自注に曰く、本紀、幹亦刺之降在三年、

幹亦喇惕不哩牙揚諸部の降附

而乞力吉思之附在二年。考之西圖、應從秘史。拙赤は、幹亦喇惕不哩牙惕先定幹亦刺由東而西、軍程乃合と云へり。

乞兒吉速惕の降附

巴兒渾兀兒速惕合卜合納思康合思秃巴思を降して、（喇失惕「客姆河の上流に八河ありて、幹亦喇惕はその左に居り、その近き東に兀喇速惕帖連郭惕客思的米なる林の民は、拜喀勒湖の西に居りて、幹亦喇惕乞兒吉思と鄰り合へり、また、拜喀勒湖の東に庫哩秃刺思不哩牙惕馬惕四部あり、都て巴兒古惕と云ふ」と云へり。巴兒渾は、即ち巴兒古惕にて、卷一にその部の人巴兒忽歹篋兒干あり。太祖紀に八刺忽とあるも、巴兒古惕なり。喇失惕は、四部の總名とすれども、こゝに不哩牙惕と並べ擧げられたれば、一部の名にも用ひたるなり。兀兒速惕は、即ち兀喇速惕なり。合卜合納思は、元史類編なる朮赤の傳に大方通鑑を引きて、憾哈納思とあり。親征録に憾哈思とあるは、納の字を脱せるなり。元史地理志には、憾合納、劉哈刺拔都魯の傳には、慈哈納思と書けり。その地の事は、元史譯文證補の地理志西北地附錄釋地の下に詳なり。康合思秃巴思は、知らず。）秃綿乞兒吉速惕の處に到れば、（多遜曰く、乞兒吉速惕は、乞兒吉思の複稱なり。甚廣く、安噶喇河の西、阿勒台山の北の東より居り、乃蠻はその南東にあり、客姆河、客姆客姆主惕はその境内にあり、俗は遊牧なれども、城郭もありと云へり。）乞兒吉速惕の官人も迪亦納勒、阿勒迪額兒、幹列別克的斤なる乞兒吉速惕の官人も降り入りて、白き海青も白き駟

馬はごも黒くろき貂てう鼠そごもを持もち來きて、拙ちゆ赤ちやくに見まみえたり。（親征錄には遺案彈不兀

刺二人使しを力ちから吉思部其長幹羅思亦難及阿忒里刺二人偕い我使し來き、獻けん白海青名鷹也。太祖紀には野牒亦納里部阿里替也兒部皆遣使來獻名鷹とありて本書と異なり。別喇津は喇失惕を譯して阿勒壇不刺の二人乞兒吉思に使し、まづ一部に至り、と云ひて部の名も酋長の名も文字見えずと注し、次の一部を也迪幹命酋長を兀嚕思亦納勒と云ふ。二酋厚くもてなし、阿里克帖木兒阿惕黑喇黑二人を遣して白き獵鳥を獻れりと云へり。錄の亦難紀の亦納里は亦納勒の訛なり。多遜は喇失惕を引きて亦納勒は乞兒吉思にて兀嚕思又は幹囉思はその名なるべし。名の見えざる酋長は阿勒迪額兒ならん。元史は二つとも人の名を部の名に誤れり。阿里克帖木兒は額兒篤曼の譯に阿里別克帖木兒とあり、即ち幹列別克的斤なり。秘史に無き一使を阿惕黑喇黑と云へるに據れば、錄の阿忒里刺は、黒を里に誤りたるにて、秘史の委兀惕の使を修正秘史は乞兒吉思に移せるなり。

失し必び兒ゑ客け思す的ち音い巴は亦い惕と禿と合か思す田てん列れ克く脫と額え列れ思す塔た思す巴は只ぢ

吉ぎ惕とより這こ廂ななる林はの民たみを拙ちゆ赤ちやく降くだして、乞き兒ゑ吉ぎ速す惕との萬ばん戸こ

千せん戸この官くわん人にんごもを林はの民たみの官くわん人にんごもを伴つれ來きて、成ちん吉ぎ思す合か

罕かんに白しろき海かい青せいごも白しろき驢せん馬ばごも黒くろき貂てう鼠そごもをもて見まみえ

失必兒以南林民の降附

昔別哩亞の名の起り

させたり。（失必兒は今の昔別哩亞なり。喇失惕は乞兒吉思の事を述べて、そ

と云ひ、元史玉哇失の傳に、與海都將某某等戰於亦必兒失必兒之地とあり。篋撒列克阿刺卜撒兒第十四世紀の前半の人は、昔必兒即阿必兒と書き、亦奔阿喇卜沙は乞魄察克は北は阿必兒即昔必兒に界すと云へり。合塔蘭地圖の北邊の薛不兒は明に昔必兒を表せり。西紀一三九四年より一四二七年まで亞細亞の諸國に遊び、帖木兒大王の遠征にも伴ひし失勒篤別兒格兒の書きたるものには、亦必思昔不兒と云ふ國の名あり。然れどもこの昔必兒の名は、直に今の昔別哩亞となれるに非ず。第十六世紀の頃、亦兒的石河の濱にて今の脱孛勒思克より四里餘り河上に非ず。昔必兒と云へる塔塔兒の城ありて、一五八一年に也兒馬克に取られ、その後嚕西亞人はその名を採りて北亞細亞の總名に推廣めたり。客思的音は、親征錄に克失的迷とあり、即喇失惕の客思的米なり。田列克は、卷八に帖良古惕は、唐書の鐵勒より出でたるならんと云へり。脱額列思は、卷八に脱幹列思とあり、即喇失惕の禿刺思なり。巴亦惕禿合思塔思巴只吉惕は、未考へず。親征錄なる戊寅尤赤北征の條には、以不花爲先鋒追乞兒吉思至亦馬兒河而還。太子領兵涉謙河冰順下、招降不困克兒爲思憾哈思帖良兀克失的迷火因亦而干諸部とあり。亦馬兒河は知らず。謙河は即客姆河今の也尼塞河の上流なり。不困克兒爲思は、讀み難し。恐らくは誤脱あらん。火因亦而干は、秘史には槐因亦兒堅とあり。槐因は、讀み難し。亦兒堅は民にて、林の民なり。即諸部の統名にして、部の名に非ず。

幹かん亦い喇ら惕との忽く都と合か別べ乞きを迎むかへ、先さきに降くだり、禿と綿めん幹かん亦い喇ら惕とを

巴只吉惕は失必兒の西にある部落なり。卷十一なる速別額台西征の條に注あり

幹亦喇惕の駙馬兄弟

脱喇勒赤と哈答との同異

牽ひきゐて來きぬこて恩賜おんしして、彼かれの子こ亦い納な勒る赤ちに扯ちえ扯い亦い干げんを與あたへたり。亦い納な勒る赤ちの兄あに脱と喇ら勒る赤ちに拙ちゆ赤ちの女むすめ豁るい雷かん罕かんを與あたへたり。喇失惕は、成吉思汗の第二の女扯扯干は、忽秃合別乞の子脱喇勒赤に嫁げり。喇失惕は、成吉思汗の第二の女扯扯干は、忽秃合別乞の子脱喇勒赤に嫁げり。云へり。扯扯干は即扯扯亦干なれども、脱喇勒赤は亦納勒赤に非ずし。却てその兄脱喇勒赤に似たり。公主表もそれと同じく、延安公主位の處に、閻干公主、適脱亦列赤駙馬とあり。然らば豁雷罕の夫を亦納勒赤とするかと云ふに、然らず。閻干公主の前に、火魯公主、適哈答駙馬とありて、火魯は豁雷罕の下略に似たれども、哈答は亦納勒赤にも脱喇勒赤にも似ず。錢大昕の氏族表は、秘史と元史とを折衷し、哈答、一作脱劣勒赤、尙太祖孫女火雷公主、脱亦列赤、一作亦納勒赤、尙太祖女閻干公主と書きたれども、哈答は、八十八功臣の内に既に合歹古喇堅とありて、卷十二にも合歹あり、親征録の哈台、憲宗紀の合答、多遜に降附して駙馬となれる人なれば、その別人なること明なり。然れども哈答合歹を脱喇勒赤に非ずとし、火魯火雷を豁雷罕に非ずとすれば、又不都合なることあり。火魯公主は、閻干公主と共に、公主表延安公主位の初に擧げられ、その次に公主三人ありて、末に延安公主、適延安王也、不干とあり、食貨志には、火雷公主位、丙申年、分撥延安府九千七百九十六戸とあり。閻干は、即扯扯干扯亦干にして、幹亦喇惕の忽都合別乞の子に嫁ぎたること確なる上は、延安王の家は、即忽都合の子孫にして、火雷公主は、始めてその家に嫁ぎたる人なれば、その夫は必ず幹亦喇惕の首領なるべし。然らずば延安公主位を火雷公主位とも云ふべき筈なし。然らば哈答合歹は、果して脱喇勒赤なるか。この疑ひはいかに考へても解き得ず。阿刺合別乞元史の阿刺汪古惕的汪古惕の阿刺忽失に與へたり。この事につきては、卷八に委を定められたる時は、まだ公主を娶らざりし時なり。成吉思合罕は、拙赤を恩賞して宣はく我が子ごもの兄あになる汝なんぢは、家いへより纔わづかに出いて、道みち好よくある遠往ゆきたる地ところに、男をとこ駙馬せんばを傷きずけず苦くるめずして、福さいはひある林はやしの民たみを降くだして來きぬ。民たみを與あたへんと勅みことありき。

汪古惕の駙馬

拙赤初陣の功

孛囉忽勒の秃馬揚征伐

勇婦孛脱灰

又また孛ほ囉ろ忽く勒る那の顔げん元史太祖紀鉢魯完を豁ご哩り秃と馬ま惕との民たみの處ところに出しゆつ征せいせしめたり。豁哩秃馬惕は、卷一に見えたり。豁哩は、善と云ふ美稱麻部元史本紀には秃滿部とあり。秃馬惕の民たみの官人くわんじん歹都忽勒の莎豁しよご兵志三には火里秃麻ともあり。秃馬惕の民たみの官人くわんじん歹都忽勒の莎豁しよご兒死にたれば、その妻つま孛脱灰の塔兒渾の勇婦孛脱灰は、秃馬惕の民たみを知しりて居をりき。歹都忽勒莎豁兒は、明譯文に歹都秃勒とあり、忽を秃に誤り、莎豁兒を略けり。倭勒甫の書に塔秃刺克速略兒とある

李囉忽勒の殺され

成吉思汗實錄卷の十

三五〇

は、音稍近けれども、刺克は、忽勒を倒にせるに似たり。親征録に都刺莎（合兒とあるは、都の上夕又は塔を脱し、刺の下克の字を略けるなり。）李囉忽勒那顔到りて、三人にて、大軍より前へ歩み往きて、夕暮に覺えず難き林の中に徑に依り歩みたれば、彼等の斥候に後より脅されて、徑を阻みて、李囉忽勒那顔を拏へて殺しけり。秃馬惕は李囉忽勒を殺せりと知りて、成吉思合罕甚く怒りて、自ら出馬せんごしたれば、李幹兒出、木合黎二人は、成吉思合罕を止まるまで諫めたり。却朶兒別惕（朶兒邊の複稱）の朶兒伯多黒申（親征録都魯伯）に任し、軍を嚴に整へて、長生の上帝に禱りて、秃馬惕の民を降さんと試みよと勅ありき。朶兒伯は、軍を整へて、前に軍の行きたる、斥候の守りたる路徑の口口に、虚しき勢を張りて、紅き強牛（野牛の一種）の行きたる路に依り、軍士

朶兒伯多黒申の秃馬惕征服

拏へられたる二將の助かり

ごもに號令し、軍の數ある（數に具）人心臆せば打たんが爲に、人ごとに十の笞を負はせて、斧鑕（蒙語兀哈里、義を知らず、明譯に従れども、これ）鋸鑿なる人毎の（人ごとに）器械を整へさせて、紅き強牛の行きたる路に依り、路に立てる樹ごもを斷ち斫らせ、て、鋸らしめて路をなして、山の上を上りたれば、秃馬惕の民の天窗の上より、不意にて筵會して居る處を虜へたり。前に豁兒赤那顔、忽都合別乞二人は、秃馬惕に拏へられて、李脱灰塔兒渾の處にそこにありき。豁兒赤の拏へられたる理由は、秃馬惕の民の女子ごもは美しくあり、三十の妻を取れご勅ありたるにつき、秃馬惕の民の女子ごもを取らんごて往きたるに、前に降りたる民は却て敵となりて、豁兒赤那

成吉思汗實錄卷の十

三五二

三將の恩賜

顔を拏へたりき。豁兒赤は禿馬惕に拏へられたり。成吉思合罕知りて、林の民の行は、忽都合知れるぞ。宣ひて遣りたれば、忽都合別乞又拏へられき。こたび禿馬惕の民を降し畢へたれば、孛囉忽勒の骨の故に百の禿馬惕を賜へり。(孛囉忽勒の遺族に賜はり)豁兒赤は、三十の女子を取れり。忽都合別乞に孛囉灰塔兒渾を賜へり。(親征録は、禿馬惕征伐を丁丑太祖十二年に移し、簡短顔都魯伯二將討平之、博羅渾那顏卒於彼と記せり。元史は、それよりも簡略にて、たゞ是歲禿滿部民叛、命鉢魯完朶魯伯討平之とありて、鉢魯完の殺されたる事も云はず。蓋四傑の一人なる)

母と子弟とに民の分配

成吉思合罕勅ありて、母に子どもに弟ごもに民を分けて與へん。さて與ふる時、國民を聚むるに艱難したるは、母なるぞ。我が子どもは、拙赤なるぞ。我が弟ごもの末は、幹惕赤

答阿哩台の處分

斤なるぞ。宣ひて、母には幹惕赤斤の分前こなして萬の民を與へたり。母は、不足に思ひて聲をなさざりき。拙赤に九千の民を與へたり。察阿歹に八千の民を與へたり。幹歌歹に五千の民を與へたり。脱雷に五千の民を與へたり。(元史の宗室世系表に、太祖皇帝六子、長朮赤太子、次二察合台太子、次三太宗皇帝、次四拖雷、即睿宗也。次五兀魯赤、無嗣。次六闊列堅太子とあり。拖雷まで四人は、光獻翼聖皇后の子なり。兀魯赤闊列堅は、庶子にしてかつ)合撒兒に四千の民を與へたり。阿勒赤歹に二千の民を與へたり。別勒古台に一千五百の民を與へたり。(世系表に、烈祖神元皇帝五子、長太祖皇帝、次二搠只哈兒王、次三哈赤温大王、次四鐵木哥幹赤斤、所謂皇太弟、國王、幹嗔那顏者也。次五別里古台大王とあり。搠只哈兒は、太祖紀に、皇弟哈撒兒、食貨志に、搠只哈撒兒、大王とあり。表の哈兒は、撒の字を脱したり。合赤温は、早く死にたる故に、その子に民を與へたり。この阿勒赤歹も、亦魯該の親屬なる阿勒赤歹も、卷九なる額勒只吉歹とは名稍異なり。元史にも、太宗紀に、按赤帶、定宗憲宗世祖紀に、按只帶とありて、阿勒赤吉歹と云へる事無ければ、世系表なる按只)答阿哩台(卷一の答哩台、幹惕赤斤、吉台の吉の字は、恐らくは、衍字ならん)答阿哩台(太祖紀、答力台、世系表、答

里眞食貨志太祖（叔荅里眞官人）は、客咧亦惕に與したりきて「眼の背處に黜しりぞけん」（宣へば、）孛斡兒出、木合黎失吉忽秃忽三人言はく「己が火を滅すが如く、己が家を壊るが如く、爾の善き父の遺念は、獨爾の叔父残りてあるを、いかんぞ棄てん。彼の氣を附けざりしことを勿な想ひ」そ爾の好き父の末弟に營盤の煙を立てさせ合ひて居れ」云はれて、鼻より煙搶くまで明かに話され（意明ならざれども、明本太祖心下辛酸）「諾へり」きて、好き父を想ひて、孛斡兒出、木合里失吉忽秃忽三人の話にて静まりたるぞ（譯明怒遂息了）。（好き父以下は、敘事の文なり。原文に太祖の語氣として、我の字を末に加へたるは、誤りならん。）

母に斡惕赤斤に萬の民を與へて、官人ごもより古出闊闊出種賽豁兒合孫（七八十八の功臣の中に第十）四人を傳けたり。拙

赤には忽難蒙客兀兒客帖（功臣の第七第）三人を傳けたり。察阿歹には合喇察兒蒙客亦多忽歹（功臣の第二十九第）三人を傳けたり。又成吉思合罕宣はく「察阿歹は、猛くあり。細なる性あるなり。闊客搠思（即闊搠思、功臣の第三十）は、晩く早く（朝夕）前に居て、思へる事を語りて居れ」勅ありき。（譯明又說、察阿歹性剛。子細教闊客搠思早晚根前說話者衍字にて、細なる性あるは、闊客搠思に係る詞ならん。）斡歌歹には亦魯格（即亦魯該、功臣の第十一）二人を傳けたり。拖雷には哲歹（功臣の第二十）巴刺（功臣の第三十五なる巴刺、搠斡囉納兒）二人を傳けたり。合撒兒には者卜客（功臣の第四十四）を傳けたり。阿勒赤歹には察兀兒孩（功臣の第五十八）を傳けたり。

晃豁塔惕に合撒兒の打たれ

晃豁塔惕（晃豁壇の複稱）の蒙力克額赤格の子ごも七人ありき。七

人の中に闊闊出帖卜騰格哩(云ふ神巫)ありき。(元史憲宗紀の初に母曰莊聖太后怙烈氏歲戊辰十二月三日生帝時有黃忽答部知天象者言帝後必大貴故以蒙哥爲名蒙哥華言長生也)とあり。黃忽答は、即晃豁塔惕にして、いはゆる天象を知られる者は、即この帖卜騰格哩なり。歲戊辰は、太祖即位の三年なれ。その七人の晃豁壇は、合撒兒を黨して打ちたりき。合撒兒は七人の晃豁壇に、黨して打たれたり。成吉思合罕に懇へたれば、成吉思合罕は、別の事にて怒りて在せる間に申したる故に、成吉思合罕は、怒の裏に合撒兒に宣はく「命あるものに勝たれざる人」なりき。汝(明譯)你平日説人不能敵。いかにぞ勝たれたる。汝云はれて、合撒兒涙を墮し起ちて去りて、合撒兒憂へて三日來ざりき。そこに帖卜騰格哩は、成吉思合罕に白さく「長生の上帝の勅にて罕を定むる神告を宣へり。一次は帖木眞國を

帖卜騰格哩の讒言

太祖の性急

取れ。と宣へり。一次は合撒兒を。と宣へり。合撒兒を圖らずば、〔事〕知られずあるぞ。と云はれて、成吉思合罕は、その夜出馬して、合撒兒を拏へに往きたれば、古出闊闊出二人は、合撒兒を拏へに往きたり。と母に告げけり。母知る。夜便續きて、白き駱駝に引かせて黒き車にて夜通し行きて、日出づる頃到れば、成吉思合罕は、合撒兒の袖を縛りて、その帽帯を褫ぎて、その言を問ひ居る處に、母に到られて、成吉思合罕驚きて母を畏れたり。母怒りて到りて車より降り、母自合撒兒の縛れる袖を解きて放し、その帽帯を合撒兒に與へて、母怒りて氣(怒氣)を壓へかね、盤脚坐て兩の乳を出して兩の膝の上のせて言はく「見たりや。汝の乳(汁)を飲みたる乳(房)は、此なり。この尋

母に怒られたる太祖の愧懼

合答命

ね追ひて、胞衣を咬みたる、臍帶を斷ちたる合撒兒は、何をか
 爲たる。合撒兒は、猛き野犬の名を采りて名づけたるなり。故にその野犬の
 猛く生れたるさまを韻語に云ひて、合撒兒の勇猛なるに譬へたり。
 帖木眞は、我が此の一つの乳を盡したりき。合赤温、幹惕赤斤
 は、二人となりて一つの乳を盡さざりき。合撒兒こそは、我が
 兩の乳皆を盡して、我が智寛になるまで休ましめて、智を寛
 になしたりき。それが爲に技能ある我が帖木眞は、智云云。こ
 に脱文あり、補技能ある我が合撒兒は、射る力技能ある故に、叛
 きて語譯に交參とあれど出でたるを鏑矢射て降らしめたりき。
 驚きて出でたるを遠箭射て降らしめたりき。今敵の人を窮
 めたりと云ひて、合撒兒を見る用ふる能はざるなり、汝なんぢ云
 へり。母を休ましめ畢へて、成吉思合罕宣はく、母に怒られて、

帖木騰格哩の横

畏れも畏れたり、羞ぢも羞ぢたり、我われ宣ひて、退かん、我等われら宣
 ひて退きたり。母に知らしめず陰に合撒兒の民を取りて、
 合撒兒に千四百の民を與へたり。母知りて、心に憂へ原文に
 るを、明譯に依りて補へり。早く老いたる理由はかくあり。札刺亦兒の者ト
 客は、そこに驚きて、巴兒忽眞に入り逃れたり。
 その後九種の方言ある民、帖木騰格哩の處に聚りて、成吉
 思合罕の聚馬處より多く帖木騰格哩の處に聚るこなれり。
 かく聚れる時、帖木格幹惕赤斤に屬へる民は、帖木騰格哩の
 處に去りき。幹惕赤斤那顔は、去りたる民を索めに、莎豁兒こ
 云ふ使を遣りき。帖木騰格哩は、莎豁兒使に言へらく、幹惕赤
 斤、汝等二女使となりきと云ひて、この言意通ぜず。二女とは、莎豁兒
 と馬とを云ひ、莎豁兒を馬に比べ

斡惕赤斤の泣き
訴へ

女に比べて辱めたるならんか。莎豁兒使を打ちて歩ませせてその鞍を負はせて回らしめき。斡惕赤斤は、莎豁兒使を打ちて歩ませ致せられて、明朝斡惕赤斤自帖卜騰格哩の處に往きて言はく「莎豁兒使を遣りたれば、打ちて歩ませ致せき。今我民を索めに來つ」と云はれて、七人の晃豁壇は、斡惕赤斤をこゝよりそこより圍みて「莎豁兒使を汝の致せたるは、善く有り」と云ひて、（譯明）你如何敢差人來取百姓とあれば、原文には打消拏へんと打たんとぞ做さるゝに懼れて、斡惕赤斤那顏言はく「使を我が致せたるは、善からず」と云ひき。七人の晃豁壇言はく「善からずあらば、懺悔して跪け」と云ひて、帖卜騰格哩の後より跪かせけり。民をも與へられずして、斡惕赤斤は、明朝早く成吉思合罕に、

李兒帖兀眞の概
み言

起きざるに寢床の内に在す處に入りて、哭き跪きて申さく「九種の方言ある民は、帖卜騰格哩の處に聚られて、我に屬へる民を帖卜騰格哩より索めに莎豁兒と云ふ使を遣りたるに、我が莎豁兒使を打ちて歩ませ鞍を負はせて致せられて、我自索めに往けば、七人の晃豁壇に、こゝよりそこより圍みて懺悔せしめて、帖卜騰格哩の後より跪かせられたり」と云ひ哭きたり。成吉思合罕聲を出さざるに、李兒帖兀眞は、寢床の内に起きて坐りて、衾の領にて臂を蔽ひて、斡惕赤斤の哭けるを見て、涙を墮して言はく「何をかする晃豁壇ぞ。彼等は、先頃合撒兒をも黨して打ちてありき。今又この斡惕赤斤をいかなぞ後より跪かせたる。いかなる道理か有りし。況この

檜松ひのきまつぎの如ごとき爾なが弟おとこだちをかく害そこなひ合あへり。實まことに又また久ひさ後ご老おい木きの如ごとき爾なが身み傾かたむき去さらば、麻あさ穰がらの如ごとき爾なが國民くにたみを誰たれにか知しらしめん、彼等かれら柱はしらの如ごとき爾なが身み倒たふれ去さらば、羣むら雀すずめの如ごとき爾なが國民くにたみを誰たれにか知しらしめん、彼等かれら檜松ひのきまつぎの如ごとき爾なが弟おとこだちをかく害そこなふ我わが家人けにんは、三人みたり四人よたりの我わが小ちひさき弱よわきものごも成長せいちやうするまでは、いかんぞ知しらしめん、彼等かれら何をかする昇こん豁ごたん壇だんなりし、彼等かれら弟おとこだちを彼等かれらにかく做なさしめて、いかんぞ見みておはせん、爾ながみこと「云いひて、孛は兒る帖て兀う眞ちんは涙なみだを墮おとしたり。孛は兒る帖て兀う眞ちんのこの言ことばにつき、成ちん吉ぎ思す合か罕かんは、幹かん惕つ赤ち斤ぎんに宣のりたまはく「帖て卜ぶ騰てん格げ哩り今いま來こん。爲なし得うるここをいかにも行おこなひ合あはば、汝なんぢ知しれ」云い宣のりたまへり。その時とき幹かん惕つ赤ち斤ぎん起たちて涙なみだを拭ぬぐひ出いでて、三人みたりの力りき士しを

帖卜騰格哩の打取

備そなへて立たてり。暫しばらくありて蒙もん力り克く額え赤ち格げは、七なな人たりの子こごもこ來きて、七なな人たり皆みな入いりて、帖て卜ぶ騰てん格げ哩りは、酒しゆ局きよくの右みぎの邊ほとりに坐すわるこ、幹かん惕つ赤ち斤ぎんは、帖て卜ぶ騰てん格げ哩りの領えりを拏とらへて、「昨きのふの日ひ我われを懺さん悔げせしめたりき、汝なんぢ試しみ合あはん」云いひて、彼等かれらの領えりを拏とらへて門かどの處ところに拖ひきたり。帖て卜ぶ騰てん格げ哩りは、幹かん惕つ赤ち斤ぎんを迎むかへ領えりを拏とらへて搏うち合あへり。帖て卜ぶ騰てん格げ哩りの帽ぼうは、搏あち合あふ時ときに火ひ盤ばんの上うへに落おちたり。蒙もん力り克く額え赤ち格げは、その帽ぼうを取とりて嗅かきて懷ふところに置おきたり。成ちん吉ぎ思す合か罕かん宣のりたまはく「出いでて力りき士しの力ちからを争あらそ合あへ」云い宣のりたまへり。幹かん惕つ赤ち斤ぎんは、帖て卜ぶ騰てん格げ哩りを拖ひきて出いづる時とき、門かどの闕しきみの閒あひだに先さきに備そなへたる三人みたりの力りき士し迎むかへて、帖て卜ぶ騰てん格げ哩りを拏とらへ拖ひきて出いでて、彼等かれらの脊せ梁はねを折をりて、左ひだりの邊ほとりの車くるまの端はしに去すてて、幹かん惕つ赤ち斤ぎん入いりて言いは

く帖卜騰格哩は、我を懺悔せしめたりき。試みんご云へば、肯
 かず欺きて臥したり。尋常の伴なりき。ご云へば、蒙力克額赤
 格覺りて、涙を墮して言はく、「大なる地に土塊の然有りしよ
 り、海なす河に小川のしかありしより、伴ごなれり、我（明）我自
 皇帝未起創之先、做伴當到今日。」ご云ふごひごしく、六人の
 晃豁壇なる彼の子ごもは、門を塞ぎて、火盤の周圍に立ちて、
 その袖を挽かれて、成吉思合罕恐れて追られて、躲れ出でん。
 ご宣ひて出づれば、成吉思合罕の周圍に箭筒士侍衛等繞り
 て立てり。帖卜騰格哩を車の端に脊梁を折りて去てたるを
 成吉思合罕御覽して、後方より一つの青き帳房を持ち來さ
 せて、帖卜騰格哩の上に被はせて、駕車に（我を）入らしめよ。起

たんご宣ひて、そこより起したり。

帖卜の死體の失
 せ

帖卜（哩帖騰格）を被ひたる帳房の天窗に蓋して、門を壓へ
 て人に守らせたれば、第三の夜、日黄なる時（明）將曉、天窗開
 けて身ぐるみ出でけり。審むれば、實に帖卜彼の「出でたる」は、
 そこに審められたり。成吉思合罕宣はく、「帖卜騰格哩は、我が
 弟ごもに手足を致したる故に、我が弟ごもの間に、跡形なき
 讒言の故に、上帝に愛まれずして、命を身ぐるみ持ちて去ら
 れたるぞ。」ご宣へり。成吉思合罕は、蒙力克額赤格をそこに責
 めけらく、「子ごもを性行を制せず、（我）我ご齊しからんご思へる
 故に、禍は帖卜騰格哩の頭に到りぬ。汝等汝等のかゝる性行
 を覺れるならば、札木合、阿勒壇、忽察兒等の「如き」理由あるも

蒙力克額赤格の
 責められ

のご倣なさるべきなりき、汝等なんぢらご宣のりたまひて、蒙力克額赤格もんりくえちちげを責せめて、責せめ畢をへてさて朝あしたに言いへるを夕ゆふべに變かへば、夕ゆふべに言いへるを朝あしたに變かへば、恥はぢ（恥はぢこと）ご必かならず云いはれん。只前たださきに言ことばを定さだめられたるぞ、彼かの事ことを（明よりて因なきに在先いひ説さだめ定め免ゆるす汝死なんぢのし有たり來し罷やめん）ごて、恩賜おんしして怒いかりを息やめたり。違ちが越あつする性行せいかうを引締ひきしめたりせば、蒙力克額赤格もんりくえちちげの子孫しそんに誰たれか齊ひとしき者ものあらんご宣のりたまへり。帖卜てぶつ騰格哩てんげりを無なくなすご、晃豁壇こんこたんの顔色がんしよくは消きえ失うせけるぞ。（終こゝにて祕史正集十卷は終つひれり。次の二卷は續集なり。卷八に虎の年丙寅の即位を記してよりこの卷の初までは、功臣の恩賞、親衛の制度を定むる詔勅を列ね、次に合兒魯兀惕の降服、篋兒乞惕古出魯克の勦滅、委兀惕の親附を記し、次に兔の年丁卯と年を掲げて、朮赤の北征、禿馬惕の征服、皇族の分民、傅相の事を記し、晃豁壇の敗滅を以て終れり。さればこの集は、太祖は二年丁卯に終れるが如くなれども、古出魯克の勦滅は、太祖元年に非ずして、實は十三年戊寅にあること甚確なれば、篋兒乞惕の勦滅も、親征錄集史の十二年丁丑とせるに從はざるべからず。續集は、太祖六年辛未の征金の役より始まりたるに、この集に已に十二年丁丑、十三年戊寅の事を載せたるはいかにと云ふ

に、そは怪むべき事に非ず。蓋この集の成れるは、征金の役の起れる後なれども、征金の役は、未事竣らざりし故に、後の記録に譲りて、この集には載せず。篋兒乞惕古出魯克の勦滅は、卷三の篋兒乞惕征伐より、卷五卷七の乃蠻征伐より引續きたる、戡定の大業なるに由り、その局を結ばんが爲に、太祖騰極の續きに、年をも掲げず、十餘年後の事も掲げずしたるなり。）

成吉思汗實錄卷の十終り。

成吉思汗實錄卷の十一

(明譯本の原の名は、元朝祕史續集卷一。次の巻も、これに準ふ。)

元太宗十二年（蒙古文委兀字續撰。明洪武十五年、翰林侍講火原潔等、漢字音譯俗語旁譯。日本明治三十九年、盛岡那珂通世、以和文直譯附校注。）

金國征伐の始末

その後成吉思合罕は羊の年（我が順徳天皇建暦元年辛未、宋の寧宗嘉定四年、金帝衛の紹王、永濟、大安

一三年、元の太祖六年、西紀一二）乞塔惕の民の處に出征せり。撫州を

國交の破裂

取りて、（撫州は、金の西京路の一州にして、張家口の外、今の鑲黃旗等四旗の

紀に元年丙寅、帝始議伐金。初、金殺帝宗親戚補海罕、帝欲復讎。會金降俘等、具言金主璟肆行暴虐、帝乃定議致討。然未敢輕動也。宋華黎の傳に、金之降者皆言其主璟殺戮宗親、荒淫日恣。帝曰、朕出師有名矣。又太祖紀に、五年庚午春、金謀來伐、築烏沙堡。帝遣遮別襲殺其眾、遂略地而東。初、帝貢歲幣于金。金主使衛王允濟受貢於靜州。

野狐嶺の戦

據りて、六年春にまはせり。獯兒背の戦に續きたる會合堡の戦は、金史承裕の傳に據り、六年八月に記し、地名も宣平の會河川として、親征錄には據らず。親征錄に據れば、七年八月に記し、地名も宣平の會河川として、元史は、宣德府に克つを八年七月に記し、德興府を抜くをば、金國志に據りて、六年九月に記し、又或書に據りて、七年九月に記し、その異名を用ひて奉聖州と云へるは、金國志に據れるにも似たり。さて後に親征錄の文を採りて、八年七月克宣德府の次に又記し、親征錄の後、金人復收之、癸酉八年秋、上復破之をば、削れり。重複の最驚くべきは、哲別の居庸關を破りたる事に、據り、懷來居庸の戦を記せり。これらに重複あることを悟らずして、元史を讀まば、何が何やら少も分らず、恰もきつたけ狐峙に依り越え諸葛孔明の八陣變化の中に入りたるが如くなるべし。

て、蒙忽捏堅げん荅巴だは、化府萬全縣の西北三十清里、張家口の外に在り。畿輔通志に、勢極高峻、風力猛烈、雁飛遇風輒墮地とあり。この峙は、たゞ越えたるに非ず。親征錄に、上之將發、撫州也、金人以招討九斤監軍爲奴等領大軍、設備於野狐嶺、又以參政胡沙率軍爲後繼、契丹軍帥謀謂九斤曰、聞彼新破撫州、以所獲物分賜軍中、馬牧於野、出不虞之際、宜速騎以掩之也。九斤曰、此危道也。不若馬步俱進、爲計萬全。上聞金馬至、進拒獯兒嘴、この間に金の使石抹明安の降れることを記せり。遂與九斤戰、大破之。其人馬蹂躪死者不可勝計。因勝彼、復破胡沙軍於會合堡。金人精銳盡沒於此とあり。九斤は、太祖紀に、紇石烈九斤、察罕の傳に、定薛とあり。爲奴は、喇失惕の史に、幹奴とあり。胡沙は、金史列傳の承裕なり。獯兒嘴は、野狐嶺の北の口

會河堡の戦

にあり。會合堡は、金史本紀の會河堡にして、今の萬全縣の西に在りき。金國志には、灰河、承裕の傳には、會河川、木華黎耶律阿海の傳には、澮河と書けり。木華黎の傳は、この戦の功を專に木華黎に歸して、金兵號四十萬、陣野狐嶺北、木華黎曰、彼眾我寡、弗致死力戰、未易破也。率敢死士策馬橫戈、大呼陷陣、帝麾諸軍並進、大敗金兵、追至澮河、殪尸百里と云へり。會河堡の戦は、金史本紀に、大安三年八月、千家奴胡沙自撫州退軍、駐宣平、九月敗績于會河堡、承裕の傳に、八月、大安三年八月、千家奴潰、承裕氣不、敢拒戰、退至宣平、云云。其夜南行、大元兵踵擊之。明日、至會河川、承裕兵大潰。承裕僅脫身入宣德とあり。宣平は、金の西京路、宣德州の屬縣にして、今の直隸宣化府懷安縣の東北にありき。撫州野狐嶺、會河堡の戦は、親征錄蒙古集史、金國志、金史本紀、諸傳みな、太祖六年辛未にあるを、元史本紀は、會河の戦のみを正しく、六年辛未に記し、撫州野狐嶺の戦は、みな誤りて、六年辛未七年壬申の二所に記し、速不台石抹明安の傳は、誤りて壬申の年とし、木華黎の傳に至りては、壬申の年にある宣德、德興の戦を辛未として、前に記し、辛未の年にある撫州野狐嶺の戦を辛未として、後に記せり。耶律阿海の傳に、烏沙堡、宣平、澮河の戦を辛未としたるは、善けれども、その年の内に、癸酉、拔宣德、德興の前に、遂出居庸、耀兵燕北と書けるは、非なり。宣德府を取りて、親征錄に、壬申、太祖七年、破宣德府、至德興府、失利引卻。四年、太子也可那顏、赤梁駙馬率兵盡克德興、境內諸堡、而還。後、金人復收之、癸酉、太祖八年秋、上復破之とあり。宣德府は、金の西京路、宣德州にして、元の初、陞せて宣寧府とし、世祖の時、宣德府と改め、て、上都路に隸せり。今の直隸、宣化府なり。太祖のそれを破れるは、未府とならざりし時なれば、府と云ふべき筈なし。喇失惕の史に、宣德州と云へるを見れば、修正秘史には、州とありけんを、親征錄の撰者は、當時の稱に依り、府と書けるなり。

宣德德興の攻め取り

者別古亦古捏克
の先鋒

この秘史の原本にも必ず州とありしならめど、明の譯人は、宣德府の名を聞き慣れ居たるに由り、ふと音譯を誤りたるならん。德興府は、遼の奉聖州にして、今の時德興府と改め、西京路に隸し、元の世祖の時復奉聖州とし、宣德府に隸せり。今の直隸保安州なり。四太子は第四の皇子拖雷也。可那顏は、大官人の義にして、拖雷の號なり。赤渠駙馬は、（者別古亦古捏克）者別古亦古捏克二人を先鋒卷八の赤古咧堅なり。（傳）この戦に者別の大に働きたる旁證として、元史耶律阿海の大捷滄河、遂出居庸、耀兵燕北云とあり。古亦古捏克は、何人とも知れず。親征錄壬辰（太宗四年）の處に、貴由拔都とある人ならんか。もし然らば、元史列傳に、月魯帖木兒、卜領勤多禮伯臺氏、曾祖貴裕、事太祖、爲管領怯憐口怯薛官とある貴裕も、その人なるべし。多禮伯臺は、朶兒別惕にして、卜領勤は、朶兒別惕の分部の名なり。（察卜赤牙勒）察卜赤牙勒に到りて、（北）漢名居庸關、今の順天府昌平州の西。（察卜赤牙勒）察卜赤牙勒の峠を禦がれて、（昌平州の西北二十四清里に居庸の南口あり、南口より十五清里上れる所に關城あり、又八清里に上關あり、上關より十七清里に延慶州の八達嶺あり、嶺の上に城あり、元人はそれを居庸の北口と云へり。即察卜赤牙勒の峠なり。昌平山水記に、自八達嶺、下視居庸關、若建瓶、若闔井。昔人謂居庸之險不在關城、在八達嶺也と云へり。金人守禦の事は、親征錄に、時金人塹山築壁、悉力爲備、私八兒火者、傳に、金人恃居庸之險、治鐵鋼關門、布鐵蒺藜百餘里、守以精銳とあり。）そこに者別言く、彼等を誘ひて動かし

居庸關の禦ぎ

縉山の戦

て來させん、そこを試みん、云ひて回りぬ。回られて、乞塔惕の軍士ごも追はん、ごて、河山に滿つるまで追ひて來ぬ。宣德府の觜（鼻山）に至りて、者別後向き、翻れり。奮ひて衝きて、續きて來る敵を敗れり。成吉思合罕の中軍續きて、乞塔惕を動かして、合喇乞答惕（契丹即合喇）主兒扯惕（女真即主兒）、主因（卷一に族）の雄雄しく猛き軍を敗りて、察卜赤牙勒に至るまで爛木の積れる如く殺して、（親征錄、癸酉、上復破之、の續きに、遂進軍至懷來、不可勝計とあり。帥の上、に脱字あり。元史本紀には、金の行省完顔綱、元帥高琪とあり。高琪は、金史の完顔綱にして、完顔綱徒單錫、尤虎高琪の傳に、みな綱、行省事於縉山、大敗とあり。高琪は、この時鎮州の防禦使にて、元帥右都監を權して居たれども、蒙古人は、元帥と云ひたるなり。懷來は、遼の奉聖州の屬縣、金の德興府、媯川縣、元の宣德府、奉聖州の屬縣、今の直隸宣化府、懷來縣なり。録は、元代の名を以て記せり。北口は、即居庸の北口なり。縉山は、金の德興府の屬縣、今）察卜赤牙勒の關を者別取りて、峠ごもを奪

居庸關の攻め破

龍虎臺の駐蹕

ひて越えて、(この文に據れば、北口より南口に出でたる如くなれども、さに
 軍拒守、遂將別眾西行、由紫荆口出、金主聞之、遣大將奧敦、將兵拒隘、勿使及平地、比
 其至、我眾度關矣、乃命哲別率眾攻居庸南口、出其不備、破之、進兵與怯台薄察軍合、
 とあれば、南口より倒に北口に攻め上りたるなり、怯台は、即客台、八十八功臣の
 第五十七、兀嚕兀惕の主兒扯歹の子なり、太祖紀に可忒と書けり、薄察は、太祖紀
 に薄利とあり、趙柔の傳に歲癸酉、太祖遣兵破紫荆關、柔以其眾降、行省八札奏聞、
 以柔為涿易二州長官、佩金符、とある八札なるべしと沈曾植は云へり、紫荆口は、
 即紫荆關にて、直隸易州の西八十清里、紫荆嶺の上とあり、奧敦は、太祖紀に奧屯
 とあり、金史章宗紀、衛紹王紀、李英の傳に、烏古孫兀屯とある人なるべし、元史は、
 録の文を節録したれ、(成吉思合罕は、失喇迭克に下馬せり。)(失喇迭
 ども、敘事明瞭ならず、(成吉思合罕は、失喇迭克に下馬せり。)(克は、漢
 名龍虎臺、昌平州の西にあり、昌平山水記に、居庸關南、地勢高平、如臺、廣二里、袤三
 里、元時、車駕巡幸上都、皆駐蹕於此、(畿輔通志に、龍虎臺、在昌平州西二十里、云云、舊
 志、臺在舊縣西十里、去京師百里、當居庸關之南、とあり、(中都を攻めて、)(今の清
 里、この臺は、いはゆる臺地にて、樓臺の臺にあらず、(中都を攻めて、)(今の清
 京にして、遼南京と云ひ、金中都と云ひ、元の世祖大都と改め、明の初北平と云ひ、
 成祖北京と改め、清の世祖定めて京師とし、俗には今も北京と云ふ、蒙文には中
 都とあるを、語譯には大都、文譯には北平と書けり、洪武の史臣、後の名を用ひて
 追稱したるなり、親征錄に、既而又遣諸部精兵五千騎、合怯台、哈台、二將圍中都、上
 自率兵攻涿易二州、即日拔之、とあり、怯台は、即兀嚕兀惕の客台、哈台は、即合歹古
 喇堅、八十八功臣の末より第四に見えたり、涿易は、皆金の中都路の屬州、涿州は、

中都の城攻め

河北山西山東の
侵掠

今順天府に隸し、易州は、直隸の直隸州なり、蒙古の關に入りたるは、太祖八年癸
 酉の秋にして、金史宣宗紀、貞祐元年、即太祖八年、十月、大元兵下涿州、とあれば、關
 に入りたる月に、直に涿州を拔きたるに非ず、また、即日二州を拔くは、いかにも
 速すぎたるに、喇失惕の史には、涿州を攻めて二十日に破れり、とあれば、録の
 即の字は、誤寫な、(郡郡の城ごもに軍を遣りて攻めさせたり。)(征親
 るかも知れず、(郡郡の城ごもに軍を遣りて攻めさせたり。)(征親
 録に、乃分軍為三道、大太子二太子三太子為右軍、循太行而南、破保州、中山、邢、洛、磁
 相輝、衛、懷、孟、等州、棄其定威、州、境、抵黃河、大掠而還、哈撒兒及幹津、那顏、拙赤、解薄、利
 為左軍、沿東海、破灤、薊、等城、而還、上與四太子、馭諸部軍、由中道、遂破雄、莫、河、開、清
 滄、景、獻、濟、南、濱、棣、益、都、等城、棄東平、大名、不攻、餘皆望風而拔、下令北還、又遣木華黎
 回攻密州、拔之、上至中都、亦來合、とあり、翁吉喇惕の阿勒赤、古喇堅の子、德薛禪の孫にして、
 は、太祖紀に、幹陳那顏とあり、翁吉喇惕の阿勒赤、古喇堅の子、德薛禪の孫にして、
 元史、特薛禪の傳に、その名見えたり、拙赤、解薄、利、薄、察、と音近きに由り、沈曾植は、
 即薄察なり、李囉忽勒の從孫、塔察兒、一名侷蓋、は、兀嚕兀惕の主兒扯歹なり、薄利は、
 薄察は、塔察兒ならんと疑ひたれども、いかゞにや、太祖紀は、この三道の軍を、
 べて、右軍は、取保、遂安、肅、安定、邢、洺、磁、相、衛、輝、懷、孟、掠、澤、潞、遼、沁、平、陽、太、原、吉、隰、拔、汾、
 石、嵐、忻、代、武、等州、而還、左軍は、取薊、州、平、灤、遼、西、諸郡、而還、中軍は、取雄、霸、莫、安、河、開、
 滄、景、獻、深、祁、懿、冀、恩、濮、開、滑、博、濟、泰、安、濟、南、濱、棣、益、都、淄、濰、登、萊、沂、等郡、復命、木、華、黎、
 攻密州、屠之、云云、帝至中都、三道兵還、合屯大口、是歲、河北郡縣盡拔、唯中都、通、順、真、
 定、清、沃、大名、東平、德、鄆、海州、十一城不下、とありて、親征錄より、委し、金史、宣宗紀を
 案するに、貞祐元年、太祖八年、癸酉、十一月、大元の兵、觀州を徇へ、金の觀州は、即元
 の景州なり、又河間府、滄州を徇へ、二年、太祖九年、甲戌、正月、辛未、彰德府を徇へ、金

東昌の不意打ち

元の彰徳府は、即古の相州なり。又益都府を徇へ、乙未、懷州を徇へ、二月壬辰、嵐州を徇へたること見えて、末に、時、山東河北諸郡失守、惟眞定、清沃、大名、東平、徐邳、海州、數城僅存而已。河東州縣亦多殘燬とあれば、三道の侵掠は、癸酉の十一月に始まり、甲戌の二月に終りたるなり。親征録、元史にその時月を明にせざるに由り、金史に據りて考へ見たり。又金史、李英の傳に、貞祐三年三月、英自清州督糧運、救中都、宣宗紀にも、その年七月、詔、河間、孤城、移其軍民、就粟清州とあれば、清州は未殘破せられざりき。親征録、中軍の破れる諸城の中に、清州あるは非なり。清は、滑の誤ならん。元史は、十一城不下の中に、金史は、數城僅存の中に、いづれも清州あり。者別をば東昌の城を攻めさせに遣りたり。東昌の城に到りて、攻めて取りかねて、回りて六宿の地に到りて、油斷せさせ、さて回り奮ひ、馬を手に牽き、(蒙古兒闊脫勒壇、明譯、每人牽一匹從馬) 夜兼行して、油斷し居る處に到りて、東昌の城を取りき。

(元)今、山東東昌府は、元史地理志に、唐博州、宋隸河北東路、金隸大名府、の史は、元の世祖の時より始まりたれば、太祖の時その名なきのみならず、太宗の史臣もその名を書くべき由なし。然らばこの東昌の字は、明の史官の音譯を誤れるなるべし。親征録には、辛未(太祖六年)の秋、西京路の諸州を破れる次に、又遣哲別率眾取東京、哲別知其中堅、難以眾墮城、即引退五百里。金人謂我軍已還、不

元の初に無かりし東昌

修正秘史の東京

東京を攻むる暇なき者別

遼東を経略せる按陳

東京を取れる木華黎

東勝の奇功

復設備、哲別戒軍中、一騎牽一馬、一晝夜馳還、急攻、大掠之、以歸と云ひ、喇失惕もこれに同じければ、修正秘史には、東京とありしなり。太祖紀には、七年壬申の末に、月日まで掲げて、冬十二月甲申、遮別攻東京、不拔、即引去、夜馳還、襲克之と云ひ、吾也而の傳には、逸早くも太祖五年に、吾也而與折不那演、克金東京有功と云ひ、年月は合はざれども、その東京としたるは、いづれも親征録に本づきたるなり。然れども、東京を取れる人は、實は者別に非ず。耶律阿海の傳に、者別の先鋒となりて、烏沙堡、宣平、滄河の戦より、拔宣德、興諸郡、乘勝次北口、攻下紫關、まで、阿海は常に者別と共に働きたる由見ゆれば、者別は常に大軍に先だちて轉戦したるなり。者別は、いかに戦馬の如く、駿速なりとも、何の暇ありてか、北京路を踏えて、徑に東京を攻めらるべき。耶律留哥の傳に、歲壬申(太祖七年)太祖命、按陳那衍行軍、至遼東、留哥率所部降之、共破金軍、帝召按陳還、而以可特哥副留哥屯其地。癸酉(八年)春、眾推留哥爲遼王、云云とあれば、始めて遼東を経略したる者は、阿勒赤那顏と可特哥にして、者別は與らず。八年甲戌に至り、木華黎は命を受けて、諸軍を統べて遼東を征し、九年乙亥に裨將蕭也先は計を以て東京を平定したること、木華黎の傳に見え、蕭也先即石抹也先の傳にも、木華黎に従ひて先鋒となり、奇計を用ひて東京を降したることを委しく、敍べたれば、東京を取れる者は、木華黎也先にして、者別に非ず。然らば、者別の取れるは、東昌にも非ず、東京にも非ず、いづこなりけん。太祖六年に取れる西京路諸州の内、東勝州あり、その地は、金の西京、今山西大同府の西北に在りき。者別の奇功を立てたるは、疑らくは、その地ならん。蓋秘史の原本には、東勝とありしを、明人は誤りて、東昌と音譯して、元の初に東昌なきことに依りて、いづれも東京を取れるは、修正秘史は誤りて、東京とし、親征録集、元史、東昌なきことに依りて、いづれも東京を取れるは、者別に非ざるこ

とに心附かざりしなり。

完顔承暉の請和の建議

者別は、東昌の城を取りて回りて来て、成吉思合罕に合へり。(親征録に據れば、者別の奇功を立てたるは、太祖六年西京路の諸州を取れる時なれば、回りて太祖に合へるは、西京路の或地にて合へるなり。)

中都を攻められて、阿勒壇罕の大官人王京丞相(この阿勒壇罕は、金の宣宗なり。太祖八年癸酉の八月、金帝衛の紹王永濟は、紇石烈執中に弑せられ、章宗の庶兄豊王珣立てられたり。これを宣宗と云ふ。王京は、完顔の轉なり。王京丞相は、親征録元史に丞相完顔福興とあり、金史に完顔承暉として傳あり。承暉、本の名は福興にして、この時平章政事兼都元帥となり、尋で右丞相に進みたり。)阿勒壇罕に建議しけらく、天地の命ある時、大位の代る時至れり。忙豁勒甚力あり、来て我等の雄雄しく猛き合喇乞塔惕主兒扯惕主因の緊要なる軍を敗りて、盡くるまで殺しけり。頼ある察卜赤牙勒をも奪ひて取りけり。今我等再軍を整へて出さば、再忙豁勒に敗られれば、必城城にて潰えん、彼等却て

我等に收めば肯かず、我等に敵となりて、伴ならざらん、彼等阿勒壇罕恩賜せば、忙豁勒罕に今の内に降らん、相談せん。相談に入りて忙豁勒を退けば、退けたる後に、復別に考へ、我等そこに議り合はんぞ。忙豁勒の人、驢馬も、地合はずして疫病し居る、云はれたり。彼等の罕に女子を與へん。金銀緞子財を軍の人に重くい出して與へん。我等の此の相談に入らざるをいかで知られん、建議しければ、阿勒壇罕は、王京丞相の此の言を善しとして、かく便爲れ、とて降らん、成吉思合罕に公主の號ある女子を出して、金銀緞子財もて軍の人に力に知らしむべく、力限中都より出して、成吉思合罕の處に王京丞相致して來ぬ。降りに來られて、成吉思合罕は、彼

金の宣宗の屈服

太祖九年甲戌の凱旋

等の相談に入りて、郡郡に攻め下りたる軍ごもを回らしめて退きたり。王京丞相は、莫州撫州の名ある觜(鼻の)に到るまで成吉思合罕を送りて回れり。緞子財を我等の軍士ごも力限荷に駄けて、熟絹にてその荷を縛りて行きたり。(これは、太祖三月の事なり。親征録には「甲戌上駐營於中都北壬甸。金丞相高琪與其主謀曰：聞彼人馬瘦病，乘此決戰，可乎？」丞相完顔福興曰：「不可。我軍身在都城，家屬多居諸路。其心向背未可知。戰敗必散。苟勝亦思妻子而去。」祖宗社稷安危在此舉矣。當熟思之。今莫若遣使議和，待彼主還軍，更爲之計。如何？」金主然之。遣使求和，因獻衛紹王公主，令福興來送。上至野麻池而還。とあり。丞相高琪は、金史高琪の傳に據れば、この時平章政事にして、丞相に非ず。金の莫州は河北東路に隸し、今の直隸河間府任邱縣にして、中都より蒙古に赴く路には非ざれば、この二字誤あらん。親征録の野麻池も、地志に見えず。これも池の名には非ずして、山の名又は地の名なるべし。二書を誤り、その莫州は又野麻池の野を脱して、麻池を州の諸將名の如く音譯したには非ずや。元史太祖紀に「九年甲戌春三月，駐蹕中都北郊，請乘勝破燕，帝不從。乃遣使諭金主曰：汝山東河北郡縣，悉爲我有。汝所守唯燕京耳。天既弱汝，我復迫汝於險。天其謂我何。我今還軍，汝不能犒師，以弭我諸將之怒耶。」金主遂遣使求和，奉衛紹王女岐國公主及金帛童男女五百馬三千以獻。仍遣其丞相完顔福興送帝出。

唐兀惕征伐

居庸とあるは、親征録と金史の紀傳とに依りて書けるなり。岐國公主は、金史宣宗紀に公主皇后の稱あり。喇失惕の史に昆主哈屯とある昆主は、公主を訛るなり。かく出征したるに依り、合申の民の處に去れり。指して到れば、合申の民の不兒罕降らん。爾の右の手となりて力を與へん。と云ひ、察合と云ふ女を成吉思合罕に出して獻れり。(不兒罕は、蒙古語にては神また佛の義なれども、唐兀惕の國にては國主の稱號に用ひたりと見ゆ。この時の不兒罕は、夏の桓宗李純佑の族弟にして、元の太祖元年に純佑を廢して篡立したる襄宗安全なり。察合は、親征録も集史も元史も、みな名を略けり。后妃表第三幹耳朶の察兒皇后は、察合の誤りかとも思はる。しかれども、喇失惕は、唐古惕の人にて名の知れざる哈屯を擧げて、自注に「速哈惕これを得んと願ひ、成吉思汗即贈れり」と附記したれば、后妃の列を脱したる故に、表には載せ)又不兒罕言く「成吉思合罕の名聲を聞きて畏れて居りき、我等今威靈ある爾の身到りて來られて、威靈を畏れたり。畏れて、我等唐兀惕の民は、爾の右の手となりて力

駱駝貢獻の願ひ

出征したる時、乞塔惕の民の阿忽台と云へる阿勒壇罕を降して、唐兀惕の民の亦魯忽不兒罕を降して、回りに、撒阿哩客額兒に下馬せり。(阿忽台は金の宣宗珣なり。宣宗の國語の名は、金史本紀に吾賭補とあれば、阿忽台は國語の名にもあらず。蒙古人の附けたるあだなるべし。亦魯忽は、不兒罕李安全の國語の名なるべし。親征録に失都兒忽とあるは、次の卷に見ゆる末帝李峴の一名を誤り書きたるに似たり。)

太祖九年甲戌の再征

又その後趙官の處に(趙官は宋の蒙語なり。趙家の轉訛か。又は趙氏の官家の義か。)和親に遣りたる主卜罕を頭とせしめるあまたの使を乞塔惕の民の阿忽台なる阿勒壇罕に妨げられて、成吉思合罕は、狗の年(我が順徳天甲戌、宋の嘉定七年、金の宣宗貞祐二年、元の太祖九年、西紀一二一四年、太祖五十三歳の時)乞塔惕の民の處に再出馬せり。(主卜罕の拘へられたる事は、親征録集史みな載せず。元史は、主卜罕使宋假道、宋殺之。復遣李國昌使宋需糧と云ひ、睿宗の傳に辛卯、拖雷總右軍、自鳳翔渡渭水、過寶雞、入小潼關、涉宋人之境、沿漢水而下、遣搠不罕詣宋假道、且約合兵。

搠不罕の殺され

高寶詮の回護の説

宋殺使者、拖雷大怒曰、彼昔遣苟夢玉來通好、言背盟乎。乃分兵攻宋諸城堡、長驅入漢中、進入四川、陷閬州、過南部而還、と云へり。然れば搠不罕即ち主卜罕は、金人の事に非ずして、この年より十七年後なる太宗三年の事なり。されども元史は已に誤り多く、且陳樞の通鑑續編には、搠不罕至青野原、金統制張宣殺之とあるに據り、高寶詮は、秘史を誤れりとせず。元史曰、宋殺蓋金殺之、而諉爲宋殺也。と云ひ、又太宗紀に、搠不罕の事を載せたるをも、彼紀蓋因遣李國昌需糧、追朔太祖時、遣使之事耳。不然、豈有假道被殺、復遣使需糧乎と云へり。この考も一説に備ふべし。但甲戌の再征は、太祖自ら出馬したるに非ず。太祖は塞外に駐り、諸將を遣して中都を攻めしめたるなり。太祖紀に、九年甲戌、太祖居庸關を出でたる後、夏五月、金主遷汴、以完顏福興及參政抹盡忠輔其太子守忠、留守中都。六月、金軍斫荅等殺其主帥、率眾來降。詔三摸合石抹明安與斫荅等圍中都。帝避暑魚兒濼。秋七月、金太子守忠走汴とあり。親征録も略同じくして、甚だ委し。又通鑑續編には、五月、金主遷汴、蒙古主聞之、怒曰、既和而遷、是有疑心、而特以和款我耳。復圖南侵とあり。いづれに據りても、甲戌の再征は、金の宣宗の遁れたる後に、降りを秘史にこの再征に由りて、金帝遁れ出でたりと云へるは誤れり。(降り畢へて、趙官の處に遣りたる使をいかでか妨げたる)と云ひ出馬するに、成吉思合罕は、潼關の口を指して、者別をば察卜赤牙勒に依り進ましめたり。(潼關は、河南陝州閿鄉縣の西六十清里、陝西

遷都の後なる再征

潼關の戦

同州府華陰縣の東四十清里に在り。察ト赤牙勒は、居庸關の蒙語、前に見えたり。親征錄元史本紀に據るに、潼關を攻めたるは、撒兒只兀惕の撤木合巴阿秃兒にして、太祖自ら出でたるに非ず。又甲戌の年者別（關に入りたることも、元史親征錄に見えず。）成吉思合罕を潼關の口に依り進みたりと阿勒壇罕知りて、亦列合答豁孛格秃兒三人に軍を統べさせて、軍塞りて、忽刺安迭格連（譯すれば赤き花帽軍）を先鋒とし、整へて、潼關の口を争ひ、峠を勿越させ、さて、亦列合答豁孛格秃兒三人を軍を急がし遣りき。潼關の口に到れば、乞塔惕の軍は、地を捲きて來ぬ（地の下、原文に誤字あり。譯し難し。意を以て語を作）成吉思合罕は、亦列合答豁孛格秃兒三人と立ち合ひ（對戰）て、亦列合答を動せり。拖雷出古古哩堅（即ち卷八の二人は、横より衝きて、忽刺安迭格連を退けて到りて、亦列合答を動して敗りて、乞塔惕を爛木の積れる如く殺せり。乞塔惕の軍

拖雷出古の奮戦

ごもを殺して畢はれたりと阿勒壇罕知りて、中都より出でて、遁れんと南京の城に入りき。（金の南京は、古の大梁また汴梁今の河南開封府なり。）残れる彼等の軍士ごもは、瘦せて死ぬる時、己等の間にて人の肉を食ひ合ひけり。拖雷出古古哩堅二人は善き處に働けりさて、成吉思合罕は、拖雷出古古哩堅二人を大に恩賞せり。（金史元錄に據るに、潼關の戦には、太祖親ら臨まざるのみに非ず、拖雷出古二人もそれに與りたりとは見えす。二人の相攜へて奮戦したるは、親征錄通鑑續編に據るに、太祖七年壬申、徳興府を攻むる時にありき。又潼關の守將は、尼龐古蒲魯虎に（金史元史に據るに、太祖十年乙亥正月の後、丙子太祖十一年の前に、上駐軍魚兒灤命三合拔都帥蒙古軍萬騎、由西夏抵京兆、出潼關、破嵩汝等郡、直趨汴梁、至杏花營、大掠河南、回至陝州、適河冰合、遂渡而北とあり。元史太祖紀は、十一年丙子秋、撒里知兀解三摸合拔都率師、由西夏趨關中、遂越潼關、獲金西安軍節度使尼龐古蒲魯虎、拔汝州等郡、抵汴京而還とありて、親征錄と年違へり。金史は、この戦の始末を敘ぶること最詳なり。今宣宗本紀、必蘭阿魯帶完顏仲元、朮虎高琪、胥鼎、尼龐古蒲魯虎等の諸傳を合せ考ふるに、貞祐四年太祖十一年秋八月丙子、元兵攻延安、九月辛巳朔、元兵攻防州、以簽樞密院事永錫爲御史大夫、領兵赴陝西、便宜從事。

撤木合巴阿秃兒南侵の委しき事

冬十月癸未、招射生獵戶、練習武藝、知山徑者、分屯陝虢要地、命遙授知歸德府事完顏仲元、率山東花帽軍、徙軍盧氏、改商州、經略使權元帥、右都監元兵、攻潼關、由禁坑出、戍卒皆潰、西安軍節度使尼龐古蒲魯虎禦戰、兵敗死焉、禁坑は一名禁谷、今の潼關、應の南にあり、元の兵はこの間道より遶り出でて、潼關を破れり、戊辰、元兵徇汝州、仲元軍趨商虢、復至嵩汝、皆弗及、河東南路行省胥鼎、聞元兵已越關、庚午、遣潞州元帥左監軍必蘭阿魯帶領軍一萬、孟州經略使徒單百家領兵五千、自便道濟河、趣關、陝、自將平陽精兵赴援、京師十一月壬午、胥鼎入京師、拜尙書左丞、兼樞密副使、乙酉、元兵至河池、右副元帥蒲察阿里不孫軍潰而逃、阿魯帶亦被創、元兵過陝州、由三門集津北渡而去、戊戌、華州元帥府復潼關、十二月癸亥、元兵攻平陽、胥鼎遣兵拒戰、元兵不利、乃去、金國志は親征錄の如く、誤りてこの役を一年前の事とし、貞祐三年八月、大軍自河東渡河、攻潼關、不能下、乃由嵩山小路趨汝州、遇山澗、輒以鐵鎗相鎖、連接爲橋以渡、于是潼關失守、金主急召花帽軍于山東、十月、大軍至杏花營、距汴京二十里、花帽軍擊敗之、大軍復取潼關、自三門析津、乘河冰合、布灰引兵而渡、自是不復出、とあり、年月は金史と違へれども、事實は大概合へり、攻潼關不能下と云へるは、竟に下らざるに非ず、禁坑より遶り出でられて、戍卒潰えたる故に、下に潼關失守とあり、その由嵩山小路と云へるは、潼關を遶れる間道に非ず、潼關を越えたる後に汝州に趨ける山徑なり、召花帽軍于山東は、完顏仲元に命じて入り援はしめたることなり、金史元史に記せる丙子の役と一事なること、疑ふべきなし、然るに商輅の續綱目は、金國志親征錄に據り、乙亥の年に三合拔都南侵の事を記して、潼關失守、自是不復出の二句を省き、又丙子の年に金史元史に據りて、冬十月、蒙古兵克金潼關、次嵩汝、間云と書き、三合拔都の名を省きたるは、金國志の紀年の誤に因り、一事を兩事としたるにて、謂はゆる誤に因りて

續綱目續資治通鑑の誤

更に誤れるなり、畢沅の續資治通鑑も、續綱目の誤に襲れり、この二史は、人の信用する書なるが故に、その誤をかく辨じ置くなり、さて又丙子の役は、金の腹地を荒したれども、さほどの大捷もなかりしに、秘史には、金軍の殲滅窮餓の状を、事しく敘ぶるを見れば、太宗三年、拖雷の陝西より入りて、汴京に迫りたる三峯山の捷、元史に、流血被道、資仗委積、金之精銳、盡於此矣とあるものと混じたるに似たり、然らば、亦列合答は、三峯山の敗將、移刺蒲阿完顏合達なるべし、豁李格、完顏陳和尚の稱號などにてやあらん、

失喇客額兒の駐蹕

成吉思合罕は、河西務を下すこ、中都の失喇客額兒に下馬せり、(河西務は、鎮の名、今の順天府武清縣の北、白河の支流なる新引河の西にあり、失喇客額兒は、黄なる原の義なれば、中都の近郊を呼べる蒙古語なるべけれど、もいづこを指せるか知らず、但この文誤れり、金の宣宗の遷れる頃は、親征錄元史に據るに、太祖は塞外に居りて、中都の邊に到らざりしなり、)

者別の關破り

者別は、察卜赤牙勒の關を破りて、察卜赤牙勒を守る軍を動して來て、成吉思合罕に合へり、(この時居庸關には、阿勒壇罕、中都より出づるに、中都の内に合答を留守となし、任せて去りたりき、)太祖紀に、十年乙亥三月、金御史中丞李英等、率師援中都、戰于霸州、敗之、五月庚申、金中都留守完顏福興、仰藥死、抹撚盡忠、棄城走、明安

中都の留守合答

入守之とあり。この時の事は、金史の承暉、即福興、抹撚、盡忠、李英、烏古論、慶壽等の傳に甚委しけれども、合荅の名は見えず。親征錄には金の留守哈荅國和等とあり。衛紹王紀、大安三年に西北路招討使粘合打、宣宗紀、貞祐三、成吉思合罕は、中都の金銀財段物何にても數へしめに、汪古兒厨官阿兒孩合撒兒、失吉忽秃忽三人を遣りき。この三人を來ぬとて、合荅は迎へ接けん、金あり紋ある段物を取りて、中都の内より出でて、迎へに來ぬ。合荅に失吉忽秃忽言へらく、前にこの中都の物、即中都は、阿勒壇罕のなりしぞ。今中都は、成吉思合罕のなるぞ。成吉思合罕の物なる段物を背處にて、柰何ぞ偷みて持ち來て與ふる。汝我取らずと云ひて、失吉忽秃忽は取らざりき。汪古兒厨官阿兒孩二人は取りたり。この三人は、中都の物皆を數へて來ぬ。そこに成吉思合罕は、汪古兒阿兒孩

直 失吉忽秃忽の廉

忽秃忽三人に合荅は何をか與へたると問へり。失吉忽秃忽申さく、金あり紋ある段物を持ち來て與へき。我言く前にこの中都は、阿勒壇罕のなりしぞ。今は成吉思合罕のとなりたるぞ。汝合荅は、成吉思合罕の物を背處にて偷みて柰何ぞ與ふる。汝と云ひて、我は取らざりき。汪古兒阿兒孩二人は、彼の與へたるを取りきと云へり。成吉思合罕は、そこに汪古兒阿兒孩二人を甚く咎めたり。失吉忽秃忽を大なる道理を考へけり。汝と云ひ、大に恩賞して、視る我が目、聽く我が耳となりて居らずや。汝と勅ありき。（親征錄に、明安、太保、入據之。遣使獻捷。上時駐海、哈撒兒三人、檢視中都帑藏。時金留守哈荅國和等、奉金幣爲拜見之禮。雍古兒哈撒兒受之。獨忽都忽拒不受。將哈荅及其物北來。上問忽都忽曰、哈荅等嘗與你物乎。對曰、有之。未敢受之。上問其故。對曰、臣嘗與哈荅言、未陷城時、寸帛尺縷皆金主之物。今既城陷、悉我君物矣。汝又安得竊我君物爲私惠乎。上正佳之、以爲知大體。而重責

雍古兒阿兒海哈撒兒等不珍也。哈答因見其孫榮山而還。正佳不珍の二語は字の誤りあらん。元史には「明安入守之」の下に「ただ是月避暑桓州涼涇遣忽都忽等籍中都帑藏」とあり。

金の質子

阿勒壇罕は南京に入りて親降り頓首て騰格哩と云ふ子を百の從者にて成吉思合罕の處に侍衛になれとておこせけり。(金史元史を考ふるに金の宣宗は質子を送りたることなし。太宗四年王守純の子曹王訛可を出して質たらしめ太宗は速不台を留めて還り居庸を出でたることを太祖宣宗の時の事と誤りたるに非ずや。) 彼等に降られて成吉思合罕は退かんとて察卜赤牙勒に依りここに退く時合撒兒を左手の軍にて海に遵ひて遣る時北京の城に下馬せよ。北京の城を降して彼方主兒扯惕の夫合訥を過ぎ去りて夫合訥反かんせば打取れ降らば彼の邊なる彼の城をも過ぎ兀刺河訥兀河に沿ひ去りて塔兀兒河

合撒兒東略の命

に沂り山越えて大老營に會ひに來よと宣ひて遣りぬ。(金の) 大定府は古の奚の地遼中京を建て大定府と名づけ金北京と改め元の至元七年大寧路と改め明大寧衛とせり。清一統志に大甯故城在今内蒙古喀喇沁右翼南百里喜峯口東北四百八十里老哈河之北老哈河は白狼河とも云ふ。水道提綱に白狼河經故大甯城南俗稱巴爾漢城一曰察罕巴爾漢城とあり。主兒扯惕は女真即主兒臣の複稱金の本國の民なり。夫合訥は蒲鮮の訛ならん。親征錄甲戌太祖九年四月の處に金主之南遷也以招討萬奴爲成平路宣撫復移治於忽必阿蘭

女眞の蒲鮮萬奴

兀刺河納兀河塔兀兒河

至是亦以眾來降仍遣子鐵哥入質既而復叛自稱東夏王太祖紀に十年乙亥冬十月蒲鮮萬奴降以其子帖哥入侍既而復叛僭稱東夏とあり。兀刺は女眞語河なり。黑龍江を薩哈連烏刺と云ひ松花江を吉林烏刺と云ふ。この兀刺は松花江なり。清一統志に「打牲烏拉城在吉林城北七十里混同江東岸烏拉之先布顏築城於烏拉河上洪尼地國號烏拉」とある混同江も烏拉河も皆松花江なり。納兀河は盛京通志の諾尼江水道提綱の嫩泥江龍沙紀略の腦溫江にして今は嫩江と云ふ。高寶詮曰く嫩泥江古名難水亦曰那河元史地理志稱桃溫水特薛禪傳曰惱木連忽憐傳曰孫河伯帖木兒傳曰納兀河洪萬傳曰那兀河王綽傳曰那河皆即納活對音塔兀兒河は水道提綱に洮兒河亦曰桃爾河源出西興安山東麓云至札賴特旗南匯爲一納藍撒藍池猶言日月池也。東流入嫩泥江黑龍江外紀に唐書他漏河即今拖爾河一作洮兒河其源流千里並在蒙古境內高寶詮曰洮兒河魏書稱太彌河北史曰太岳魯水唐書曰它漏河遼史曰他魯河曰撻魯河金史曰撻魯古河皆即討活兒之對音高氏は元史の桃溫を納兀河としたれども納兀にはあらずして塔兀兒

合撒兒の東略につきての疑ひ

史。錢大昕の考異に「銀青蓋舉其官名謂銀青光祿大夫非人姓名也」と云へり。今金史奥屯襄の傳を見るに「貞祐三年正月襄爲北京宣差提控完顏習烈所害」とあり。習烈は、即續綱目の昔烈、又即親征錄の斜烈、奥屯襄は、即謂はゆる銀青なり。北京の降れるは、元史紀傳みな乙亥の年なるを、續綱目に甲戌の年としたるは、名臣事略に因りて誤れるなり。さて合撒兒の東征は、元史に據れば、遼西諸郡を取れるのみにして、北京を取れるは、木華黎なるを、祕史に合撒兒北京を取ると云へるは、傳聞の異辭なり。むしろ祕史の誤ならん。又遼東の經略も、耶律畱哥の傳に「歲壬申太祖七年太祖命按陳那衍行軍至遼東畱哥率所部降之云云」とあれば、この按陳即阿勒赤の東略は、即合撒兒に從ひて行きたるにやとも思はるれども、その年（七年壬申）は、三道侵掠の年（八年癸酉）の前なれば、強ひて牽き合はせ難し。又夫合訥を蒲鮮の訛とすれば、蒲鮮萬奴の降りたるは、親征錄は九年甲戌の四月とし、太祖紀は十一年丙子の十月とし、相去ること二年半にして、いづれも合撒兒に降ると云はず、その詳なることは、今考ふべからず。

西域征伐の始まり

その後成吉思合罕は、撒兒塔兀勒の民に兀忽納が頭たる百の使を拘へて殺されて、成吉思合罕宣はく「金の縻繩を撒兒塔兀勒の民にいかでか斷たしめたりし」として、兀忽納が頭たる百の使の爲に、讎復し怨報いに、撒兒塔兀勒の民の處

翰雪勒幹旋乞撒勒乞三

闊喇自姆の異稱

に出馬せん」として出馬する時、（この撒兒塔兀勒は、闊喇自姆朝の管内には撒兒惕人即抹哈篋惕教徒多きが故に、蒙古人は撒兒塔兀勒の國と云へり。親征錄元史本紀には西域の汎稱を用ひ、傳には回紇回鶻又は回回と云ふ。回回も回紇の轉なり。唐の回紇の遺種は、實に畏兀兒にして、畏兀兒も回紇の轉なり。元人は回紇の遺種を呼ぶに畏兀兒の新名を用ふるは善けれども、回紇の舊名を闊喇自姆朝に當てたるは誤れり。長春の西游記には、畏兀兒をも撒兒塔兀勒をも皆回紇と云へり。闊喇自姆朝の本土は、鹹海の南、裏海の東に在り、今の希哇の地に於て、玄奘の西域記に貨利習彌伽、隋書西域傳に穆國、新唐書西域傳に「火尋、或曰貨利習彌、曰過利、元史地理志に花刺子模と云ひ、西人は合喇自姆とも闊哇喇自姆とも忽哇喇自姆とも云ふ。闊喇自姆朝の興亡と蒙古西征の僕努施特勤、始めて闊失惕の記載甚詳かなり。北宋の時、薛勒主克王馬里克沙の僕努施特勤、始めて闊喇自姆部の酋長となり、その子庫惕別丁抹哈篋惕は、闊喇自姆子亦牙勒阿兒思、闐朝を滅し、亦喇克阿者姆を取り、巴固荅惕の合里發より冊封を受けたり。宋の寧宗慶元六年（西紀一二〇〇年）塔喀施の子阿刺額丁抹哈篋惕嗣ぎ立ち、巴勒黑赫喇惕馬贊迭囉乞兒曼を并せ、乞魄察克を打破り、元の太祖四年（一二〇九年）西遼に叛き、その西境を奪ひ、八年（一二一三年）河間の國（西回紇）を滅し、撒馬兒罕に新都を建て、闊喇自姆の兀兒堅只城を舊都と云へり。又誥兒の國を并せ、その後曠自納の地を定めたる時、合里發納資兒を廢せんと欲し、大軍を率へて闊喇自姆を圖らしむる密書を得て、大に怒り、納資兒を廢せんと欲し、大軍を率へて西征し、路に

闊喇自姆朝の興り

て發兒思阿在兒拜展を降し、太祖十三年戊寅（一二一八年）合里發の領地に入り、たれども大雪に遭ひ、又土兵に襲はれ、利あらずして退けり。還りて孛合喇に到れば、西域の商侶蒙古より歸り、太祖の贈物を上り、通商を求むる辭を傳へ、阿刺額丁はいやいやながらそれを許せり。既にして太祖は諸王官人に命じて各賢を出さしめ、畏兀兒人四百餘人を發して、西域の商侶に從ひ往きて、その産物を求めしめたり。然るに斡惕喇兒城に到れる時、城將亦納勒主克該兒罕は悉く拘へて、蒙古より細作を遣せりと、王に告げれば、王は命じて悉く殺さしめ、惟一人逸げ歸りたり。捏撒腓はその中四人は使にて、外は皆商人なり。それらを殺せるは、亦納勒主克の意にして、王の命に非ずと云へり。耶律楚材の西游録に、苦蓋西北五百里、有訛打刺城。此城渠會、嘗殺命吏數人、商賈百數、盡掠其財貨。西伐之舉、由是也。とあり。命吏數人は、捏撒腓の使四人と云へるに近く、商賈百數は、祕史の百の使と數は合へり。喇失惕の四百餘人は、おまけあるに似たり。洪鈞の西域補傳に、多遜を譯して、太祖聞逸者歸報、驚怒而慟、免冠解帶、跪禱於天、誓必雪恨。其時古出魯克餘孽猶未靖、乃先遣西域人巴固喇爲使、偕蒙古官二人往詰責云云。王篋死、巴固喇、薤、蒙古官鬚釋歸、以辱之。自聚兵於撒馬兒罕、と云ひ、この下に蒙古の兵、篋兒乞惕の餘眾を逐へるもの、合米赤河にて闊喇自姆の兵と衝突せる小戦あり。太祖紀には、只十四年己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征とあり。そこに也遂合敦は、成吉思合罕に建議して、奏さく、合罕は、高き峠を越え、廣き河を渡り、長き出征し、多き國を平げんと思ひ給へり。生れたる只命あ

也遂合屯の建議

斡惕喇兒

温都兒

斡兒堅

兀兒亮

るものに長生なるは無かりき。大木の如き爾が身傾き去らば、麻穰の如き國民を誰にか委ねん。柱の如き爾が身倒れ去らば、羣鳥の如き國民を誰にか委ねん。生れたる四人の駿れたる子だちを、彼等の誰をさか宣ふらん。子だちに弟だちに

あまたの民草に我儕小人にも心附けてあらまほし。心附きたるここを建議したるなり。聖旨知しめせ。譯皇帝涉歴山川、遠去征戰、若一日、倘有不諱、四子内命誰爲王、可令眾人先知。

と奏したれば、成吉思合罕勅あるには、合敦の人にもあれご

も孛斡兒出木合里等も、かくは建議せざりき。我も先祖の大業を承繼がざるに、承繼ぐべき人、忘れて居りき。死ぬるここを

業を承繼がざるに、承繼ぐべき人、忘れて居りき。死ぬるここを

兀者阿剌恢

兀馬兒塔

兀忽良額

兀哩都思

拙赤を察阿歹の罵り

得られざるに、温塔喇睡りて居りき。宣ひて、我が子どもは、拙赤なるぞ。何をか云ふ。汝言へ。宣へり。拙赤聲を出す前に、察阿歹言く、拙赤に言へ。宣ふは、拙赤にや委ねん。宣ふならん。この篋兒乞惕より出でたるものにかんぞ知らしめん、我等」云ふ。こ等しく（拙赤の生れたる時の事は、秘史に載せざれども、李三人の征伐に乗じて逃げ歸りたる後に生れたる故に、拙赤と名づけられたり。拙赤は、蒙古語客なり。洪鈞の尢赤補傳は、喇失惕阿不勒、嘴資に據り、李兒台有姊爲汪罕妃、烈祖又嘗有德於汪罕、故聞太祖之訴、即脅蔑兒乞、歸李兒台、未被掠時、孕已數月、比在歸途、尢赤生倉卒、無襁兒具、乃搏麪如籃形、置於騎、以載歸。太祖喜曰、此不速之客也。故名曰尢赤。と云へり。この事情に依りて、）拙赤は起ちて、察阿歹の領にしがみつきて言く、罕額赤格には取分けて言はれざるに、汝は我をいかでか揀分けたる。いかなる技能にて勝れたる。汝、たゞ剛情にてのみ蓋勝れたり。汝、遠箭を射て汝に

拙赤の怒り

合黑察 客察兀

黠巴兒

額兒顯

桓亮察

喧嘩の引き分け

闊闊搠思の懇なる訓諭

勝たれば、親指を断ちて去てん。搏ち合ひて汝に勝たれば、倒れたる地に起きざらん。罕額赤格の聖旨知しめせ。云へり。拙赤察阿歹二人領を執り合ひて立ち居る時、拙赤の手を李幹兒出扯きて、察阿歹の手を木合黎扯きて居る時、成吉思合罕聽きて、際みて在せり。そこに闊闊搠思は、左の邊に立ちて言く、察阿歹は何ぞ遽てたる。爾爾の罕額赤格は、子だちの内にて爾に望を掛けて居給ひき。爾だち生るゝ前は、星ある天は、廻り（變動）てありき。多き國民は、反き居りき。臥處にも入らず、掠め合ひたりき。地皮ある地は、翻りてありき。普き國民は、反き居りき。衾にも臥さず、攻め合ひたりき。かゝる時には、互に用心して、外に行かざりしぞ。行けば、出遇ふこととなりし

明なる我等の合致は、日の如く明なる湖の如く寛き心坐し
 ましき(明) 你父初立國時、與你母一同辛苦、將您兒子每養大、
 望(譯) 你成人、你的母如日般明、海般深、這等賢明、你如何可這
 般說、云へり。

太祖の諭し

察阿歹の譲り

それより成吉思合罕宣はく「拙赤をいがんぞかく云へる、
 汝等我が子どもの兄は、拙赤に非ずや。後はかく勿云ひそ」こ
 勅ありき。この言につき、察阿歹微笑みて言く「拙赤の力ある
 技能の答は言ふまじ。口にて殺したるは、馱すべからず。言に
 て死なしめたるは、剝取るべからず。(悪く言はれても滅り) 子ご
 もの兄は拙赤我等二人なるぞ。罕額赤格に竝行き、力を與へ
 ん。逃げたるをば、劈き斫り合はん。後れたるをば、踵を斷ち斫
 り。答勒答哩黑三、答勒巴魯、豁只答黑三、
 兀忽兀魯克先、兀ト赤、阿馬阿兒、阿刺黑三、阿赤、兀格額兒、
 保里牙、巴喇阿、

拙赤の譲り

り合はん。幹歌歹のみは、敦厚なり、幹歌歹を云ひ合はん。(勸進)
 幹歌歹は、罕額赤格の前に居て、形影大なる皮帽の訓を奉け
 しめば、可からんぞ。云へり。この言につき、成吉思合罕宣は
 く「拙赤は何をか云ふ。言へ」こ宣へり。拙赤言く「察阿歹已に言
 へり。察阿歹我等二人、罕額赤格に竝行き、力を與へん。幹歌歹
 を云ひ合はん。(明) 教幹歌歹承繼者」こ云へり。成吉思合罕勅
 あるには、竝行きつゝ、何ぞあらん。(明) 你二人不必竝行、土地
 なる母は、廣くあり。河ごも水ごもは多くあり。分つべき營盤
 を廣げ、外國を鎮めさせ分たんと宣ひて、「拙赤察阿歹二人は、
 言に遵ひ合へ。民に勿笑はせそ。人に勿嘲らせそ。前に阿勒壇
 忽察兒二人は、かくの如き言を定め合ひて、却てその言に遵

諸子分封の端

幹歌歹相續のう
けがひ

はざる故に、いかにか爲られし。何をか爲されし。今阿勒壇忽
 察兒二人の子孫より汝等と共に分け合はん。彼等を見ては、
 いかんぞ慢られん。汝等（明）如今他子孫見在（教隨）您每（以爲）鑑
 戒（宣）宣ひて、幹歌歹は何をか云ふ言へ（宣）宣へり。幹歌歹言
 く「合罕額赤格恩賜して言へ（云）はるれども、何をか申さん、
 我能はず（い）かでか申さん。出來る限慎まん（も）申さんぞ。
 久後若我が子孫に、青草に裏む（も）牛に喫はれざる、膏に裏
 む（も）狗に喫はれざる（もの）生れば、麋（の）如く跳越え、鼠（の）如
 く順（ひ）去らしめんか。（辭）讀む人の判斷又は改譯を俟つ。明の譯官も困り
 たりと、只恐後世子孫不才、不能承繼（だけ）を譯せり。大意）これだけを
 ぞ申さん。別に何をか申さん、我（と）云へり。この言につき成吉

拖雷翼衛の志

思合罕勅あるには「幹歌歹かゝる言を言ふならば、可きぞ」
 宣へり。又「拖雷は何をか云ふ言へ（宣）宣へり。拖雷言く「我は、合
 罕額赤格の名ざしたる兄に、前に居て、忘れたるを心附けて、
 睡りたるを喚覺して、然諾の伴、赤馬の鞭（こ）なりて、然諾より
 温塔喇黑散（後）れず、班列より缺けず、長き出征（し）して、短（き）劇（し）戰を
 戦ひて與へん（言）へば、成吉思合罕は善し（し）勅あるには
 「合撒兒の子孫一人に、その位を知らしめ、阿勒赤歹の子孫一
 人に知らしめ、幹惕赤斤の子孫一人に知らしめ、別勒古台の
 子孫一人に知らしめん。かく思ひて、我が子孫一人に知らし
 めて、我が勅は、別に爲さず（變）毀らざれば、違はざれ、失はざ
 れ、汝等、幹歌歹の子孫に、青草に裏む（も）牛に喫はれざる、膏

太祖の兄弟五人
各一人相續の約

に裏むごも狗に喫はれざるもの生れば我が子孫の内にも一人も善きもの生れずやはあらん」と勅ありて、(合撒兒阿勒赤歹台四人の子孫の相續の事と太祖の子孫即元帝金帳罕察合台罕亦勒罕の相續の事とは編末の附録に述ぶべし。)

唐兀惕の徵發

成吉思合罕出馬するに、唐兀惕の民の不兒罕の處に使を遣り、汝の右の手を爲らんと云ひたりき。汝撒兒塔兀勒の民に金の縻繩を斷たれて折證せん」と出馬せり。我右の手を遣りて出馬せよ」と云ひ遣りたれば、不兒罕聲を出さざるに、まづ阿沙敢不言く「力足らざる内に罕を爲りつゝ、何と云ひて、軍を添へず、大なる言を言ひて遣りき。そこに成吉思合罕宣はく「阿沙敢不にいかでかかく言はれたりしと考へ、彼等の處に便翻りて指して往かば、何の難きことかあらん。別に即

阿沙敢不の代言

人の處に向ひて居る時なるぞ。罷めん」その事を長生の上帝に祐護せられば、金の牽智堅固なるを扯きて來ば、そこに即成就せよ、その事を宣ひて、(この時の不兒罕は、夏の神宗李遵頊なる遵頊位を嗣げり、元史太祖紀には、十三年戊寅、即西域征伐の前年、是歲、伐西夏、圍其王城、夏主李遵頊出走西涼とあれども、秘史の趣にては、罅隙開けたるのみにて、征伐は無かりし様なり。親征錄集史にも、その年西夏を伐ちたることを載せず。)

忽蘭合屯の隨行 幹惕赤斤の留守

兔の年(我が順徳天皇承久元年己卯、宋の嘉定十二年、金の宣宗興定)、撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽蘭合屯を伴れ進み、弟たちより幹惕赤斤那顔を大老營に畱守せしめて出馬せり。(耶律楚材の西游錄に「戊寅春三月、出雲中、抵天山、涉大磧、踰沙漠、達行在所。明年、大舉西伐。元史耶律楚材の傳にも「己卯夏六月、帝西討、回國、親征錄己卯、上總兵征西域、太祖紀十四年己卯夏六月、西域殺使者、帝率師親征、使者の殺されたるは戊寅の年にして、己卯の年に出征したるなり。多遜の史は、主吠尼に本づきて、二二一八年に使者殺され、その冬成吉思汗は幹兒朶

諸書異辭なき己卯の西征

を發し、弟兀主堅、斡惕赤斤に國の政を委ね、二一九年の夏、亦兒的失の河邊に駐りて、馬を養ひ、軍を整へ、委古兒の君、巴兒主克、阿勒馬里克の君、昔固納克帖勤、合兒魯克の阿兒思、闌罕みな會し、秋、師進み、六十萬と云はれたり。闊喇自姆王懼れて、何の計もえせず、蒙古の軍、昔渾河に至るまで、抗敵するもの無かりきと云へり。二一九年は、即己卯の年なり。丘長春の西游記に、宣使劉仲祿、己卯の五月、在乃滿國兀里朶得旨とあるは、太祖親發の前月なり。乃滿國兀里朶は、太祖の四月、斡兒朶の一なる乃蠻の斡兒朶、辛巳の六月、長春の立寄りたる處にして、下文に「窩里朶、漢語行宮也。其車輿、亭帳、望之儼然。古之大單于、未有若此之盛也」と云へり。耶律楚材の雲中より至りたる行在所も、この斡兒朶なり。二一八年、戊寅の冬、斡兒朶を發したる多遜の史は、客魯噠河の大斡兒朶にして、乃蠻の斡兒朶を發したるは、己卯の秋、軍を進めたることなり。己卯の西征は、諸書殆ど異辭なし。然るに、喇失惕の史には、兔の年、諸皇子將帥を集めて、西伐の事を議り、軍中の法度を定め、龍の年、亦兒的失河に駐夏し、秋、軍を進めて、斡惕喇兒城に至るとあり、諸書に較ぶれば、一年後れたり。親征錄は、己卯、上總兵征西域と書き出したれども、次に「庚辰、上至也兒的失河、住夏、秋、進兵、所過城皆克、至斡脫羅兒城」と云へるは、全く喇失惕に同じ。蓋、修正秘史の紀年、一年の後れありしと見えて、己卯より癸未まで五年の間の事蹟は、親征錄も集史も皆一年づつ後れたり。洪鈞曰く、帝駐也兒的失河、應是己卯夏、而西域史、辰年方至也兒的失河、與親征錄同。由是而見、脫必赤顏之敘、西伐、誤始龍年。元史既本之、而又考知他書始於己卯、據以增入。於是攻取蒲華、薛迷、思干、兩城、一事、兩記、譯西域史、乃知其病在此。この一事、兩記は、錢大昕より疑ひ始めたる難題なりしが、洪鈞の解説にて、その病の根本明になれり。阿喇

修正秘史の紀年の一年後れ

西征の路順

亦は、卷八なる阿喇嶺にして、乃蠻の地より不黑都兒麻河の源に赴くに越ゆる所なり。然るに太祖西征の路は、不黑都兒麻河に向はずして、乃蠻の地より阿勒台山の東南、幹山を越えて、合喇額兒的失河に出でたれば、阿喇亦を越ゆと云へるは、いかゞあらん。耶律楚材、丘長春の經たる路は、蓋大軍の異なるらざる故に、楚材の西游録と長春の西游記とに依り、太祖の進軍を跡附くるは、頗る興味ある事なれば、語長けれども、こゝに補敘せん。まづ西游記に、辛巳五月、中旬、陸局河出で、石河を見、高嶺に登り、海子に行き、六月、十四日、長松嶺を越え、西北に行き、平地に（客魯噠河）を離れてより、西に行き、六月、二十八日、泊窩里朶之東、宣使往奏、裏皇斤（高き松）山に當て、石河を薛連噶河の南の深水なる赤羅禿石ある河に當て、高嶺の下なる海子を一源なる額帖兒河の邊に置けり。次に七月、九日、同宣使西南行、五塔、紉曰く、尖れる峰は、烏里雅蘇台の東なる康該の雪峰の一なる斡惕桓兒罕山なり。その麓、李固丁河の源に一の湖あり。峽より出でたる後、西に流る、河は、烏里雅蘇台河なりと云へり。長春は、それより西南に行き、沙場を過ぎ、又五六日、嶺を踰えて南し、田鎮海の城の北を過ぎ、二十六日、復東南過大山、經大峽、中秋日、抵金山、東北少駐、復南行。其山高、大深、谷長、坂車不可行。三太子出軍、始關其路、約行四程、速度五嶺、南出山前、臨河止泊。從官連幕爲營、因水草、便以待。鋪牛驛騎數日、乃行、渡河而南。下咧惕施、乃迭兒曰く、長春の過ぎたる山口にて、大軍の過ぐる爲に、路の關かれたるを見れば、長春は、成吉思汗、耶律楚材と同じ路を行きたるこ

額帖兒河の邊なる乃蠻の斡兒朶

阿勒台の東南幹山

必什巴里克

とつなし。答必思騰答班の山口は、阿勒台山脈を越ゆる時、内にて困難少き所なれば、長春等は、その山口を過ぎたるならん。然れども、又上文の水草の便と河を渡るとの二語に據れば、兀蘭答班を越えて、不勒昆河(兀命古河の上流)に下れりとも考へらる。これより長春は、直に南に進み、白骨甸を度り、沙河を過ぎ、委兀兒の國に向ひたれども、西征の軍は、金山を越えたる後、馬力を養はんが爲に、西に轉じて合喇額兒的失河に一夏を過したりき。合喇額兒的失河の谷と、その深水なる克喇河の谷とは、今も善き牧場として名高しと云ふ。西游錄に、道過金山云云。金山而西、水皆西流入海とあるは、兀命古河の乞失勒巴什湖に入り、合喇額兒的失河の齋桑湖に入るの類を云ふ。次に、其南有回鶻城、名別石把云云。城西二百里、有輪臺縣。西游記に、八月二十七日、抵陰山、後翌日、沿川西行、歷二小城。西即鼈思馬大城云云。此大唐時北庭端府。其西三百餘里、有縣曰輪臺。九月二日、西行。四日、宿輪臺之東。又歷二城、重九日至回紇昌八刺城。記の鼈思馬は、即錄の別石把、元史の別失八里、喇失惕の必什巴里克にて、委兀兒の都なり。克刺普囉惕は、必什巴里克を今の烏嚕木齊に當てて、洪鈞もそれに從ひたれども、かくては昌八刺に接近して、輪臺を置くべき所なし。徐松曰く、唐北庭大都護府治、在今濟木薩之北、端即都護字之合音。輪臺縣治約在阜康縣西五六十里と云へる。從ふべし。昌八刺は、元史地理志に、彰八里、耶律希亮の傳に、昌八里と書けり。程同文曰く、中統元年、阿里不哥反、希亮踰天山、至北庭都護府。二年、至昌八里城。夏、踰馬納思河、則昌八里在今瑪納斯河之東也。錄に、瀚海去別石把城數百里。過瀚海、千餘里、有不刺城。不刺南有陰山、山頂有池、周圍七八十里。出陰山、有阿里馬城。記に、翌日(九月十日)並陰山而西、約二十里。忽有大池、方圓幾二百里。師名之曰天池。沿池正南下、左右峯巒峭拔、眾流入峽、奔騰洶湧、曲折彎環、可六七十里。二太子扈從西征、始鑿石理道、刊木爲四十八橋、橋可並車、薄暮宿峽中、翌日方出入。東西大川、次及一程、九月二十七日、至阿里馬城。錄の瀚海は、即記の沙場なり。徐松曰く、晶河城東、至托多克、積沙成山、浮澀難行。東距阜康縣、一千一百里。故云、十餘程。不刺は、地理志に、普刺、耶律希亮の傳に、布拉と書き、喇失惕は、普刺惕と云へり。洪鈞曰く、今城已廢。當在博羅塔拉河左近。南臨賽喇木淖爾。徐松曰く、自托多克過晶河、山行五百五十里、至賽喇木淖爾。東岸、淖爾正圓、周百餘里、雪山環之、所謂天池海。並淖爾南行五十里、入塔勒奇山峽。諺曰、果子溝、水南流、勢甚湍急、架木橋以度。車馬、峽長六十里、爲四十二橋、即四十八橋遺趾。記の東西大川は、伊犁河の谷を云へるなり。阿里馬城は、元史の阿力麻里、珀兒沙人の阿勒馬里克なり。嚕西亞の薛篋諾甫は、阿勒馬里克は、庫勒札の西北四十嚕里、伊犁河の谷にありきと云ひ、嚕西亞の庫勒札領事たりし教授咱合囉甫は、綏定より七嚕里の所に古城の大なる廢墟あることを聞き知れりと云ひき。又錄に、又西有大河、曰伊犁、十月二日、乘舟以濟、とあり。塔刺思河は、伊犁河より刺速沒輦、水勢深闊、抵西北流。十月二日、乘舟以濟、とあり。塔刺思河は、伊犁河より遙し。西にあり、記を書きたる人ふと誤りたるなれば、これは伊犁河として見るべし。長春の歸路に、癸未三月二十三日、吹沒輦の南岸に至り、又十日、至阿里馬城西百餘里、濟大河、とある。大河は、この伊犁河なり。錄に、其西有城、曰虎司窩魯朶、即西遼之都。附庸城數十。記に、十月二日、乘舟以濟、南下至一大山、阿刺套嶺か、又西行五日、云云。西行七日、度西南一山、略思帖克山口か。明日、至回紇小城。十有六日、西南過板橋、渡河、晚至南山、阿列克散迭兒山脈下、即大石林牙。其國王、遼後也云云。板橋にて渡れる河は、即吹沒輦、今の楚河にして、合喇乞塔惕の都は、楚河と阿列克散迭兒山脈との間にありしなり。錄に、又西數百里、有塔刺思城。記に、十有八日、沿山

賽喇姆諾兒

阿勒馬里克

塔刺思城

西遼の故都

而西七八日、山忽南去。一石城當途、石色盡赤、有駐軍古跡。西有大塚、若斗星相聯。又渡石橋、竝西南山、行五程、至塞藍城。記を書ける人、伊犁河を荅刺速沒輦と誤りたる故に、こゝには塔刺思河の名を擧げず。然れども、渡れる石橋は、塔刺思河の橋なるべし。ト咧惕施乃迭兒曰く、長春は、今の庫勒札に近き阿勒馬里克を發したる後、伊犁河を庫勒札より遠からぬ所にて渡りたりと見ゆ。それより蓋今の威兒尼のある所に進みたり。阿刺套連山に沿ひ西に行き、蓋舊き驛路に由り、喀思帖克山口にて、連山を越えたり。原注、威兒尼より塔什肯篤に車の通らるゝ新しき驛路は、北に廻り路して、關什珀克にて舊路に合ふ。楚河をば必ず今の脱克馬克にて渡り、阿列克散迭兒山脈の麓に達したるならん。それより今驛路あるこの山脈の麓を西に行き、塔刺思河に到り、今の奥列阿塔の邊にて河を渡りき。賽喇姆城は、沁肯惕の東十三英里に、今も猶あり。奥列阿塔より塔什肯篤に至る驛路は、賽喇姆に近く通るなり。錄に、又西南四百餘里、有苦蓋城、八普城、可傘城、芭攪城。苦蓋西北五百里、有訛打刺城。苦蓋は、失兒荅哩牙の南岸なる關氈篤なり。八普は、地理志に巴補と書き、經世大典の圖は、柯散の南に置けり。嚕西亞の地圖に、納曼干の西、失兒荅哩牙の北に帕魄とあるは、それなり。可傘は、地理志の柯散、曷思麥里の傳の可散にして、納曼干の西北三十嚕里、喀散、小河の傍にあり。芭攪城は、速勒壇、巴別兒の記録に見えたる、康底巴擔にして、關氈篤の東にありき。康底は、城邑、巴擔は、巴旦杏にして、巴旦杏の名高き所なり。この果は、支那に無かりし故に、珀兒沙語をその儘に用ひたり。本草綱目には、巴旦杏と書き、本草正要には、八擔杏と書けり。錄に、芭攪城邊、皆芭攪園、故以名。其花如杏、而微淡、葉如桃、而差小。冬季而花、夏盛而實、と云ひ、記にも、正月杷攪始華、類小桃、俟秋採其實、食之、味如胡桃、と云へり。芭攪も杷攪も、巴擔を聞き誤りたるなるべし。嚕西亞の地圖に、浩罕篤

巴擔城

關氈篤河

者別等三將の派遣

と關氈篤との間に康亦巴擔と云ふ所あるは、即その地なり。訛打刺は、名高き幹惕喇兒なり。後に言ふべし。記に十一月五日、塞藍にて病死したる門人趙九古を葬り、即行西南、復三日、至一城。明日、又歷一城、復行二日、有河、是爲霍闌沒輦。由浮橋渡。霍闌沒輦は、中世の阿喇必亞地理家の昔渾河、今の失兒荅哩牙なり。常徳の西使記に、忽牽河、元史郭寶玉の傳に、忽章河、明史の西域傳に、火站河と云ひ、赫兒別羅惕は、阿喇必亞人は、昔渾河を通俗には、納哈兒關展篤、關展篤の河と呼びたり。と云ひ、速勒壇、巴別兒も、この河をしか呼べりと云ふ。ト咧惕施乃迭兒曰く、長春の歴たる二城の一は、沙什、即塔什肯篤なるべし。失兒荅哩牙を渡れる所は、蓋撒馬兒罕に至る驛路の通る赤納思なりけん。蒙古の軍は、幹惕喇兒指して西に進みたりしに、長春は、賽喇姆より直に西南に行きたれば、賽喇姆以往の行程は、大軍と同じか。者別を先鋒に遣りぬ。者別の後援に速別額台を遣りぬ。速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ。(脱忽察兒は、多遜のりて、太祖の婿なりと云へり。元史世系表なる鐵木哥幹赤斤の孫塔察兒國王を集史に脱曷察兒と云へるに依れば、この脱曷察兒は、博爾忽の傳に附記せる從孫塔察兒ならんと考へらる。塔察兒の傳に、西征に従へることを載せざるは、軍令に違ひて太祖に責められたる故に、その家傳に諱みて略かれたりしならん。)この三人を遣るに、外面に往きて速勒壇の彼方に出でて、我等を到らしめて、夾攻めん、と宣ひて遣りぬ。者別は、かく往き

脱忽察兒の軍令
違反

速勒壇の異文

罕に非ざる罕篋
里克
親征錄なる三將
の追撃

て罕篋里克の城（しる）もを経て動（うご）さず、外面（そと）を過（す）ぎけり。その後（うしろ）より速別額台（たい）も、その理由（いゆう）に依（よ）り動（うご）さず過ぎけり。その後（うしろ）より脱忽察兒（ちやく）は、罕篋里克（かん）の傍（かたはら）の城（しる）も侵（をか）して彼の田禾（たなつもの）を掠（かす）めき。罕篋里克（かん）は、城（しる）をも侵（をか）されたりとて、背（そむ）き動（うご）きて、札刺（ちや）勒（ら）丁（てん）莎勒壇（しゃ）に合（あ）ひけり。（速勒壇は抹哈篋惕闊喇自姆沙は合里發の命をも受けず）に僭稱（けん）せり。この時抹哈篋惕已（い）に死（し）し、その子者刺勒額丁（てん）即（すなは）ち者刺列丁（てん）は、速勒壇（す）の位（ゐ）を嗣（ついで）ぎたり。札刺勒丁莎勒壇（しゃ）は、者刺列丁速勒壇（す）の訛（ご）なり。速勒壇（す）は、西游録（し）に梭里檀（し）親征錄（しん）に速里壇（す）西游記（し）元史（げん）郭寶玉（くわ）の傳（でん）に筭端（さん）郭侃（くわ）の傳（でん）に筭灘（さん）巴而朮（ぱ）阿而忒（あ）の傳（でん）に鎖潭（さ）とあり。者刺列丁（てん）は、親征錄（しん）元史（げん）本紀（ほん）に札蘭丁（し）とあり。罕篋里克（かん）は、巴而朮（ぱ）阿而忒（あ）の傳（でん）に罕勉力（かん）とあり。喇失惕（ら）に據（よ）れば、篋兒甫（け）の酋長（しゅ）にして、一國（い）の罕（かん）に非（ひ）ず。親征錄（しん）元史（げん）本紀（ほん）に篋里可汗（け）と云（い）ひ、秘史（ひ）原文（げん）に罕（かん）と篋力克（け）とを離（は）し、語譯（ご）に皇帝（てん）篋力克（け）文譯（ぶん）に篋力克（け）王（わう）と云（い）へるは、皆（みな）非（ひ）なり。者別等（しや）三將（さん）の派遣（てん）は、太祖（た）十四年（じゅう）乙卯（い）の秋（あき）攻撃（こう）の始（は）まりし時の事（こと）に非（ひ）ず。親征錄（しん）に據（よ）れば、太祖（た）已（い）に失兒河（し）の畔（は）なる諸城（しよ）を下（くだ）し、孛合喇撒馬兒罕（は）を平（ひら）げ、拙赤察阿歹（ち）斡歌歹（お）は兀兒堅只（わ）に克（く）ち、拖雷（た）は闊喇散（くわ）の諸城（しよ）を破（やぶ）り、太祖（た）自ら阿木河（あ）を渡（わた）り、巴勒黑（ぱ）を破（やぶ）り、壬午（にん）太祖（た）十七年（じゅう）の春（はる）塔列干（た）の寨（さい）を破（やぶ）りたる後（のち）、是夏（し）避暑（ひ）於塔里汗（た）寨高原（さい）時（とき）西域（し）速里壇（す）札蘭丁（し）遁去（とん）。遂命（す）哲別（て）爲（な）す前鋒（ぜん）追之（お）、再遣（また）速不台（す）拔都（は）爲（な）す繼

集史なる三將の
追撃

又遣（また）脱忽察兒（た）殿（てん）其後（のち）、哲別（て）至（いた）茂里可汗（ま）城（じやう）不犯（ふ）而過（を）、速不台（す）拔都（は）亦（も）如（ごと）之（を）。脱忽察兒（た）至（いた）、與其外軍（そ）戰（たたか）、蔑里可汗（め）懼（おそ）棄（を）城（じやう）走（を）とあり。この文（ぶん）の大意（たい）は、秘史（ひ）と異（ちが）ならず。然（しか）れども、喇失惕（ら）の集史（し）に據（よ）れば、三將（さん）の派遣（てん）は、者刺列丁（てん）を追（お）はんが爲（な）に非（ひ）ずして、抹哈篋惕（ま）を追（お）はんが爲（な）なりき。集史（し）の文（ぶん）は甚（た）委（た）し。その略（りやく）に曰（い）く、蛇（へび）の年（とし）太祖（た）十六年（じゅう）辛巳（しん）の春（はる）、成吉思汗（せい）は、孛合喇（は）を破（やぶ）り、諸軍（しよ）を集（あ）めて撒馬兒罕（さ）を圍（かこ）むる時（とき）、速勒壇（す）已（い）に南方（なん）に遁（に）れたりと聞き、徹別速不台（て）を遣（あ）り、各（おの）各（おの）萬人（まん）にて追（お）はしめ、脱（だ）察兒（さ）巴哈都兒（ぱ）にも萬人（まん）にて續（つづ）かしめ、戒（い）めて曰（い）く、彼（か）もし強（か）くはむかひて、汝等（に）力（ちから）足（た）らずば、進（すす）まずして、速（すみ）く我（われ）に告（つ）げよ。彼（か）遁（に）れば、穴（あな）に入（い）るとも、窮（きう）めよ。過（か）ぐる所（ところ）にて、降（くだ）る者（もの）は懷（な）け、逆（さか）ふ者（もの）は壞（こ）れ。三年（さん）を期（き）とし、迭施惕（て）乞魄察克（き）より抹古里（ま）思壇（し）に回（か）り、我等（われ）に遇（あ）へ。汝等（に）の後（のち）より、我（われ）又（また）拖雷（た）に闊喇散（くわ）の諸城（しよ）を平（ひら）げしめ、拙赤（ち）察合台（さ）幹（かん）凱旋（がい）せんと云（い）ひて、三將（さん）を遣（あ）り、已（い）に撒馬兒罕（さ）を陷（おと）して、その秋（あき）三皇（さん）成（せい）し畢（は）へば、凱旋（がい）せんと云（い）ひて、三將（さん）を遣（あ）り、已（い）に撒馬兒罕（さ）を陷（おと）して、その秋（あき）三皇（さん）子（こ）を闊喇自姆（くわ）に遣（あ）り、成吉思汗（せい）は、拖雷（た）と鐵門關（て）を過（か）ぎ、拖雷（た）を遣（あ）りて、闊喇散（くわ）を攻（せ）めしめたりと云（い）へり。抹哈篋惕（ま）の追窮（お）を命（めい）ぜられたる三將（さん）の内（うち）、脱（だ）察兒（さ）の名（な）は、その後（のち）見（み）えず。徹別速不台（て）は、巴勒黑（ぱ）你沙不兒（に）諸城（しよ）を降（くだ）し、路（みち）を分（わ）けて西（にし）に進（すす）みたり。抹哈篋惕（ま）窮（きう）迫（お）し、裏海（う）の小島（せう）に入りて病死（び）せり。その子（こ）者刺列丁（てん）位（ゐ）を嗣（ついで）ぎ、島（しま）より出（で）て、闊喇自姆（くわ）に往（ゆ）きたれども、雷（らい）まること能（た）はず。南（なん）に走（は）りて、噶自納（か）に入りたり。馬（ま）の年（とし）太祖（た）十七年（じゅう）壬午（にん）の春（はる）、拖雷（た）は、闊喇散（くわ）の諸城（しよ）を平（ひら）げて、還（か）り、成吉思汗（せい）と兵（へい）を合（あ）せて塔列干（た）の寨（さい）を攻（せ）め下（くだ）し、察合台（さ）幹（かん）歌台（か）も、闊喇自姆（くわ）を平（ひら）げて至（いた）り會（あ）し、その夏（なつ）塔列干（た）に駐（すま）れり。とありて、さて三將（さん）追撃（お）の初（は）に遡（さ）り、三將（さん）の速勒壇（す）を追（お）ひし時（とき）、篋兒甫（け）の酋長（しゅ）罕篋里克（かん）は、使（し）を遣（あ）りて降（くだ）りたり。徹別速不（て）吉思汗（き）は、もし罕篋里克（かん）の地（ち）を經（か）ば、侵（をか）すべからずと三將（さん）に命（めい）じたり。徹別速不（て）

失吉忽秃忽の敗北

台は命の如く侵さず過ぎたるに、脱噶察兒後れ至り、軍士劫掠したれば、山居の人拒ぎ戦ひ、脱噶察兒陣歿せり。罕篋里克は、脱噶察兒の横暴なることを成吉思汗に告げ遣りて、衣服を贈りて謝したり。然れども懼れて安からず、者刺列丁の嚙自納に奔れ、奔れるを聞き、使を遣りて屬したり。と云へり。然らば、脱噶察兒の軍士の劫掠は、速勒壇抹哈篋惕を追ひて、巴勒黒より、你沙不兒に向へる時にして、喇失惕は、罕篋里克の者刺列丁に屬すること、を敍べんが爲に、者刺列丁の嚙自納に奔れる後に、至り追敍したるなり。然るを親征録に、札蘭丁を追へるが如く書けるは、誤れり。されどもこの誤は、修正祕史を誤譯したるにも非ず、原本祕史より已に誤り居たるなり。又多遜の史には、一二二〇年、太祖十五年、庚辰の春、孛合喇撒馬兒罕を取り、徹別速不台を遣り、抹哈篋惕を追はしむとありて、脱噶察兒の事を云はず。さてその後、援を爲さしめたり。拖雷は、その冬、姊妹の夫、脱噶察兒に先鋒として、捏撒に遣り、その城を屠りたる後、脱噶察兒は、你沙不兒に至り、その已に降りたるを知らずして、侵掠し、城兵に射殺されたり。一二二一年、太祖十六年、辛巳の春、拖雷の軍は、篋嶮沙希展、即篋兒甫を降し、你沙不兒を破れる時、脱噶察兒の妻は、萬人を率ゐて、城に入り、人畜を屠りて、夫の仇を報いたり。と云ひて、篋兒甫の酋長、罕篋里克の事は、名も見えず、諸書と異なり。多遜は、多く主、吠尼に本づきたりと云へども、恐らくは誤あらん。たゞ癸未以前五年の閒、紀年の正しきは、多遜の札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人は、成吉思合罕の迎獨得なり。)

(逆)に出馬しけり。成吉思合罕の前に失吉忽秃忽先鋒に行き

西游記の月日の確實

けり。失吉忽秃忽と對陣して、札刺勒丁、莎勒壇、罕篋里克二人は、失吉忽秃忽を敗りて、成吉思合罕の處に到るまで勝ちて來つるに、(親征録、蔑里可汗懼、棄城走の續に、忽都忽那顏聞之、率兵進襲。時、蔑年、壬午の條に、夏、避暑塔里寒寨、西域主札蘭丁出奔、與滅里可汗合。忽秃忽與戰不利)とあり。集史に、馬の年の夏、太祖塔列干に居りし時、失吉忽秃忽を三萬人にて者刺列丁を禦ぎに遣りぬ。罕篋里克はその眾と、康克里人とを率ゐて、者刺列丁に合ひ、勢益振ひ、蒙古の軍と別、嚙安に遇へり。者刺列丁は自ら中軍を、罕篋里克は右翼を、賽弗丁、阿固喇克は左翼を率ゐ、終日戦ひて、決せず。明日、又戦ふ。者刺列丁眾を勵まして、圍み攻め、失吉忽秃忽敗れ、走り、死傷夥しかりき。成吉思汗これを聞き、者刺列丁は虜獲を分てる時、罕篋里克は、阿固喇克と駿馬を争ひ、阿固喇克の面を策もて、搥ちたるを、者刺列丁は、祖母の族人なりとて、止めざりしかば、阿固喇克怒り、部兵を率ゐて、客兒曼の方に去れり。者刺列丁勢弱り、又蒙古の軍の至らんことを恐れ、嚙自納に退き、信度河を渡らんとせりとあり。多遜は、一二二一年、太祖十六年、辛巳の秋、成吉思汗は、塔列干を發して、南に行き、失吉忽秃忽を先鋒に遣り、その冬、巴嚙安の戦ありとし、罕篋里克を阿民馬里克に作り、突兒罕合屯の弟なりと云へり。太祖の塔列干を發して、欣都庫施山を越えたるは、多遜の云へる如く、十六年、辛巳の秋にして、親征集史、元史の如く、十七年、壬午の夏ならず。なることは、長春の西游記を以て、證すべし。そもそも西游記の記事の内

烏古孫仲端の往還

は辛巳の年太祖十六年客魯噠河の南岸を西に行ける時五月朔亭午日有食之、
 既衆星乃見、須臾復明、蝕自西南、生自東北、とあり、又邪米思干の人は、此中辰時食
 至六分止と云ひ、金山の人は、巳時食至七分と云へり、とあるに由り、その書の月
 日の確實なることは、極印を打たれたるものなり、この日食は、金史の天文志に
 も、興定五年五月甲申朔、日食と記され、淮黎は、卜喇惕施の午前、三時、四十五分の食
 者の序に、この日食は、一、二、一、一、年五月二十三日、倫敦の午前、三時、四十五分の食
 甚なることを推定して、長春の觀察の誤りなきことを云へり、さて長春は、十六
 年辛巳の十月二日、伊犁河を濟りてより、西に行くこと十二日にして、西南の一
 山、喀思帖克嶺を越えたる時、逢東夏使回、禮師於帳前、因問、來自何時、使者曰、自七
 月十二日、辭朝、帝將兵追算端、汗至印度、この使者は、金の宣宗の使烏古孫仲端に
 して、この年七月の初に、塔列干にて、太祖に謁し、太祖の者、刺列丁、速勒壇を追ひ
 に出馬したるを見て、辭し、回れるなり、金史宣宗紀に、興定四年七月、以烏古孫仲
 端等、使大元、五年十二月丁巳、禮部侍郎烏古孫仲端、翰林待制安庭珍、使北還、各進
 一階、忠義傳に、仲端奉使、乞和於大元、云云、至西域、進見太祖皇帝、致其使事、乃還、自
 興定四年七月、啓行、明年十二月、還至、とあり、金の興定五年は、即太祖十六年なり、
 劉祁の撰れる、仲端の北使記に、至五年十月、復命とあるは、十の下二の字を脱せ
 るなり、又北使記に、四年十二月初に、北界蒙古の地を出で、五年四月上旬に、西
 遼に至るとあるに、據れば、仲端は、西遼より三月行きて、七月の初に行宮に朝し、
 辭し、回り、又三月にして、十月中旬に、西遼を過ぎて、長春に逢ひ、又二月にして、復
 命したるなり、元史太祖紀十六年辛巳の條に、金主遣烏古孫仲端奉國書、請和、稱
 帝爲兄、不允とあるは、よけれども、又十七年壬午の條に、秋、金復遣烏古孫仲端來
 請和、見帝于回鶻國、帝謂曰、我向欲汝主授我河朔地、令汝主爲河南王、彼此罷兵、汝

信度河の戰

主不從、今木華黎已盡取之、乃始來請耶、仲端請哀、帝曰、念汝遠來、河朔既爲我有、關
 西數城未下者、其割付我、令汝主爲河南王、勿復違也、仲端乃歸、とあるは、前年に書
 くべき勅語をこの年に書き、仲端再至、者別速別額台脫忽察兒三人
 は、札刺勒丁莎勒壇、罕篋里克二人の後より入りて、却て彼等
 を敗りて殺して、不合兒薛米思加卜兀荅喇兒の城に、彼等を
 合はしめず、勝ちて申木噠に到るまで追ひて行かれ、申木噠
 に跳込みて入るゝなり、多き撒兒塔兀勒をそこに申木噠に
 滅したるぞ、札刺勒丁莎勒壇、罕篋里克二人は、命を助かりて、
 申木噠に、者別速別額台、抹哈篋、惕死し、者刺列丁、南に
 奔りたる後、亦喇克以西の地を侵し、遂に乞卜察克の地に入り、申木噠の戰には、
 加はらざれば、こゝに二將を引出したるは、大なる誤なり、不合兒等の三城は、後
 に注すべし、申木噠は、唐西域記の信度河、即今の印度河なり、申は、信度の下略、木
 噠は、蒙語河なり、親征錄に、辛自速河とある、自速は、目連の誤なり、親征錄に、上自
 塔里寒寨、率精銳親擊之、追及辛自速河、獲蔑里可汗、札闌丁遁去と云ひて、河の名も云
 而遁とあるを、元史に、帝自將擊之、擒滅里可汗、札闌丁遁去と云ひて、河の名も云

はざるは、いつもながら餘りに簡略なり。喇失惕の集史には、失乞忽禿忽敗れて歸りたれば、成吉思汗自ら軍を率ゐて塔列干を出で路を急ぎて飯をも炊かず米を齧みながら行き、別嚕安の戦地に至り、敵味方の陣處を問ひ、地を善く擇ばざりしことを責め、噶自納に至れば、者刺列丁は、已に十五日前に去りたりき。一將を留めて城を守らしめ、疾く追驅けたり。者刺列丁已に船を備へ、明日信度河を渡らんとする處へ、成吉思汗夜疾く行き、曉に追附きて取圍めり。者刺列丁を生捕らんと欲し、軍士に矢を發たざらしめ、兀克兒古勒札古都思古勒札二將をして敵の後を絶たしむ。古都思古勒札は、秘史卷七卷八に見えたる巴嚕刺思の忽都思合勒渾なるべし。敵兵漸く退き河に至れば、その右翼を二將烈しく攻め破り、罕篋里克を殺せり。者刺列丁は、中軍を率ゐる、晨より日中まで戦ひ、左右兩翼皆破られ、中軍僅に七百人となり、右に左に衝撃す。諸軍は令を奉じて矢を發たざる故に、者刺列丁は圍を衝破りて出で、胸甲を棄て、馬を躍らして、多遜は、二丈の崖より、信度河に入り、盾を負ひ、旗を攜へて泳ぎ去れり。成吉思汗感じ入り、諸子を顧みて、誰もかくこそありたけれと云へりとあり。この戦は、巴嚕安の戦の續にて、親征錄元史集史は、皆壬午の年とすれども、倭勒甫は、一二二一年辛巳の年の秋とし、多遜は、その年の冬とせり。罕篋里克は、東西の諸史皆この戦に殺されたりとすれば、札刺列丁と共、成吉思汗合罕は、申木噠に浜り往きて、に逃れたりとせざるは、誤ならん。

巴嚕安原の駐夏

巴嚕安原の駐夏
客額兒に下馬して、母小河牝馬小河に到りて、巴嚕安

巴嚕安原の位置

者刺列丁を巴刺の追驅け

元史地理志に、巴達哈傷、書には、巴達克山りて、印度河の上流に在らず。又巴荅黑山を平げたるは、多遜に據るに、一二二〇年の秋帖兒篋惕を取れる後、阿木河を渡る前にあり。巴嚕安原は、もしその地ならば、こゝに書きたるは時違へり。母小河は、蒙古語、額客豁囉罕、は、牝馬小河、格温豁囉罕、にして、土名を蒙古語に義譯して、子母河と譯したるは、牝馬なる格温の子なる可温と誤りたるなり。親征錄に可温寨、集史に古納温庫兒干とあるは、皆格温豁囉罕の誤なり。蒙古語に寨を庫兒干と云ひ、小河なる豁囉罕と音近き故に、小河を寨と誤れり。巴嚕安原は、親征錄元史に八魯彎川、集史に別嚕安とあり。即失乞忽禿忽の敗北したる所なり。今も略不勒と安迭喇トの溪との間、欣都庫施山の高き處に、帖兒彎の峽あり。そこに又同じ名の河と小邑とありて、西紀一六〇三年に僧正誥思は、略不勒より巴荅黑山に至る路にてそこを通り、第九世紀の人亦奔忽兒荅惕必は、已に珀嚕安を巴米安に屬する諸邑の中に擧げたり。速勒壇巴別兒はその記録に、帖兒彎の峽路は甚險しく、そこ大谷との間に小き峽七つありと云ひ、帖兒彎の風と名づけらるると云へり。帖兒彎の又、略不勒にて夏吹く風は、帖兒彎の風と名づけらるると云へり。帖兒彎の巴刺を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克一人を追はしめに遣りて、

成吉思汗實錄卷の十一

四二五

（札里牙兒は、札刺亦兒の誤なり。札刺亦兒の巴刺は、功臣の第四十七なる巴刺扯兒必なり。親征錄に、遂遣八刺那顏將兵急追之。不獲。因大擄忻都人民之半。而還。癸未太祖十八年春、上兵循辛自速河而北、命三太子循河而南、至不昔思丹城、欲攻之。遣使來稟命。上曰、隆暑將及、宜別遣將攻之。夏、上避暑於八魯彎川、候八刺那顏

者別速別額台の恩賞

脱忽察兒の責められ

脱忽察兒死せりと云へる誤傳

三皇子の兀兒堅只攻め

阿木荅哩牙の古名

兀兒堅只の所在

悉平之集史の別嚕安の近處を平ぐるを云ふ。兩旬可矣は、撒馬兒罕より行在ま
 で二十日にて到るべきを云へり。太祖の行留の年月は、唯西游記に由りて委し
 く分りたり。この年八月以後、者別速別額台二人を甚く恩賞して、者
 別汝は、只兒豁阿歹と云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別
 となりたるぞ。汝脱忽察兒は、罕篋里克の邊の城ごもを己が
 心に依り侵して、罕篋里克を叛かせたり。法に當て斬らしめ
 んと云ひ畢へて、却て斬らしめず、甚く責めて、彼の軍を知る
 ことより罰ひて下せり。明只重責罰、不許管軍。巴嚕安原の駐夏
 額台は、已に高喀速山を越えて、歐囉巴に入りたれば、太祖のこの賞罰は、この駐
 夏の時の事にあらずして、太祖十五年庚辰の夏、三將續きて罕篋里克の城を過
 ぎ、脱忽察兒の亂暴を罕篋里克より訴へられたる時の事なるべし。かくて脱忽
 察兒は、軍を知ること罷めたる故に、者別速別額台の二將のみ西の方に進み
 たり。脱忽察兒は、その時古兒只思壇の山民に殺されたりと、喇失惕は云ひ、拖雷
 の先鋒として、你沙不兒に戦死せりと多遜は云ひたれども、傳聞の誤ならん。元
 史博爾忽の傳なる從孫塔察兒は、即この脱忽察兒、即西史の脱嚕察兒にして、太
 祖崩じて後、太宗に從ひて金を伐ち、五年癸巳金帝を蔡に圍み、六年甲午金を滅

し、十年戊戌に卒したり。

かくて成吉思合罕は、巴嚕安原より回りて、拙赤察阿歹幹
 歌歹三人の子たちを、右手の軍にて、阿梅木噠を渡りて、兀囁
 格赤の城に下營せよと遣りぬ。事巴嚕安原より回りてと云ふは、斡
 命ぜられたるは、太祖の者刺列丁を追ひて南下する前、十五年庚辰の春、撒馬兒
 罕を攻め落したる後、その秋、速勒壇駐夏の地に太祖の駐まりし時の事なり。親
 征録は、庚辰を誤りて明年辛巳とし、是夏、上駐軍於西城、速里壇避暑之地、命忽都
 忽那顏爲前鋒、秋分遣大太子二太子三太子、率左軍攻玉龍傑赤之城と云へり。左
 軍は、右軍の誤なり。集史にも右軍とあり。阿梅木噠は、即阿木荅哩牙にて、西游記
 に阿母沒輦、劉郁の撰れる常德の西使記に、暗木河、元史に阿母河、阿木河などあ
 り。木噠は、この河の蒙古語、荅哩牙は、河の突兒克語なり。額篤哩昔の地誌に、哇黑施と
 云へるは、この河の古名に、希臘人の幹克速思、漢書の嬌水、隋書唐書の烏澹
 水、唐西域記の縛弼河は、皆哇黑施の轉なり。哇黑施の名は、今阿木河の上流なる
 北源の一大河の縛弼河に、殘れり。阿喇必亞人は、只渾河と云ひ、突兒克人は、阿木河と
 云ふ。李合喇の西南に當り、河の左岸、今の察兒錐の邊に、阿抹勒と云ふ城ありし
 と云ひたること、中世の抹哈篋惕徒の記録に見ゆ。阿梅は、即阿木也の轉なり。
 兀囁格赤は、親征録元史本紀にも、玉龍傑赤とあれども、正しくは、兀兒堅只と云

斡惕喇兒の落城

かくて成吉思合罕は、兀都喇兒の城を下して、(この事は、前に

該兒罕の死物狂

元史敘事の不都合
李合喇撒馬兒罕の戦

太祖西征の初に書くべき事なり。喇失惕曰く、斡惕喇兒の守將は哈亦兒罕にして、都より至りし哈刺札罕は、二萬人にて助け守れり。五月の間圍まれて、城民亂れ、哈刺札罕は降らんと云ひたれば、察合台、斡歌台は、その不忠を責めて殺して、遂にその城を破れり。哈亦兒罕は、親兵三萬を率ゐて内堡を守り、一月の間禦ぎ戦ひ、士卒皆死して始めて擒となり。庫克撒喇に送りて殺されたり。哈亦兒罕は、多遜の書に亦納勒主克該兒罕と云ひ、突兒罕合屯の弟にして、太祖の使者を殺したる人なり。元史本紀に取訛荅刺城、擒其酋哈只兒只蘭禿とあり。二つの只の字は、蓋皆亦の誤にて、哈亦兒罕は、哈亦兒罕なるべく、亦蘭禿は亦納勒主克の訛なるべし。庫克撒喇は、太祖撒馬兒罕を圍める時御營のありし所なり。斡惕喇兒の城は、秋の末より始まりて六月を費やしたれば、落城したるは、翌年の春の末に攻む。正に太祖の撒馬兒罕を圍める時なり。親征録の紀年は、喇失惕と同じく、一年づつ後れたれば、庚辰太祖十五年の秋、至斡脫羅兒城、上雷二太子三太子攻守、尋克之とあるは、城攻の始まりを云へるにて、尋克之と云へるは、翌年の事を終言したるなり。元史本紀に、十五年庚辰、駐蹕也石河、秋、攻斡脫羅兒克之とあるは、親征録に據りたるなれども、尋克之の尋の字を略きたる故に、秋攻めて秋克之とあるは、親征録に據りたるなり。又本紀の敘事は、多くは親征録に據りながら、又紀年正しき他の書に據りて、帝率師親征の下に、直に取訛荅刺城と書きたる故に、敘事重複せるのみならず、六月師を出して、その月の内に、兀都喇兒の城より動

撒馬兒罕の名稱地理

きて、薛米思加卜の城に下營せり。薛米思加卜の城より動き

て、不合兒の城に下營せり。(薛米思加卜は、下文に薛米思堅ともあり、撒

亞のいと古き名城にして、希臘の阿歴散迭兒大王の至りたる馬喇罕荅は、即この地なりと云ふ。漢書西域傳に、大月氏國、治監氏城とある。監氏は、撒馬兒罕篤の南有山名伽色那山とあるは、撒馬兒罕篤を國の名として記せる始なり。迷密伽色那は、唐西域記の弭秣賀城、周二十餘里、極堅固、多居人、異方寶貨、多聚此國。土地沃壤、稼穡備植、林樹鬱鬱、花菓滋茂、多出善馬、機巧之技、特工諸國。氣序和暢、風俗猛烈。凡諸胡國、此爲其中。進止威儀、近遠取則。其王豪勇、鄰國承命。兵馬強盛、多是赭羯。とあり。唐の初は、西突厥の屬國となりしかども、その猶富強なりしを見るべし。隋書西域傳に曰く、康國者、康居之後也。遷徙無常、不恆故地。然自漢以來、相承不絕。其王、本姓溫、月氏人也。舊居祁連山北昭武城。因被匈奴所破、西踰葱嶺、遂有其國。支庶各分王。故康國、左右諸國、竝以昭武爲姓。示不忘本也。都於薩寶水上。阿祿迪城。城多眾居。名爲強國。而西域諸國多歸之。康國と云へるは、撒馬兒罕篤の罕の音を取りて、單名となせるにて、弭秣賀を米國と云ひ、乞史を史國と云ひ、屈霜你迦を何國と云ひ、貨利習穆を穆國と云ひ、漕矩吒を漕國と云へると同例なり。薩寶水は、今の咱喇甫山河なり。匈奴に破られ云云は、史記大宛の傳に、始月氏居燉煌、祁連山、及爲匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏、而臣之。遂都媯水、北爲王庭とあるを謂へるなり。媯水、阿木河の北、即失兒阿木兩河の間は、漢の初より月氏に屬したれば、

康居の後なりと云へるは甚誤れり。月氏の事を敍べたる下文とも自ら矛盾せり。こはたゞ康の字同じきに由り附會したるなり。康居の地は大宛今の弗兒嘎納の西北にありて、今の乞兒吉思曠野なり。舊唐書の西戎傳は、隋書に據りて、康國即漢康居之國也と誤り、又その被匈奴所破を爲突厥所破と改めて、更に誤を加へたり。蓋舊唐書の作者は、康國は古の康居の國なりと思へるに由り、月氏をここに遷りたるは、近世の事ならんと考へて、匈奴を突厥と改め、史記漢書に明記せる月氏西遷の事を忘れたるなり。新唐書の西域傳は、康者、一曰薩末韃亦曰颯秣建、元魏所謂悉萬斤者と云ひて、康居なりとは云はざれども、月氏を破れるものを匈奴とせずして突厥としたるは、舊唐書に同じ。高宗永徽時、以其地爲康居都督府とあるを見れば、高宗の朝臣も、貞觀の隋書を作れる史官の誤を承けて、康國と康居とを混じ居たるなり。又新唐書は、史國即羯霜那を康居の小王蘇雍城の故地なりとし、何國即屈霜你迦を康居の小王附墨城の故地なりとし、安國即捕喝を康居の小王罽城の故地なりとし、五翁侯の一なる貴霜翁侯の故地にして、康居の故地に非ず。羯霜那即今の舍勒も、捕喝即李合喇も、皆兩河の間に在りて、月氏の地なるを妄に康居の故地としたるは、唐人のてたらめなり。又唐人は、捕喝即李合喇を漢の安息に當てて、安國と名づけ、何國と名づけ、顯慶三年遂に安を安息州とし、東安を木鹿州としたり。唐人の地理を誤れることかくの如し。然るに東西の史家は、新舊唐書のかく妄なるに心附かず、康居の五小王の故地まで實がらしく列記せるを見て、月氏康居の地を考ふるに迷へるもの多きに由り、序ながらしく、に辨じ置くなり。さて撒馬兒罕篤の篤を略きて呼ぶは、漢文の常なる

が、馬兒科保羅も、漢人より聞きなれたる爲にや、撒馬兒罕と云ひて、篤の音を略けり。中世の基督敎の傳道師は、この城を薛米思罕惕と云へり。耶律楚材の庚午元曆を進むる表に、庚辰、聖駕西征、駐蹕尋思干城。西游錄に、訛打刺西千餘里、有大城曰尋思干。尋思干者、西人云肥也。以地土肥饒故、以名甚富庶。環城數十里、皆園林。飛渠走泉、方池圓沼、花木連延、誠爲勝槩。瓜大者如馬首。尋思干、乃謀速魯蠻種落、梭里檀所都。蒲華苦蓋訛荅刺城、皆隸焉。尋思干の名は、早く遼史の天祚紀に見えたり。湛然居士集に、又尋思處と書き、尋思、肥也。虔、城也。と譯し、元史郭寶玉の傳には、尋思干とあり。尋思も尋思も、皆薛米思にて、親征錄、元史本紀、察罕曷思麥里等の傳に、薛迷思干と書き、長春の西游記には、前に尋思干、後に邪米思干と書けり。薛米思は、突兒克語に肥を謂ひ、罕篤は、珀兒沙語に城を謂へば、楚材の解は善く當れり。西游記に辛巳の年、仲冬、十有八日、過大河、至邪米思干大城之北、云云。其城因溝岸爲之。秋夏常無雨、國人疏二河入城、分繞巷陌、比屋得用。方算端氏之未敗也。城中常十萬餘戶。國破而來、存者四之一。其中大率多回紇人。城中有岡、高十餘丈、算端氏之新宮據焉。又壬午の年、二月二日、遊郭西、隨處有臺池樓閣、閒以蔬圃。望日復遊郭西、園林相接、百餘里、雖中原莫能過、但寂無鳥聲耳。又瓜を賞して、味極甘香。中國所無。間有大如斗者、十枚可重一擔と云へり。元史地理志に、撒麻耳干、明史西域傳に、撒馬兒罕とあり。不合兒は、即李合喇にして、これもいと古き名城なり。北史西域傳に、吐密とあるは、この地なり。隋唐の人は、安國と名づけ、新唐書西域傳に、安者、一曰布豁、一曰捕喝、元魏謂吐密、西瀕烏澹河とあり。捕喝と書きたるは、唐西域記なり。西游錄は、蒲華と書き、尋思干、西六七百里、有蒲華城、土產更饒。城邑稍多と云へり。親征錄に、卜哈兒、元史地理志に、不花刺、察罕の傳に、李哈里、明史西域傳に、卜花兒とあり。今嚕西亞人は、不哈兒と云ふ。李合喇、撒馬兒罕の二城は、

李合喇の異稱

二古城の沿革

二城の攻め落し

上古より亦囉の國に屬し、漢の初より大月氏に占據せられ、隋の世に西突厥に屬し、唐の高宗の時暫く唐に屬し、中宗の時大食の國に屬し、僖宗の時撒曼朝興りて、李合喇に都し、宋の眞宗の時撒曼朝は西回紇の亦列克罕に滅され、亦列克罕の子孫は撒馬兒罕に都し、北宋の末に西遼興りても、その屬國となりて河閒に殺され、河閒の全土は、關喇自姆朝に屬したり。この二城を太祖の平げたるは、撒馬兒罕は後にして、李合喇は前なり。本書の敘事顛倒せり。喇失惕曰く、成吉思汗は、既に各軍を分け遣り、その子拖雷を伴れ、沙漠の僻路を行き、翌年の春、李合喇に至りて圍み攻めたり。守將庫克罕等、眾を率ゐて遁れんとし、春の末、撒馬兒罕城民降を請ひたれども、内堡は猶抗禦し、兵民三萬人皆死せり。春の末、撒馬兒罕に向へり。撒馬兒罕は要害堅固にして、突兒克即康克里の兵六萬、塔只克の兵五萬にて守りたれども、速勒壇抹哈篋惕は既に遁れて居らざりき。御營は庫克撒喇に駐まり、拙赤等の諸軍皆至り、五日の間圍み攻めて、城壞れ、兵民多く屠られたり。親征錄に曰く、辛巳、上與四太子追攻ト、哈兒薛迷思干等城皆克之、大太子又攻克、養吉干八兒眞等城、八兒眞は、元史地理志に巴耳赤刊とあり。喇失惕は、巴兒合里肯篤と綴りたれども、普刺諾喀兒關尼は、巴兒沁と云ひ、小阿兒篋尼亞の君海團の紀行に、帕兒沁とあるは、巴兒眞の方に音近し。その遺址は確ならねども、列兒出の紀行へる、巴兒眞の名ある古錢は、その地にて鑄たるものなるべし。喇失惕曰く、拙赤の一軍は、昔固納克を屠り、幹自肯篤、巴兒合里肯篤を降し、額施納思を破り、氈篤を取り、兵を分けて、養吉罕篤を取れり。又阿刺克那顏等の三將は、別納客惕に克ち、闊氈篤に克てり。昔固納克は、海團の紀行に、薛固納黑とあり。列兒出の突兒其思壇考古游歴に據れば、その遺址は、失兒河の濱なる、主列克砲臺の

右軍の勝利

左軍の勝利

元史の重複

東南四十二嚕里、河より十八嚕里離れたる處に在り、今速納克庫兒干と云ふ。幹自肯篤は、失兒河の下流にあり、弗兒嘎納の兀自肯篤と異なり。拙赤の氈篤、養吉罕篤を取れるは、察合台幹歌台の幹惕兒を破り、阿刺黑等の闊氈篤に克ち、太祖の季合喇に向へると大抵同時にして、三路の軍は、各その使命を畢へたる後、大軍に會して共に撒馬兒罕を圍めり。親征錄集史は、誤りて此等の戦を太祖十年辛巳の事としたれども、多遜は主吠尼に據り、一二二〇年(十五年庚辰)の事とせり。元史は十五年庚辰春三月、帝克蒲華城、夏五月、克尋思干城と云ひ、又十六年辛巳春、帝攻ト、哈兒薛迷思干等城、皇子亦赤攻、養吉干八兒眞等城、竝下之と云へり。庚辰の蒲華尋思干は、前年己卯の訛答刺と共に、西游錄と譯字全く同じければ、蓋西游錄の原本に據りて書けるならん。今の西游錄は、盛如梓の節録したるにて、全本に非ざれば、此等の記事なし。辛巳のト、哈兒薛迷思干、養吉干八兒眞は、庚辰の也石的石也兒的石的誤寫、幹脫羅兒と共に、親征錄に據れること甚明なり。そこに成吉思合罕は、巴刺を待たんと、(この一句は、不都合極まり)取りて避暑したるは、十五年庚辰の夏なり。巴嚕安原(金の寨の嶺なる)沙に避暑して、巴刺を待ちたるは、十七年壬午の夏なり。金の寨の嶺なる沙勒壇の避暑處に避暑して、(金の寨阿勒壇豁兒罕)土人は何と云ひ録には、是夏、上駐軍於西域速里壇避暑之地と云ひて、その秋、三皇子を玉龍傑赤に派遣したることを敘べ、於是上進兵過鐵門關と云ひ、喇失惕はその夏、成吉思汗は、撒馬兒罕の境内に遣り、その秋、拖雷汗と共に、納黑舍トに往き、路路游牧して帖皇子

金寨嶺の避暑

鐵門關の地理

喀施

木兒合魯噶を過ぎたりと云ひ、多遜は撒馬兒罕に駐まれる時、徹別速不台を派遣し、一二二〇年の夏、皆を撒馬兒罕と納黑舍トとの間に過し、その秋、三皇子を合魯噶は鐵門關の蒙語なり。元史に夏四月、駐蹕鐵門關と云へるは誤れり。帖木兒鐵門關は撒馬兒罕の南にある峽路にして、西南に向ひ、納黑舍トより往くに路二つあり。南金の寨に避暑したる故に、納黑舍トの路を通れり。喀施は魏書西域傳の伽色尼國にして、隋書西域傳に史國、都獨莫水、南云、俗同康國、北去康國二百四十里、南至吐火羅五百里、西去那色波國二百里。唐西域記に從颯秣建國、西南行三百餘里、那居獨莫水、南西五十里、距那色波、南四百里、吐火羅也。隋大業中、築乞史城、那色波は、即納黑舍トなり。伽色尼、那色波、南四百里、吐火羅也。皆一音の轉にして、喀施なる名の原なり。亦奔好喀勒は、北宋の初に始めて喀施の名を記し、西游記には碣石、明史西域傳には渴石と書けり。元の時、巴嚕刺思氏世世この地を領し、駙馬帖木兒こゝに生れたり。その山川清麗なるが故に、舍里薛ト思、即綠城の名あり。今は略きて舍勒と云ふ。城の傍を流るゝ小河、即隋書新唐書の獨莫水、を今喀施喀苔哩牙と云ふは、古名喀施の遺れるなり。納黑舍トは、魏書の那識波國にして、新唐書に那色波、亦曰小史、蓋爲史所役屬とあり。亦奔好喀勒は、納黑舍トは、喀施の山より二日路離れたる野に在りと云へり。元史地理志に那黑沙トとあり。察合台の五世の孫、客珀克汗、そこに宮殿、即喀兒失を築きたる故に、後世はその地を喀兒失と云ふ。鐵門關は、喀施の南、五十五英里にあり。唐西域記、颯秣建國の條に曰く、從此西南行二百餘里、入山路、崎嶇、窳徑、危險、既絕、人里、又少水草、東南山行三百餘里、入鐵門。鐵門者、左右帶山、山極峭峻、雖有狹徑、加之險阻、兩傍石壁、其色如鐵。既設門扉、又以鐵鋼、多有鐵鈴、懸諸戶扇、因其險固、遂以爲名。出鐵門、至觀貨邏國、新唐書史國の條に有鐵門山、左右巉峭、石色如鐵、爲關、以限二國、以金鋼闔と云へるは、西域記の文を約めたるなり。阿喇必亞の地理家、牙庫必唐の末の人、は鐵門を珀兒沙語にて、峇哩阿漢と云ひ、城市の名とせり。亦奔好喀勒の納黑沙トより帖兒蔑、惕に至る紀行の中にも、鐵門あり。額篤哩昔、南宋の初の人、は鐵門に一小邑ありと云へり。西游記に、壬午の年、長春は、撒馬兒罕より三月十有五日、啓行、四日、即十八日、過碣石城、云云。過鐵門、東南度山、山勢高大、亂石縱橫、眾軍挽車、兩日、即二十日、方至前山、沿流南行。五日、即二十五日、至小河、亦船渡。七日、即二十七日、舟濟大河、即阿母沒輦也。二三九年、明の洪武三十一年、の春、駙馬帖木兒、印度より師を班せる行程を舍哩甫額丁の敘べたるに、據れば、帖木兒は、阿木河を渡りて、帖兒蔑惕に二日、駐まり、三日、行きて、科魯噶、即鐵門を過ぎ、巴哩克河の邊に宿り、又五日、行きて、喀施に入りたり。速勒壇、巴別兒も、鐵門を科魯噶と云へり。歐囉巴人にて鐵門の事を記せるは、克刺腓卓より始め、一四〇四年、明の永樂二年、克刺腓卓は、喀思提勒の王、顯哩第三の命を奉じて、帖木兒の朝に使せり。西曆八月二十二日、帖兒蔑惕を發し、二十四日、河の岸に近き野に宿り、二十五日、高山の下に至れり。その山に鐵門と云ふ、峽路あり。路傍の石壁は、人工にて削りたるが如く見え、山は、兩方ともに甚高く、路は平にして、甚深し。峽路の半に村あり、村の後の山甚高し。鐵門の外に通路なき故に、帖木兒伯克は、こゝにて關稅を多く收め得るなり。來る商人は、皆こゝを通る故に、帖木兒伯克は、こゝにて關稅を多く收め得るなり。土人曰く、昔はこの峽路、大城に鐵もて裏めり。明史西域傳に、渴石、西南の誤、三百里、大行き、二十八日に、喀施の峽路に達して、裏めり。明史西域傳に、渴石、西南の誤、三百里、大

納黑舍ト

玄井の鐵門の記

舍哩弗丁の紀行

克刺腓卓の紀行

門なき鐵門

馬也甫の記

牙佛兒思奇の紀行

拖雷の凱旋

山屹立、中有石峽。行二三里出峽口、有石門、色如鐵、番人號爲鐵門關。蓋元明以來鐵門は峽路の名となり、眞の關門なくなれるなり。克刺腓卓の後、四百七十一年の西、歐羅巴人の地に入らざりしが、一八七五年、清の光緒元年、我が明治八年、噶兒失より拜孫に赴ける時、察克河の廣き溪を過ぎたれば、名高き鐵門の峽は目の前に現れたり。土人は今不自果刺合納(山羊の舎)と呼ぶ。峽の北の口に近き所にて、沙勒撒卜思喀施より、路と喀兒失よりの路と合ふ。一八七八年(明治十一年)噶兒西の將軍思脫列甫は、阿富噶尼思壇の額米兒に使する路に鐵門を過ぎ、隨行せたる軍醫、牙佛兒思奇は、その富阿噶尼思壇、李合喇紀行に、峽路の事を委しく述べたり。噶西亞の突兒其思壇、大圖に據れば、峽路の長は一半英里にして、西北より東南に向ひ、分水嶺を横斷せり。畫の如き懸崖は、路を挟み、峽の廣三十歩、或る處にては、たゞ五歩なり。察克河は西北に流れ、北の口を出でて北に曲る。南の口の外に、搠喇卜小河あり、そこに路分れ、本道は東に曲り、口より五英里ばかり離れたる所に、迭兒邊篤あり、それより拜孫希撒兒に至る。險しき細路は、南の方、阿木河に失喇巴)拖雷の處に使を遣りぬ。(この事も、前の事と續かず。速勒壇の避暑處に避暑したるは、拖雷も一處にて、十五年庚辰の夏なり。拖雷を召し歸し)「年熱くなりぬ。別の軍ごもは、下馬するぞ。汝は我等の處に會せよ。」と宣ひて遣りたれば、拖雷は、亦噶亦薛不兒等の城ごもを取りて、

親征錄喇失揚多遜三書の異同

昔思田の城を破りて、出黑扯噠の城を破り居る時、使はこの言を致したれば、拖雷は、出黑扯噠の城を破るこ、回り下馬して來て、成吉思合罕に會しぬ。(親征錄に曰く「上進兵過鐵門、遣四太子、城又破班勒紇城、圍守塔里寒寨。冬、四太子又克馬魯察葉可馬盧昔刺思等城、復進兵。壬午春、又克徒思、懸察兀兒等城。上以暑氣方隆、遣使招四太子速還。因經木刺夷國、大掠之。渡搠蘭河、克野里等城。上方攻塔里寒寨、朝觀畢、并兵攻之。喇失揚曰く「蛇の年の秋、成吉思汗は、帖木兒合魯噶を過ぎ、拖雷罕を闊喇散を平げに遣り、自ら帖兒篋似を攻め破り、撒曼に至り、軍を分け遣りて、巴荅黑商を收め、只渾河を渡り、翌年の春、巴勒黑を屠り、塔列干の寨を取り、又奴思喇惕庫を攻めたれども、七月の間下らず。拖雷罕は、篋噶察克の路を経て、篋噶を取り、你沙不兒に至り、薛喇黑思捏撒秃思札只喇等を取り、你沙不兒を取れり。成吉思汗は、塔列干より拖雷罕に大暑の前に回れと云ひ遣りぬ。拖雷罕は、庫希思壇より、庫姆者、闊河を過ぎ、赫喇惕を取りて、回りと成吉思汗に見え、兵を合せて、塔列干の堅き寨を攻め下し、この夏、全軍塔列干に駐まれり。多遜曰く「一二二〇年の秋、成吉思汗は、帖兒篋噶を攻め破り、薛曼に至り、軍を分け遣りて、巴荅黑商を收め、拖雷を闊喇散を平げに遣り、一二二一年の春、只渾河を渡り、巴勒黑を屠り、塔列干の山地に入り、奴思喇惕庫の寨を攻む。この寨は、先に將を遣り攻めさせたれども、六月の閒下らざりしが、大軍至りて攻め破れたり。その夏は、塔列干に避暑せり。拖雷は、脱噶察兒を前鋒として、闊喇散に攻め破れたり。脱噶察兒は、捏撒を屠り、一二二〇年の十一

帖兒篋惕

月、你沙不兒を攻めて戦死せり。一二二一年の二月、拖雷は、安篤恢を下し、馬嚕沙
 希展を屠り、薛兒主克の速勒壇散札兒の墓を發き、你沙不兒を砲撃して、その民
 を屠り、別軍を遣り、禿思に近き合里發哈諭阿勒喇失惕の墓を毀り、拖雷は、庫希
 思壇を荒し、赫喇惕を破り、塔列干に往き、父に會せり。録の迭兒密は、喇失惕の帖
 兒篋似、多遜の帖兒篋惕にして、漢書西域傳の都密、唐西域記新唐書西域傳の咀
 蜜なり。元史地理志に忒耳迷、薛塔刺海の傳に帖里麻、通鑑綱目に帖力迷とあり。
 帖兒篋惕の名は、費兒都昔の詩史に見え、亦思塔黑哩は、李合喇撒馬兒罕より、鐵
 門を経、巴勒黑に往く路にありと云へり。駙馬帖木兒は、撒馬兒罕より、巴勒黑に
 往く時、常に帖兒篋似に移れり。嚕西亞の地圖に、帖兒篋似の遺址は、阿木河の北岸にて
 は、それより西に移れり。嚕西亞の地圖に、帖兒篋似の遺址は、阿木河の北岸にて
 速兒合、ト河の巴勒黑にして、西游記に班里、西游錄に班城、元史地理志に巴里黑、
 勒紇は、西史の巴勒黑にして、西游記に班里、西游錄に班城、元史地理志に巴里黑、
 察罕の傳に、板勒紇、明史西域傳に把力黑とあり。速不台の傳に、必里罕、曷思麥
 里の傳に、阿刺黑も、巴勒黑の訛なるべし。この地は、いと古き名城にして、希臘
 の史家に據れば、古は、巴克惕喇と名づけ、その州を、巴克惕哩、牙納と云へり。漢書
 の撲挑、後漢書の濮達、魏書の薄羅提は、皆、巴克惕喇の訛略、周書の拔底延、新唐
 書の縛底野は、皆、巴克惕哩、牙納の訛略なり。唐西域記に、縛喝國、北臨縛芻河、國大
 都城、周二十餘里、人皆謂之、小王舍城也とあり。縛喝は、即、巴勒黑にして、巴勒黑の
 名の物に見えたる始なり。巴勒黑の落城は、喇失惕も、多遜も、河閒征服の年の翌
 年とすれども、下文に、塔列干を落すに、六七月かゝれりとあるに、據れば、阿木河
 を渡り、巴勒黑を取るは、その年、辛巳は、庚辰の誤の秋の内、親征録に、破班勒紇城、圍
 守塔里寒寨を、河閒征服の年、辛巳は、庚辰の誤の秋の内、親征録に、破班勒紇城、圍

巴勒黑

塔列干

なるを、喇失惕は、偶誤りて、翌春に移せり。察罕の傳に、察罕、西域板勒紇人也。父伯
 德那、歲庚辰、國兵下西域、擧族來歸とあるも、庚辰の年、巴勒黑落ちたる時、擧族歸
 附したるなり。録の塔里寒は、西史の塔列干にして、巴勒黑の東に當れる、坤都似
 の東邊にあり。古は、泰干とも呼び、亦思塔黑哩の地理書に、巴勒黑の東、巴荅黑商
 に近く、脱合哩思壇の都、泰干ありと云へり。中世の阿喇必亞地理家は、巴勒黑の
 西、巴勒黑と篋嚕阿勒嚕篤篋嚕察克との間に、塔里干ありて、篋嚕阿勒嚕篤に
 屬せりと云ひ、脱合哩思壇にあるを、ば塔健元史地理志、經世大典の圖にある、塔
 とも、に、塔里干と云へり。唐西域記の咀刺健元史地理志、經世大典の圖にある、塔
 里干は、西にあるものなり。東にある塔里干は、地理志にも見えざれども、馬兒科
 保羅は、巴勒黑より、東に十二日行きたる時、泰干と云ふ寨に至れりと云へるは、
 この寨なり。一八三八年、天保九年、烏篤そこの寨の外に、堅き寨ありしが、如くなれ
 喇失惕、別咧津の譯せるに、據れば、塔列干の寨の外に、堅き寨ありしが、如くなれ
 ども、多遜に據れば、奴思喇惕庫は、即、塔列干の寨なり。録に、只塔里寒寨とあれば、
 恐らくは、別咧津の誤れるならん。録の馬魯察葉可は、喇失惕の篋嚕察克にして、
 古くは、篋嚕阿勒嚕篤と云へり。阿喇必亞の地理家に據れば、馬嚕嚕又は、篋嚕と云
 ふ所、二所あり。大なるを、篋嚕沙希展と云ひ、その屬邑を、篋嚕阿勒嚕篤と云ひ、共
 に、篋嚕嚕篤、木兒嚕、ト河の濱に在り。今も、篋嚕察克と云ひて、篋兒甫の東南百
 十英里、嚕西亞、阿富汗の界に近き所に在り。録の馬盧は、西史の篋嚕、即、馬嚕沙希
 展にして、今の篋兒甫なり。篋嚕は、古き名城にして、漢書西域傳に、安息、東界、木鹿
 城、號爲、小安息とあり。中世は、闊喇散四大城の一となれり。新唐書大食の傳に、呼
 羅珊、木鹿とあるは、闊喇散の篋嚕なり。録の昔刺思は、西史の薛喇黑思又は、撒喇
 黑思にして、元史地理志に、撒刺哈西とあり。遺址は、篋兒甫の西南、赫哩嚕篤、河の

篋嚕察克

篋嚕

撒喇黑思

東岸に在り、嚙西亞に屬せり。西岸に新撒喇黑思と云ふ堡あり、珀兒沙に屬せり。西史の捏撒は、薛喇黑思の西北、秃思の東北に在り。錄の徒思は、西史の秃思にして、元史地理志に途思とあり。秃思は、名高き古城にして、名君哈諭阿勒喇失惕は、こゝに崩じ、詩人費兒都昔星學の大家納思喇丁は、こゝの人なりき。遺址は、篋舎の西北十七英里にあり。錄の泥沙兀兒、匿察兀兒は、西史の昔思壇又薛亦思壇なり。然れども昔思壇に入りたるは、拖雷の兄幹歌歹明年壬午の事なれば、この昔思壇は、庫希思壇の誤なるべし。錄の木刺夷は、元史太祖紀は同じく、太宗紀に木羅夷、憲宗紀に沒里奚、郭侃の傳に木乃兮、常德の西使記に木乃奚とあり。正しくは、木刺希蒼にして、國の名に非ず。抹哈篋、惕教徒の一派より成れる部落の名なり。亦思馬額勒を祖とするが故に、亦思馬額勒宗徒とも云ふ。元史譯文證補に、木刺夷補傳ありて、その興亡を委しく述べたり。裏海の南なる額勒不兒思連山の城寨に據り、その領土は、庫希思壇の地に及べり。故に拖雷の庫希思壇を荒せることを、錄に木刺夷を掠むと云へり。出黑扯噠の城は、喇失惕の札只囉なり。錄の擲擲蘭河は、舍哩弗丁の、咱弗兒納篋に見えたるものなるべし。咱弗兒納篋に據れば、この河は、你沙不兒より安篤恢に往く路にて、木兒噶卜河の西にあり。然らば、赫哩嚙篤河の異名なるべし。喇失惕の庫姆者囉河も、赫哩嚙篤河の外にはあるまじ名のわけは知らず。錄の也里野里は、秘史の亦嚙、西史の赫喇惕前の注に見えたり。

拙赤察阿歹幹歌歹三人の子たちは、幹嚙格赤の城を降し

て、三人にて城の民を分け合ひて、成吉思合罕に分前を出さざりき。(喇失惕曰く、幹歌台は、軍を統ぶることを命ぜられ、二人の兄に和解ありて、太祖に民を分たすとはなし。)この三人の子たちは、下馬して來ぬれば、成吉思合罕は、拙赤察阿歹幹歌歹三人の子たちを答めて三日見えさせざりき。(親征錄に「三太子克玉龍傑赤城、大太子歸朝觀と云ひ、喇失惕も、察合台幹歌台は、關喇自姆より來て、成吉思汗に見え、拙赤は、關喇自姆より行李を挈へて去れり」と云ひて、拙赤の去れる所明ならざるを、多遜は、昔渾河の北なる地方に残れりと云へり。然れども、拙赤いかに狼戾なりとも、軍に擁して外に駐まり、太祖に會せざることは、事情に於てあるべからざることなれば、原本秘史の非に難し。)そこに孛斡兒出木合黎失吉忽都忽(この三人の内、失吉忽秃忽の軍中に居りしことは、論なし。孛斡兒出は、外に見えざれども、西游記に、壬午の三月十五日、長春邪米思干を出立ちて、十八日碣石城を過ぎたる時、預傳聖旨、令萬戶播魯只、領蒙古回紇軍一千護送、過鐵門とあり。播魯只は、即孛斡兒出なり。只木合里は、太祖十二年八月、太行以南、略の命を蒙りてより、十三年には河東に入り、十四年三月薨じて、西征の師には

従はざれば、こゝに木合里（三人奏さく）服はざりし撒兒塔兀勒の
 民の莎勒壇を平けて、彼が城（ごもの民を取れり）我等分けて
 取らるゝ、斡囉格赤の城も、分け合ひて取る子だちも、都て成
 吉思合罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀
 勒の民をかく平けたる時、我等爾のあまたの男驢馬歡びて
 馬孩（動詞なれども）てあり。合罕は、何ぞかく怒りて在せる子だ
 ちは、過を悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。然らずば、子だちは、
 性行を怠らん。恩賜せば見えさせば可からん。と奏したれば、
 成吉思合罕怒息みて、拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを見
 えさせて聲を出し、翁等の辭を引きて、舊き辭を尋ねて、立ち
 たる地に仆るゝまで、額の汗を拭ひ敢へぬまで陳べて、譴責
阿兒臣

により教訓により諭して在せる時、晃孩豁兒赤、晃塔合兒豁
 兒赤、撈兒馬罕豁兒赤、この三人の箭筒士は、成吉思合罕に奏
 さく、雛なる鷹の調習にやつこ入りたる如く、子だちはやつ
 ごとく征伐を學び居る時、子だちを退くるが如く、いかんぞ
 かく叱りませる。子だちは懼れて心を落さん。日の没る處よ
 り出づる處に至るまで敵の民あり。我等を脱孛都惕の狗ご
 もを嗾けて遣らば、敵の民を、我等は皇天后土に力を添へら
 れて、金銀段物財民住具を爾に持ち來ん。（脱孛都惕は、脱孛惕の複
 あり。脱孛惕は、唐書の吐蕃今の圖伯特即西藏の民なり。吐蕃は、蓋孛孛篤篤は惕
 の濁音を音譯せるなり。宋遼金の諸史皆吐蕃又は土蕃の字を用ふれども、遼
 の興宗重熙十七年鐵不得國遣使來乞以本部軍助攻夏國、不許と云へること、遼
 史本紀兵衛志屬國表の三所に見えたり。この鐵不得は、即孛孛篤篤の轉なり。又道
 宗紀に見えたる陳王塗孛特遊幸表に見えたる圖不得泉を、殿本は皆圖伯特と
 改めたり。國の名を取りて人の名泉の名としたるにやあらん。經世大典の圖に

巴固答篤の合里發

は土伯特とあり、全く今の音に同じ。嚕朮馬兒科保羅は、帖別惕と云ひ、喇失惕は、禿朮別惕と云へり。亦奔忽兒答惕必馬速的を始として阿喇必亞の地理家は、大抵梯別惕と云ひし故に、今もその名にて世に聞ゆ。されどもその國人は、禿孛篤の名を忘れて、今は自ら孛篤の國と云ふ。脱孛都惕の狗は、蒙古人の雄雄しく猛きに譬へたるなり。禿別惕の國に驢馬ほど大なる猛き狗ありて、野牛を捕へ、豹と鬪ふことは、大佐裕勒の馬兒科保羅紀行の第四十六章とその證注とに見ゆ。その民云へば、この西に巴黑塔惕の民の合里伯莎勒壇と云へるありと云へり。巴黑塔惕は、巴固答篤の訛にして、抹哈篋惕教志に白達、元史憲宗紀に八哈塔、地理志に八吉打とあり。郭侃の傳常徳の西使記に報達とあるは、馬兒科保羅の巴兀答思と呼べるに音近し。合里伯は、合里發の訛にして、西使記に合里發とあり。合里發は、英吉利思語に喀里甫と云ふ。莎勒壇は、即速勒壇にて、合里發の冊封を受けたる諸侯王の號なれば、合里發の下に附けたるは、誤れり。然れどもこの誤りは、祕史のみならず、元史郭侃の傳にも合里法箒灘とあり。蒙古人は、速勒壇の號を西域の君長誰にも附くものと思へり。と見えて、郭侃の傳に、木乃分(木刺希答)の將忽都答而兀朱箒灘、乞都卜(吉兒篤庫)の兀魯兀乃箒灘(囉克捏丁)兀里兒の海牙箒灘、阿刺汀(阿刺額丁)の領地の禡撈答而箒灘、乞石迷喀什米兒の忽里箒灘、天房(阿喇必亞)の巴兒箒灘(額只魄惕)の將別伊巴兒か、密昔兒(米思兒)即額只魄惕の可乃箒灘(可刀)の誤か、速

速勒壇の號の濫用

搠兒馬罕の出征

勒壇(屈突思、富浪、富囉克)の兀都箒灘、石羅子(發兒思)の都失喇思の換斯干(阿答畢)の西使記、禡思、阿塔卑、阿塔卑は、發兒思の君の尊、賓鐵(國の名)に非ず、印度の産物の加葉箒灘、兀林の阿必丁箒灘、乞里彎(彎は、蠻の誤、客兒曼)の忽都馬丁(それ箒灘)科惕別丁などあり。巴固答篤の興亡の事は、洪鈞の報達補傳に見ゆ。それらの處に我等出征せん。と奏しければ、合罕悟りて、この言に怒息みて、成吉思合罕は可しとして勅あり、晃孩、晃塔合兒、搠兒馬罕三人の箭筒士を恩賞して、阿答兒斤の晃孩、朶龍吉兒の晃塔合兒二人を我が前に居れ。とて留めて、幹帖格歹の搠兒馬罕を巴黑塔惕の民の處に合里伯莎勒壇の處に出征せしめたり。朶龍吉兒の姓、始めてこゝに見ゆ。親征錄元史十三翼の戦の後に、朶龍吉部來降の事あり。即朶龍吉兒なり。喇失惕は、者刺亦兒の分部。朶龍吉と云ひて、者刺亦兒十部の一とし、録の朶龍吉札刺兒部もその意なるを、元史に若朶龍吉、若札刺兒と二部に分けたるは、非なり。幹帖格歹の姓は、外に見えず。輟耕錄蒙古七十二種の中に合忒乞歹とあるは、やゝ似たり。搠兒馬罕は、次の卷に綽兒馬罕とあり。多遜は、察兒抹昆と云ふ。親征錄元史本紀には、この人見えず。れども、曷思麥里の傳に西域の大帥察罕とあるは、列傳第七なる唐兀惕の察罕に非ずして、察兒馬罕の中略なり。又續通鑑綱目宋の理宗寶祐六年(憲宗

八年の條に「初蒙古遣宗王旭烈伐西域至是以抄馬那顏郭侃總諸軍前後平西域乞石迷十餘國轉鬪萬里」とある抄馬那顏をト喇惕施乃迭兒は察兒抹昆なりと云ひたれども察兒抹昆は旭烈兀西征の前太宗十三年に死したれば旭烈兀の下に働くべき由なし續綱目は何に據れりやと郭侃の傳を見れば壬子送兵仗至和林改抄馬那顏從宗王旭烈兀西征とありこの抄馬は人の名に非ず侃の祖父郭寶玉の傳に寶玉はもと金の將にて野狐嶺の大敗の時軍を率ゐるて蒙古に降りて授抄馬都鎮撫太祖八年復帥抄馬從錦州出燕祝の父郭德海の傳に大軍至乃出降爲抄馬彈壓從先鋒柘柏西征などありて抄馬は降附の軍の名抄馬都鎮撫抄馬彈壓抄馬那顏即抄馬の長官となり郭侃は初百戸となり次に進み今改められたり抄馬那顏即抄馬の長官となり郭侃は初百戸となり次に進み太祖の時に多遜に據れば察兒抹昆の西征は太宗二年の事なれども、丹を焚き阿在兒拜展の潰兵に聚れる喇亦の城を破り、撒哇庫姆喀山を荒し、西は哈馬の名なし、祕史なる會長に命じて縛り送らしめて、東に返れりと云ひて、その將

朶兒伯朶黑申の出征

又欣都思の民巴黑塔惕の民二つの閒なる阿嚕馬嚕馬答撒里の民の阿卜禿の城に朶兒別惕の朶兒伯朶黑申を出せしめたり。(欣都思は欣都の蒙語複稱なり古名は信度と云ひ、信度河より出でたり後轉じて欣都となり又轉じて印度となれり史記漢

印度の名稱

山海經には天毒漢書には天篤ともあり後漢書以後は天竺の字多く用ひられたり竺も古音は篤なり珀兒沙人の欣都思壇と云ふは欣都の國と云ふことなり歐囉巴人の因的亞と云ふは印度の喇甸語なり親征録には忻都元史憲宗紀には身毒とも欣都思ともあり阿嚕は前文の亦嚕にして今の赫喇惕は、中世赫哩とも哈哩とも云ひ赫哩は額哩とも亦嚕とも訛りたれば阿嚕は哈哩の訛れるなるべし馬嚕は、篋嚕沙希展、今の篋兒甫なり馬答撒哩阿卜禿は考へ得ず地は三つにして城一つなるも異むべし朶兒伯朶黑申は禿馬惕を平げたる人にて、卷十に見えたりこの西征の役には親征録にその名見えざれども、集史には朶兒伯とありて、巴刺那顏と同じく者刺列丁を追ひに印度に入りたりとなせり又多遜曰く者刺列丁の敗れたる後亦勒赤喀歹は命を受けて叛きたる赫喇惕を討じ六月圍みて一二二二年太祖十七年六月始めて攻め落してその眾を屠りこの外に篋嚕も再侵掠せられたりと云へり本書に依れば朶兒伯は、印度に入りたるに非ずして赫喇惕篋嚕を攻めたるは即朶兒伯なるに似たり

又速別額台巴阿禿兒を北なる康鄰(康鄰は漢代の康居の遺種にして、抹哈篋惕教徒の記

康鄰即ち康克里

録には、康略里又は康克里と呼び第十三世紀の初には、牙亦克兀喇勒河の東、關喇自姆の湖(鹹海)の北なる廣き荒野に住めりと云ひ阿不勒嚕資に據れば、成吉思汗の即位の頃、康克里の領地は、逸昔郭勒の湖、楚河、塔刺施(塔喇思)河まで東に及べり第十三世紀の中ごろに、歐囉巴の高僧二人、その地を過ぎて、紀行に載せ、その民の名を普刺諾略兒闌尼は、康吉台と云ひ嚕下嚕克は、康勒と云へり嚕西亞の史に、珀徹捏固と云へるは、即康克里なりと信ぜらる元史には、康里と云ふ

乞卜察兀惕即ち
乞魄察克

康里の名は、已に金史に見え、忠義傳粘割韓奴の條に、大定年中康里の部長孛古内附の事あり。康克里人は武勇勝れし故に蒙古に事へて名臣となれる人甚多く、元史に專傳あり。乞卜察兀惕(乞卜察兀惕は、乞卜察克の複稱にして、卷八の者十三人あり。)乞卜察兀惕(乞卜察兀惕は、乞卜察克の複稱にして、卷八)黒海高喀速山裏海の北、今の嚕西亞の南部なる荒野に住める部族にして、抹哈篋惕教徒の史家地理家は、乞魄察克又は迭施惕乞魄察克と云へり。迭施惕も乞魄察克も、荒野の義なりと云ふ。額篤哩昔は、第十二世紀の中ごろ、南宋の初に、突兒克諸部を數へ擧げて、その一を乞甫察克と云へり。西游錄に、印度西北有可弗又國、數千里皆平川、無復丘垤、不立城邑。民多羊馬、以蜜爲釀と云へるも、この國を云へるなるべし。嚕西亞人は、玻羅物次と云ひ、第十一世紀の半、北宋の中頃よりその記録に見ゆ。嚕西亞の史家は、玻羅物次を平野の義と解せり。他の歐羅巴人は、庫曼又は科曼と云へり。ト咧惕施乃迭兒曰く、この名は、喀思關の海に流れ入る庫馬河より出たりと見ゆ。普刺諾喀兒關尼嚕克ト嚕克小兒篋尼亞の海圍馬兒科保羅みな科曼と呼び、その國を科馬尼亞と云へり。欽察の人にて元史列傳に列したる者は、名將士士哈(巴只吉惕)巴只吉惕(巴只吉惕は、巴施客兒篤の訛にして、下專傳七人附傳三人あり。)巴只吉惕(巴只吉惕は、巴施客兒篤の訛にして、)乞みたる部族なり。今も巴施乞兒と云ひ、その地方に猶住めり。ト咧惕施乃迭兒は、乞卜察兀惕巴只吉惕を乞卜察兀巴只吉と讀みて、兀巴只は、高喀速の西部黒海の東濱に今も住める幹別資阿巴資又は阿ト合資ならんと云へり。蓋祕史の帕刺的兀思本には、乞卜察兀巴只吉の下なる細字旁書の惕の字脱ちたる故に、ト咧惕施乃迭兒は、乞卜察兀の字なしとすれば、幹別資には似せずして、巴施客兒篤に

巴只吉惕即ち巴
施客兒篤

幹嚕速惕即ち嚕
西亞

近し。巴施客兒篤は、又巴施庫兒篤とも云ふ。九二一年、梁帝友貞龍徳元年、合里發木克帖兒の命を奉じて、佛勒噶河の畔に居る不勒噶兒を教化せんが爲に派出したる亦奔拂自關の紀行に、巴施庫兒篤の名始めて見えたり。中世歐羅巴西亞細亞の史家は、みな巴施客兒篤は、突兒克種の分部にして、歐羅巴の洪噶兒人は、それより出でたりと云へり。普刺諾喀兒關尼(巴)幹魯速惕(幹魯速惕は、思喀兒惕と云ひ、嚕ト嚕克は、帕思喀提兒と云へり。)幹魯速惕(幹魯速惕は、)兀嚕思又は幹嚕思の複稱にして、我等の嚕西亞なり。蒙古人は、嚕囉を正しく呼びて、魯羅と混るゝこと無ければ、幹魯速惕の魯は、もと嚕とありたるを筆寫の際に誤れるならん。又蒙古語は、我が國の古語の如く、Rの音にて始まる詞なきが故に、嚕囉の上に母音一つを加へて呼びたるなり。嚕思の名は、柳哩克の創業の時、八六二年、唐の懿宗咸通三年より始まりと見えて、東嚕馬の記録に、八六七年、咸通八年、皇帝米海勒第三の時、嚕思と云へる異教の民、船二百艘にて、京城を侵せることあり。その後教主拂丑思は、傳道師を嚕思の國に送れり。抹哈篋惕教徒にて始めて嚕思の名を書きたるは、八九〇年、唐の昭宗大順元年、ごろに地理書を著したる牙庫必なり。九二一年、不勒噶兒の國に派遣せられたる亦奔拂自關は、屢嚕思の民に遇ひ、その民に關する珍しき記事を遺せり。第十世紀より第十四世紀までの間、阿喇必亞兒沙の史家は、皆嚕思の事を云へり。元史憲宗紀、睿宗の傳、曷思麥里(阿喇必亞兒沙)成宗紀、一に、兀魯思、速不台の傳には、幹羅思とも兀魯思とも、地理志には、阿羅思とあり。清人の書には、鄂羅斯、厄羅斯、兀魯思など書きしが、今は、俄羅斯と書くことに定めり。いづれも、蒙古語の幹羅思、兀魯思を音譯したるなり。康熙乾隆時代の書に、羅刹(馬札喇)馬札喇(馬札喇は、馬札喇即ち洪噶哩亞)とあるは、佛書の羅刹に引附けたる惡口なり。馬札喇(馬札喇は、馬札喇即ち洪噶哩亞)

馬札喇即ち洪噶
哩亞

哩亞なり。洪噶兒人はもと巴施客兒篤より出でたりと一般に信ぜられたる故に、主吠尼喇失惕等の史家は、洪噶兒人をも巴施客兒篤と呼べり。阿不勒弗苔の故引きたる亦奔賽篤第十三世紀の人は、珀徹捏固の北に住める異教の民として巴施客兒篤を記したる後に都納河(荅紐河)の畔阿列曼也(獨逸人)の近處に住み亦思藍教に従へる突兒克種(巴施客兒篤)の同族にして阿列曼也より基督教を受けたりと云へり。普刺諾喀兒(大洪噶兒)は、今如く洪噶兒の名を用ひ、かつ大不勒噶哩亞に近き巴思喀兒惕(大洪噶兒)は、今如く洪噶兒の名を用ひ、かつ大不勒噶哩亞に不勒噶兒の東北兀喇勒山に近く兀固喇又呼べり。噶西亞の史に據れば、佛勒噶住めり。一四九九年(明の弘治十二年)噶西亞の大克喇姆鄰宮の門にその時に關打破りて、兀固喇の君の稱を兼ねたり。抹思科の克喇姆鄰宮の門にその時に關せる喇甸文の銘ありて、この君を翁噶哩大公と稱せり。然らば兀固喇は、喇甸語にて翁噶哩と云ひ、洪噶兒の名は、それより出でたるなり。洪噶兒人は、第九世紀に歐囉巴に入り、自らは馬札兒と稱したれども、噶西亞の史家は、思脫兒は、兀固哩と名づけ、艾約瑟の職方外紀には、翁牙里とありて、舊土の同族と名同じ。阿不勒弗苔は、馬只噶兒と云ひたれども、それは亞細亞の巴施乞兒を指せるなり。馬札兒の名は、喇失惕の史にも見え、元史速不台の傳には、馬札兒とも馬茶ともあり。

阿速惕 (阿速惕) は阿速と云ひ、その複稱なり。阿速の名は、元史に屢見え、西史には阿蘭又あるは、二名併せ擧げたるなり。阿蘭は、古くより高略速山の北の麓に住みたる部族にして、西紀の初頃より希臘馬の書に見え、その後には東囉馬阿喇必亞

阿速惕即ち阿蘭

奄蔡即ち闐蘇

の書に見えたり。噶西亞の史には、阿蘭を牙失と云へり。九三六年(晉の高祖天福元年)思威阿脫思刺甫は、董河の畔にある合咱兒の屬城を取り、遂に牙失略鎖吉と戦ひたりと云へり。第十三世紀の噶西亞の史家は、牙昔を帖喇古河の後(南)高略速山に近く住める民なりと記せり。蒙古の西征を述べたる抹哈篋惕教徒の史家は、この民を阿蘭又は阿昔と呼べり。普刺諾喀兒(關尼)は、阿刺尼また阿昔と云ひ、噶ト噶克は、阿刺尼また阿思と云ひ、基督教徒なりと云へり。阿不勒弗苔の引ける亦奔賽篤は、阿蘭と阿思とを二種に分けたれども、阿思は、阿蘭の隣に住み、同じく突兒克種に屬し、同じく基督教を奉じたりと云へり。高略速山に今も居る幹思薛提人は、阿昔の苗裔又は同族なり。史記大宛の傳に、奄蔡、在康居西北、可二千里。行國與康居大同俗。控弦者十餘萬。臨大澤無崖。蓋乃北海云。漢書西域傳も同じ。漢書陳湯の傳に、鄯支單于遣使責闐蘇大宛諸國歲遺とあるに、顏師古注して、胡廣曰、康居北可一千里、有國名奄蔡、一名闐蘇、然即闐蘇、即奄蔡也と云ひ、史記正義にも、漢書解詁を引きて、奄蔡、即闐蘇也と云へり。奄蔡の音は、噶西亞の舊史なる牙失に近く、闐蘇は、即阿速にして、位置名稱ほゞ合へり。謂はゆる大澤は、裏海なるべきを、北海に當てたるは、張騫の想像の誤ならん。又三國志東夷傳の注に、魚豢の魏略の西戎傳を引きて、又有柳國、又有巖國、又有奄蔡國、一名阿蘭、皆與康居同俗云。故時羈屬康居、今不屬也と云へるは、阿蘭の名を正しく著せせり。後漢書西域傳に、奄蔡國、改名阿蘭聊國と云へるは、魚豢の魏略に據りて、阿蘭國と柳國とを誤りて一國に合せたるなり。然らばこの部族は、希臘囉馬の人に早く知られたるのみならず、支那人にも早く聞えたるなり。阿速人は、蒙古に征服せられたる後、蒙古の朝に仕へて名將となれり。撒速惕(撒速惕)の單稱は、撒速

新 撒速惕即ち撒克

薛兒客速惕即ち
徹兒客思

客失米兒即ち喀
施米兒

屬賓の誤認

撒克新とあり。撒克新は、亦提勒佛勒噶河の下流にありし城の名にて、その民を
もしか呼べり。抹哈篋惕教徒の書には、既に第十二世紀にその名見え、主吠尼は、
撒喀新と云へり。普刺諾喀兒關（薛兒客速惕）阿蘭の南高喀速山の東に居た
尼の撒克昔も、それなるべし。
は徹兒喀失、阿不勒弗苔は者兒客思、普刺諾喀兒關尼は客兒乞思又は乞兒喀昔、
嚕下嚕克は徹兒乞思、喇失惕は徹兒客思、元史地理志には撒耳柯思とあり。嚕西
亞の史に、蒙古人の高喀速山を踰えたる時、征服せる部族の中に喀思撒黑なりき。今も幹思
あるにつきて、克刺普囉惕は徹兒客思の古名は、喀思撒黑なりき。今も幹思撒惕
人明喇勒人は、徹兒客思を（客失米兒）客失米兒は、漢書以下歴代の史と高僧
喀思撒黑と呼ぶと云へり。
の喀施米兒にして、唐西域記に、迦溼彌邏、舊曰屬賓訛也と云へり。後漢の初に健
馱邏の迦賦色迦王、五百の阿羅漢を集めて三藏を結集したる所は、即ちこの國な
り。哩惕帖兒は、屬賓を希臘史家の科弗捏即今の喀不勒に當て、喇穆咱は堪苔哈
兒に當てたるは、いづれも隋書西域傳に、漕國、在蔥嶺之北、南の誤、漢時屬賓國也、
新唐書西域傳に、屬賓、隋漕國也、居蔥嶺南とあるに、誤られたるなり。新唐書の屬
賓の傳は、全く舊唐書の屬賓の傳に據り、迦溼彌邏の事を述べたるに、隋漕國也
を加へたるは、蛇足なり。隋の煬帝の時、西域諸國を招きたれども、屬賓天竺は至
らざりし故に、隋書には屬賓天竺の傳なし。隋書の漕國は、唐西域記の漕矩吒國
にて、鶴悉那（即自納）を都とし、弗栗特薩儻那國（今の喀不勒）の南に在り、屬賓即
迦溼彌邏と異なり。隋書に、漢時屬賓國也と云へるは、唐の史臣の臆度の誤なり。
新唐書は、既に屬賓の傳に、隋漕國也と斷りながら、その下に更に漕國の傳あり
て、謝颺居吐火羅西南本曰漕矩吒或曰漕矩云云。東距屬賓云云。其王居鶴悉那城

李刺兒即ち李勒
噶兒

客喇勒即ち客刺
兒

と云ひ、又その次に更に屬賓の傳ありて、箇失蜜、或曰迦溼彌邏云云と云へり。新
唐書の疏謬複沓は、元史にも譲らず。元史憲宗紀に、怯失迷兒、經世大典の圖に乞
失迷耳、郭侃の傳、常德の西使記に、乞石迷、普刺諾喀兒關尼は喀思米（李刺兒）
兒馬兒科保羅は喀失木兒、喇失惕は今の如く喀施米兒と云へり。
李刺兒は、次の卷に不刺兒ともあり、元史地理志には不里阿耳とあり、即佛勒
噶河の東に居りし不勒噶兒又は李勒噶兒なり。大典の圖に、不思阿耳とある
は、里を思と書き誤れるなり。抹哈篋惕教徒の記者は、不刺兒とも李刺兒とも云
へるは、正に祕史に同じ。不勒噶兒は、早くより東西二部に分れ、東部は即佛勒噶
不勒噶兒にして、普刺諾喀兒關尼嚕克は、その國を大不勒噶兒と云へり。
こゝなる李刺兒は、この東不勒噶兒なり。西部は、東部より分れて、第五世紀の末
に、蒼紐ト河を渡りて、今の不勒噶兒なり。嚕塔關地圖には、蒼紐ト河の下流の南に不勒噶
蒼紐ト河の不勒噶兒とも云へり。嚕塔關地圖には、蒼紐ト河の下流の南に不勒噶
哩亞、その河の北に不兒噶哩亞、額勒佛勒噶河の東に、李兒噶兒と記せり。東不
勒噶兒の事を委しく述べたる舊記は、第十世紀の初に、その國に到れる亦奔拂
自闌なり。その地は、佛勒噶河の東岸と、喀馬河の濱とに廣がり、その都をも不勒
噶兒と云へり。蒙古に取られてより、不勒噶兒の國は亡びたれども、不勒噶兒城
は、商業學術の要地たることを失はずして、金幹兒朶の諸汗の宮所とさへなり
しが、第十五世紀の初に、その城廢れて、喀散城代り興れり。遺址は、佛勒噶河の東
四英里、喀散より八十三英里ほどなる喀散州思帕思克郡（ナレリ）喇喇勒（次の
りて、今兀思片思科頁また李勒噶兒思科頁と云ふ村となれり。
二たびこの十一部の名を擧げたる時、この喇喇勒の義なる乞喇兒に似たり。蓋
の喇は、客の誤なるべし。客喇勒は、洪噶兒語にて、王の義なる乞喇兒に似たり。蓋

亦的勒河即佛勒噶河

札牙黑河即ち兀喇勒河

乞瓦綿客兒綿即ち乞額甫大城

蒙古人は、誤解して國の名に取らるるならん。喇失惕は、客刺兒に作りて、巴施吉兒篤の王とし、又時としては、秘史の如く誤りて國の名ともせり。客喇勒は、王號を國の名としたりとすれば、前の馬札兒と重複せり。喇失惕も、この重複を犯して、屢客刺兒巴施庫兒惕を並べ擧げたり。然れども亦奔賽篤は、亦思藍教に従へる者を巴施庫兒惕の外に客喇勒客刺兒（即洪噶兒人）を擧げても、重複にあらざるや。）この十一部落なる外國の民の處に到るまで、亦的勒（亦的勒河）は、今の佛勒噶河なり。突兒克語に河を亦的勒又は阿帖勒と云ふ。突兒克人は、それを以て佛勒噶河に名づけて、東方の人皆その名を用ふ。思刺物人の佛勒噶と名づけたるは、その河の畔にありし孛勒噶兒城に本づけりと云ふ。西紀五六九年、周の武帝天和四年、東囉馬帝の命を受けて突兒克（西突厥）の汗に使したる在馬兒忽思は、その歸路に歹克兀喇勒河と阿提里亞河とを渡れり。第十世紀に、亦思塔黑哩は、阿帖勒河は合咱兒の國を通ると云ひ、亦奔忽兒答惕必は、阿帖勒城と云ひ、嚕卜嚕克は、額提里亞と云ひ、喀塔蘭地圖には、額的勒とあり、朔方備乗には、額集爾また額）札牙黑（札牙黑河は、今の兀喇勒河なり。突兒克語の原の名は、諾喀兒關尼は、牙額克。嚕卜嚕克は、牙噶克と云ひ、喀塔蘭地圖には、牙克大河とあり。）水ある河を渡り、乞瓦綿客兒綿の城の處に到るまで（乞瓦綿は、次の卷に蠻客兒綿とあり、嚕西亞の古き都なる乞額甫を云へるなり。綿客兒綿は、次の卷に蠻客兒蠻とあり、突兒克語に蠻は大客兒蠻は、城市にて、乞瓦綿客兒綿は、乞額甫大城なり。舍哩甫額丁の咱弗兒納篋に、一三九五年、帖木兒の嚕西亞を征することゝなり。乞額甫の所に、乞魄察克の君必恰囉克阿固連は、兀資河の畔なる蠻客兒綿の城に都せりとあり。兀資河は、阿不勒弗答の阿租河に同じく、今の篤聶珀兒河即尼珀兒河なり。嚕西亞の舊史には、蠻客兒蠻の阿名見えざれども、幹迭思撒の教授ト論は、一八七四年、乞額甫の第三考古會の記事に、乞額甫の古名を述べて、この古城は、中世蠻客兒蠻の名にて聞えたりと云へり。喇失惕は、一二四〇年、巴秃の南嚕西亞を征することゝ、民格兒堪は、多遜の音譯にて、別喇津は、蠻客兒蕃と音譯せり。こちたりと云へり。民格兒堪は、多遜の音譯にて、別喇津は、蠻客兒蕃と音譯せり。こ七五年、乞額甫にて、正しくは、蠻客兒蠻なるべし。吠捏失亞の公使寬塔哩尼は、一四

者別速別額台二將の遠征

喇失惕の史

へり。速別額台巴阿秃兒を出征せさせたり。この遠征の主將は、追撃を命ぜられたる時、往きたるなり。さきに撒馬兒罕にて速勒壇抹哈篋惕の額台二將は、闊喇散を経て、馬贊迭囉に入りき。喇失惕は、二將の急追速勒壇の窮死者刺列丁の南奔を殺べたる後、二將の遠征を殺べたり。その略に曰く、徹別速不台は、成吉思汗に使を遣り、速勒壇死し者刺列丁遁れたることを告げ、これより後は、さきに受けたる命令に遵ひ、乞魄察克の地を繞り、抹古里思壇に回らんと奏し、軍を進めて亦喇克に入り、喇亦庫姆哈馬丹篋展略、自微音諸城を取り、阿

多遜の史

在兒拜展に入り、帖卜哩自を降し、篋喇噶を破り、哈馬丹の叛民を討じて、回、阿兒蘭に入り、古兒只の兵を破り、失兒彎に入り、迭兒邊篤の關門を破り、阿關の地に入り、多遜に據れば、篋喇噶を破れるは、一二二二年、太祖十七年なり。迭兒邊篤は、高喀速山の東端に在りて、亞細亞歐羅巴の界を爲せり。者別速別額台の歐羅巴に入りたることは、喇失惕の史には委しからざる故に、多遜は、亦奔阿勒阿提兒の喀米勒兀惕帖哇哩克全き歴史に據りて記せり。その略に曰く、蒙古人は、高喀速山を踰え、阿關列思吉徹兒客思乞魄察克兵を連ねて、禦ぎ戦ひ、勝敗決せず。蒙古人は、甘言を用ひて、乞魄察克人を誘ひ、その同盟を棄てさせ、然る後に阿關等の眾を破り、帖兒乞の城を取り、遂に乞魄察克の地を襲ひて、その眾を追ひ散らし、大なる曠野を過ぎ、速苔克まで進みたり。乞魄察克の大眾は、嚕西亞に遁げ入りたれば、嚕西亞人は、それらと同盟して、敵に當らんとす。一二二三年、太祖十八年、蒙古人は、嚕西亞人に攻め入らんとして、嚕西亞乞魄察克連合の兵に遇ひ、侘り負けて、遁げ走り、十日の間、敵に逐はれて、伏を設けて、遽に起り、七日、烈しく戦ひ、遂に勝を決し、嚕西亞乞魄察克は、全く敗れたり。それより、蒙古人は、嚕西亞に入りて、焚掠を逞せり。一二二三年の末に、蒙古人は、嚕西亞を去りて、不勒噶兒の地を侵し、その兵を破り、撒喀新を過ぎて、大軍に會せり。喀喇姆津の嚕西亞史に曰く、その時、嚕西亞は、あまたの小國に分れ、その中に速思苔勒兀刺的米兒は、重要な國にて、その大公は、列國の宗主の如く見られたり。大公の宮所は、もと乞額甫にありしが、一一六九年に、兀刺的米兒に遷れり。嚕西亞に遁げ入りたる、玻羅物次、乞魄察克人の内に、噶里赤の君、姆思提思刺甫の妻の父なる部長科提安、洪噶兒の史には、庫壇と云ふ人あり、塔塔兒、蒙古人を禦ぐ手段を取ること、の必要なるを、その塔

喀喇姆津の嚕西亞史

速不台の傳

姆思提思刺甫に説き、勸めたれば、姆思提思刺甫は、南嚕西亞の諸侯と乞額甫に會して、玻羅物次を援けて、塔塔兒に當らんことを議決せり。乞額甫、徹兒、尼郭甫、噶里赤の三君、名は、皆姆思提思刺甫と、その他の諸侯と、篤聶珀兒、尼珀兒、河の濱に軍を聚めたる所に、塔塔兒の使十人至りたれば、それらを皆殺して、然る後に、軍を進め、闊兒提擦河、額喀帖哩諾思刺甫の南五十英里ばかりにある、尼珀兒河の深水に、近く、塔塔兒の軍に遇へり。勝を得たれば、嚕西亞人は、篤聶珀兒河を渡りて、塔塔兒を九日、逐ひて、喀勒河に至れり。噶里赤の姆思提思刺甫は、北軍に居り、玻羅物次と共に、河を渡りて、塔塔兒の中軍を衝かんとして、打破られ、塔塔兒人は、勢に乗じて、河を渡り、嚕西亞の南軍を襲ひて、その眾を殲滅せり。これは、名高き、喀勒河の戦なり。喀勒河は、他の書には、喀刺克河ともあり。喀喇姆津は、馬柳坡勒の傍にて、阿索甫の海に入る、喀勒繆思河の深水なる、喀列租河に當てたり。元史、速不台の傳に、只別者別と共に、回國主を追ひたる事を、敘べたる。後に、癸未、速不台上奏、請討欽察、許之。遂引兵、繞寬定吉思海、展轉至太和嶺、鑿石、開道、出其不意。至則、遇其酋長、玉里吉及塔塔兒、方聚於不租河。縱兵奮擊、其眾潰走。云云。遂收其境。又至、阿里吉河、與幹羅思部、大、小密赤思老、遇、一戰、降之。略阿速部、而還。とあり。癸未は、太祖十八年にして、喀勒河の大戦の年なり。二將の、歐羅巴に入りたるは、その前年、壬午なれば、癸未の書き所や、違へり。寬定吉思海は、後文に、寬田吉思海ともあり。裏海を云へるなり。突兒克語に、顛吉思は、海の義にして、それより、裏海、巴勒喀施の如き、大湖の名となれり。寬即庫安は、委古兒語に、湖なり。顛吉思は、名となれる故に、その上に、湖を冠せたるなり。太和嶺は、高喀速山を指せるなり。玉里吉、塔塔兒、哈兒、洪鈞の哲別補傳の史に、據れば、玻羅物次、乞魄伊兒とありと云へり。ト、喇惕施、乃、迭兒、曰く、嚕西亞の史に、據れば、玻羅物次、乞魄

得思麥里の傳

十一部の内八部の征伏

察克の汗の一人、名は玉哩晃察喀威赤と云へるもの、一二年蒙古人に殺されたり。阿吉河は喀勒喀河の訛なるべし。大小密赤思老は、乞額甫の君と徹兒尼郭甫の君となり。又曷思麥里の傳に「帝遣使趣哲伯疾馳以討欽察云云。進圍幹羅思於鐵兒山、克之、獲其國主密只思臘。哲伯命曷思麥里獻諸朮赤太子誅之。尋征康里。至孛子八里城、與其主霍脫思罕戰、又敗其軍。進至欽察、亦平之。軍還、哲伯卒」とあり。鐵兒山は、哲別補傳に孩耳桑と書き、嚕西亞の北軍大敗の地とし、その自注に「鐵兒山、乃地名、非山名」と云へり。この密只思臘は、徹兒尼郭甫の君なり。康里を征したるは、不勒噶兒より回れる時の事なるべければ、進至欽察とあるは非なり。さて本書に列ねたる十一部落、馬札兒と客喇勒とは同國なりとして十部落の内、乞卜察兀惕即乞魄察克、玻羅物次、幹嚕速惕即嚕西亞、阿速惕即阿蘭、撒速惕即撒喀新、薛兒客速惕即徹兒客思、孛刺兒即不勒噶兒の六部の名は、珀兒沙嚕西亞の舊史なる二將西征の條に見え、巴只吉惕即巴施客兒篤の名は、そこに見えざれども、不勒噶兒と康克里との間にあれば、不勒噶兒より回れる時從へたる馬札兒の國即洪噶哩亞は、二將の至らざるのみならず、出征の目的の中に加へられたりとも思はれざれば、太宗八年の西征の時の事と混じて誤り加へたるに似たり。又客失米兒即喀施米兒は、二將出征の路とは遙に隔たれば、これも誤りならん。

答嚕合赤の設け

又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕勅あり、城に答嚕合赤を置きて、(親征錄癸未の夏八魯彎川避暑の處に「時上既定西域置達魯花赤於各城監治之」と云ひ、元史も同

忽嚕姆石姓の子

じ。答嚕合赤は、答嚕合赤とも云ひ、元史は常に達魯花赤と書き、明譯には鎮守官とあり。蒙古語答嚕忽は、壓ふる鎮むるの義あるより、その語尾を變へて、一州一局を統ぶる官の名とせり。趙翼の二十二史劄記に曰く「達魯花赤、掌印辦事之官。不論職之文武大小、或路府或州縣、皆設此官。太祖時授札八兒、黃河以北、鐵門以南、天下都達魯花赤、木華黎以谷里夾打爲元帥、達魯花赤、又帖木兒補化爲鞏昌都總帥、達魯花赤、世祖以別、黎以爲屯田府、達魯花赤、俺木海爲隨路砲手、達魯花赤、多蒙古人爲之、漢人亦有官此者。劉好禮爲永熙路、達魯花赤、張炤爲鎮江路、達魯花赤、張君佐爲黃州、達魯花赤、張賁亨爲處州、達魯花赤、珀兒沙にては、答魯合赤の赤を略きて呼びたりと見えて、喇失惕の史には、答兒噶とあり。珀兒沙の亦勒罕すら自ら答嚕噶と稱し、その頃鑄たる貨幣には、大汗即元帝の名を書きて、その下に答嚕噶の稱を加へた。兀嚕格赤の城より、牙刺哇赤馬思忽惕と云ふ父子一人、忽嚕木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、緣故に遵ひ知らせと云はれて、その子を馬思忽惕、忽嚕木石を、我等の答嚕合思(答嚕合赤の複稱)と共に不

兀丹即ち和闐

合兒薛米思堅兀嚕格赤兀丹(兀丹は、史記の于寔、漢書以來、歷代史志の名を擧げて「瞿薩旦那國、唐言地乳、即其俗之雅言也。俗語謂之渙那國、匈奴謂之于遁、諸胡謂之豁旦、印度謂之屈丹、舊曰于闐、譌也」と云ひ、耶律楚材の西游錄には

乞思合兒即ち喀什噶爾

兀哩罕即ち葉爾羌

古先荅哩勒即ち曲先荅林

乞塔惕の荅魯合赤

「高昌西三、四千里、有五端城、即唐之于闐國、河出烏白玉」と云へり。于闐の玉を産することは、歴代の史に詳なり。元史には屢幹端と書かれ、只地理志に忽炭とあり。西域記の豁旦、地理志の忽炭は、皆突兒克語の闐壇を音譯せるなり。闐壇の名は、珀兒沙の古史に屢見え、馬兒科保羅は科壇と呼べり。この國は、西亞細亞には玉のみならず、麝香（麝香）乞思合兒（乞思合兒は漢書以來の疏勒、今の喀什噶爾なり。の爲に名高し。）唐西域記は、佉沙國と書きて、舊謂疏勒者、乃稱其城號也。正音宜言室利訖栗多底。疏勒之言、猶爲譌也」と云ひ、新唐書疏勒の傳には又「王居迦師城」と云へり。元史世祖紀至元十一年に合失合兒、二十五年に可失合兒、地理志に可失哈耳、曷思麥里の傳に可失哈兒、耶律希亮の傳に可失哈里とあり。珀兒沙、阿喇必亞の史家は、古くより喀什噶兒と云ひ、馬兒科保羅は喀思噶兒と云ひ、捏思脫哩宗の教正分擔（分擔）兀哩羊（羊は、恐らくは罕の誤ならん。兀哩罕也。里度とあり。突兒克語には牙兒堪篤と云ひ、馬兒科保羅は牙兒牽と云へり。）元史世祖紀至元十一年の條に鴉兒看、曷思麥里の傳に押兒看、耶律希亮の傳に也里度とあり。突兒克語には牙兒堪篤と云ひ、馬兒科保羅は牙兒牽と云へり。

古先荅哩勒（明史西域傳に曰く、曲先衛、東接安定、在肅州西南。古西戎、漢西羌、唐吐蕃、元設曲先荅林、元帥府。曲先荅林は、即この古先荅哩勒なり。）り。安定衛は、甘州の西南、五百里に在りて、廣袤千里なりとありて、曲先はその西に在りと云へば、その地は、肅州の西南、于闐の東南に當り、今の青海の西邊、西藏の北邊に在り。なごの城（なごの城）ごもを知らしめに任して、その父を牙刺哇赤（牙刺哇赤）を伴れ來て、乞塔惕（乞塔惕）の中都の城を知らしめに伴れ來た

り。撒兒塔黑（撒兒塔黑）の人より、牙刺哇（牙刺哇）亦馬思忽惕（亦馬思忽惕）二人の城の體例縁故に通じたるの故に、乞塔惕（乞塔惕）の民を知らしめに、塔魯合思（塔魯合思）共に任したり。（牙刺哇赤は、喇失惕の史多遜に馬呵木惕也、勒縛只と呼び、めたりと云ひ、馬思忽惕は、馬思速惕閉と呼ばれ、突兒其思壇只、渾河地方の牧長となれりと云へり。親征錄己丑、太宗元年八月、太宗即位の所に、河北先附漢民賦調、命兀都撒罕、主之、西域賦調、命牙魯瓦赤、主之、また辛丑、太宗十三年、至り、冬十月、命牙老瓦赤、主、管漢民、と見え、元史太宗紀元年己丑八月、即位の所に、命河北漢民、以、戶計、出、賦、調、耶律楚材、主之、西域人、以、丁計、出、賦、調、麻合沒的、滑刺西迷、主之、また、十三年、辛丑、冬、十月、命、牙老瓦赤、主、管、漢民、公事、憲宗紀元年辛亥六月、即位の續に、以、牙刺哇赤、不、只、兒、幹、魯、不、觀、答、兒、等、充、燕、京、等、處、行、尚、書、省、事、以、訥、懷、塔、刺、海、麻、速、忽、等、充、別、失、八、里、等、處、行、尚、書、省、事、世、祖、紀、に、歲、壬、子、憲、宗、二、年、帝、駐、桓、撫、開、憲、宗、令、斷、事、官、牙、魯、瓦、赤、與、不、只、兒、等、總、天、下、財、賦、于、燕、云、と見えたり。牙魯瓦赤、牙老瓦赤は、即牙刺哇赤なり。麻合沒的、滑刺西迷は、牙刺哇赤の全名馬呵木惕、牙刺哇赤にして、西迷は、瓦赤の誤なり。麻速忽は、即馬思忽惕なり。兀都撒罕は、正しくは、兀兒禿撒哈勒、長髯の蒙古語にて、耶律楚材の稱號なり。元史楚材の傳に、楚材身長八尺、美髯、宏聲、帝、偉、之、云、遂、呼、楚、材、曰、吾、圖、撒、合、里、而、不、名、吾、圖、撒、合、里、蓋、國、語、長、髯、人、也、とあり。睿宗の傳に、楚材を吾圖撒合里と書き、食貨志、歲、賜、の、篇、に、曳、刺、中、書、兀、圖、撒、罕、里、とあり。牙刺哇赤の漢民を管する事を、太宗十三年、即本書、秘史續集の呼べり。親征錄に、牙刺哇赤の漢民を管する事を、太宗十三年、即本書、秘史續集の

史錄の牙老瓦赤麻速忽

兀兒禿撒哈勒

成りたる翌年の所に記したれども、こゝに明に「中都の城を知らしめに」
伴れ來たり」とあれば、太祖の時より燕京の財政に與り居たるならん。

七年の遠征

撒兒塔兀兒の民の處に七年行きて、そこに札刺亦兒の巴
刺を待ちて居る時に、(太祖の西征は十四年己卯より二十年乙酉まで

七年目にはあらず、四年目なる十七年壬午の夏巴魯安原にて避暑) 巴刺は、
申木噠を渡りて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を欣都思の

巴刺の印度侵略

地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を失ひ

て、欣都思の中に到るまで尋ねて、(得)かねて回りて、欣都思の

傍邊の民を虜へて、多き駱駝多き薛兒客思(勢を去り)を取り

て來ぬ。(親征錄に曰く「遂遣八刺那顏將兵急追之、不獲、因大擄忻都人民之半

必亞

追ひて印度に入りたれども、ゆくへ知れず、必亞の城を取り、木勒壇まで進みた
り。その地に石なく、筏を作り石を運び來て、攻具備はりたれども、暑さ烈しきが
爲に捨て去り、刺和兒珀沙兀兒篋里克普兒を侵掠して回り、羊の年の夏成吉
思汗別魯安に避暑し居る時、別刺等至れり。必亞は、必亞思河の畔にありし城な

木勒壇

いと古き名城にして、阿歴散迭兒東征の頃は、馬里國の都となり、希臘人のそれ

刺和兒

を攻め落す時、阿歴散迭兒は重傷を受けたり。城内に莊嚴なる日天の祠あり
て、西域記に、其日天像、鑄以黃金、飾以奇寶、靈鑑幽通、神功潛被、五印度國諸王豪族、
莫不於此捨施珍寶、建立福舍とありしが、その祠堂は、木噠勒帝奧郎在トに廢せ

珀沙兀兒
印度の奴隸王朝

磔迦國より至那僕底國に往く時、磔迦の東界なる大城に一月留まれりと、慈恩
三藏法師傳に見えたるは、その城ならんと、堪寧哈姆云へり。刺和兒の壯麗なる
都となれるは、木噠勒朝の時なり。珀沙兀兒は、健馱羅の迦膩色迦王の故都なる
布路沙布邏にて、喀不勒の東孩巴兒山口の東麗にあり、今の英領印度の西北の

太祖の凱旋

一八六年、篋里克普兒は、知らず、印度は、西紀千一年、噶自尼朝の侵略を被りてより、
隅一八六年、誥兒の沙哈兀丁は、噶自尼朝を滅し、遂に邊噶勒までも平げたれ

ば、印度の過半は、抹哈篋惕教の國となれり。一二〇六年、沙哈兀丁死し、その將
庫塔兀丁自立して、印度の王となり、迭勒希即今の迭里に都せり。庫塔トは、突

兒克人にして、もと奴隸なりし故に、この朝を世に奴隸王朝と云ふ。者刺列丁の
迭勒希に遁げ入りたるは、奴隸王朝の第三世阿勒塔姆施(庫塔トの壻)の時なり

西游記なる壬午の同駕

馬兒罕に至れり」とあり。親征錄集史は己卯より壬午まで四年の間の事を一年づつ後れさせ庚辰より癸未までとしたれば、この甲申も癸未の誤りと見ざるべからず。然らば太祖の師を班して撒馬兒罕に至れるは、癸未の年なりやと云ふに、また然らず。實は壬午の年に師を班して、その年の内に撒馬兒罕に至れるなり。西游記に、長春は壬午の四月、欣都庫施山の行在所より還り、五月五日、邪米思干に達し、八月八日、二たび往き、十五日、阿沒河を濟り、二十二日、行宮に至り、上に見え、二十七日、車駕北に回り、九月朔、河橋(阿沒河)を渡り、十五日、十九日、二十三、日、途に在り、幄を設けて道を説き、それより扈從して行き、時、道化を敷奏し、又數日にして、邪米思干大城の西南三十里に至り、十月朔、奏して舊居に還り、上は大城の東二十里に駐まれり。六日上に見えて、自此或在先或在後、任意而行を許され、十一月二十六日、即行き、十二月二十三日、雪寒く、又三日、霍闌河を過ぎ、二十八日、行在に至り、震雷の間に對へたりとあり。この記に據れば、太祖は壬午の八月二十七日、山中の行宮を發し、九月の末に撒馬兒罕に至れり。太祖の撒馬兒罕を發したる日は、確ならねども、長春の失兒河を過ぎて後に行在に至れるを見れば、太祖は蓋長春より先に發し、その年の内に失兒河の東に至りたることを明なり。又元史太祖紀十九年甲申の條に、是歲帝至東印度國、角端見、班師と云ひ、耶律楚材の傳に、甲申、帝至東印度、駐鐵門關、有一角獸、形如鹿而馬尾、其色綠、作人言、謂侍衛者曰、汝主宜早還、帝以問楚材、對曰、此瑞獸也、其名角端、能言四方語、好生惡殺、此天降符、以告陛下、陛下、天之元子、天下之人、皆陛下之子、願承天心、以全民命、帝即日班師、とあるにつきて、程同文曰く、蓋本於宋子貞所作神道碑、極以全美文正、然非實錄也。唐書、東天竺、際海、與扶南、林邑、接。太祖西征、無由至彼、角端能言、書契所無、晉卿何自知之。讀湛然集、晉卿在西域、七年、惟及尋思于止耳、未嘗出鐵門

角端の奇談

禿別揚の方に進みたりと云ふ説

也。今讀此(西游記)則太祖追算端惟過大雪山數程、其地應爲北印度。晉卿實未從征、無由備顧問。且頽師爲壬午之春、非甲申也」と云へり。この角端の事は、楚材の孫なる宣慰柳溪の詩集、庶齋老學叢談に引けるに、角端呈瑞、移御營、益亢問罪、西域平」とありて、その自注に、角端日行萬八千里、能言曉四夷之語、昔我聖祖皇帝出師、問罪西域、辛巳歲夏、駐蹕鐵門關、先祖中書令奏曰、五月二十日晚、近侍人登山、見異獸、二目如炬、鱗身五色、頂有一角、能人言、此角端也。當於見所、備禮祭之。仍依所言、耕録にも、太祖皇帝、駐蹕西印度、忽有大獸、其高數十丈、一角如犀、牛然、能作人語、云則吉」とありて、宋子貞の耶律公神道碑(元文類卷五十七)の文とは、稍異なり。又輟此、非帝世界、宜速還、左右皆震懾。耶律文正王進曰、此名角端、乃旄星之精也。聖人在位、則斯獸奉書而至、且能日馳萬八千里、靈異如鬼神、不可犯也。帝即回駁」と云ひて、至正庚寅、江浙の郷試に、角端を賦の題とせることを載せ、又白湛淵先生の續演雅十詩の發揮を引ききて、西狩獲白麟、至死意不吐、代北有角端、能通諸國語、者、角端北地異獸也。能人言、其高如浮圖」と云へり。然らば、角端の奇談は、元人の評判となるることにて、宋子貞の碑文に始れるに非ず、たゞ西印度を東印度としたるは、宋子貞の誤れるなり。角端は、司馬相如の上林の賦に、角觶とありて、郭璞の説に「角觶、音端、角在鼻上」と云へるに據れば、角端と名づけられたる一角獸は、印度の犀牛なるに似たり。又浮圖の如く高しとあるに據れば、西亞細亞の駝豹を指せるにも似たり。いづれにしても、蒙古人の見慣れざる獸にして、洪鈞の曰へる如く、或者當日軍行見此、詫爲異獸、其後展轉傳訛、遂至鋪張符瑞に過ぎざるなり。又多遜の史は、一二九年(己卯)より一二二二年(壬午)までの紀年は、正しけれども、別嶺安駐夏の後、喇失惕に本づきてや、その文を易へ、蒙古人は、信度禿別揚の上遊なる不牙客惕沃兒に駐冬し、一二二三年(癸未)の春、成吉思汗は、印度禿別揚を

額兒的失の駐夏

長春の歸路

經て蒙古に還らんと欲し、實にその方に進みたれども、路險しくして行き難く、
 珀沙兀兒に回れりと云ひ、餘は集史に同じく、只途上の日數は集史より一年長
 く、西游記より一年短し。禿別惕通過は、多遜の臆度に出でたりと見ゆるが故に、
 洪鈞曰く、考其自注、未言本自何人、但引元史謂成吉思汗至東印度、角端見、乃班師、
 玩其詞意、蓋爲元史所誤、而二十年正月還宮、則拉施特與他書所紀年分相同、在途
 歲月過多、無事可敘、乃牽引元史、以意附會、不知元史此說固不足憑也。多桑著書時、
 元史已有譯本、西游記時尙未譯、故有此誤、と云へり。途に額兒的失に駐夏して、
 夏したることは、他の書に見えず。こは、必ず出征の初十四年己卯の事を誤りた
 るなり。西游記に據れば、十八年癸未の正月元日には、長春行在に留まりて、將帥
 醫卜等官の賀を受け、十一日大軍に先だちて發し、二十一日至一大川、東北去賽
 藍約三程とあるは、塔什肯篤に近き赤兒赤克河の邊なるべし。水草豐茂、可飽牛
 馬に因りて、そこに盤桓したる間に、太祖も至りたれば、二月七日長春入りて見
 えたり。その時太祖は、朕已東矣、同途可乎と云へるに、長春固く辭みれば、太祖
 曰く、少俟。三五日太子來、前來道話所有未解者、朕悟即行と云へり。八日太祖東山
 の下に獵して、馬より墜ちたりと聞き、長春入りて獵を諫めたれば、太祖は我蒙
 古人、騎射少所習、未能遽已。雖然、神仙之言在衷焉と云ひて、それより兩月は獵に
 出でざりき。かくて二十四日再朝を辭し、三月七日又辭し、十日遂に辭し去り、そ
 の年七月雲中に至れり。太祖は猶留まりていつ出發したるか、は記に見えず。親
 征録には、たゞ甲申班師、住冬避暑、且止且行とあり。多遜の史はやゝ委しく、一二
 二四年甲申の春、大軍再動き、昔渾河を渡れり。拙赤は呼べども至らず、たゞ昔渾河の北より
 して來て、あまたの獲物を上れり。拙赤は呼べども至らず、たゞ昔渾河の北より

赤兒赤克河癸未の駐夏

阿勒馬里克甲申の駐夏

獸を驅りて行在に向はしめ、圍獵の便に供へたり。その夏成吉思汗は、喀闐塔失
 の地に駐まりて、遊獵を以て日を送れりとあり。大軍再動き、昔渾河を渡るは、西
 游記に據れば、壬午の冬なり。察合台幹歌台の獲物を上れるは、三五日太子來と
 云へる時に、癸未の二月なり。喀闐塔失は、即塔什肯篤にして、謂はゆる水草豐
 茂の地は、その近郊なり。太祖は、諫を容れて、兩月獵を罷めたれども、蒙古人の習
 は、遽に已め難く、癸未の夏は遊獵を以て送りたるなり。さて癸未の駐冬は、いづ
 こなりしか知るべからず。湛然居士集に從容菴錄の序あり、甲申中元、序於西域
 阿里馬城と云へり。阿里馬は、即阿勒馬里克なれば、耶律楚材は太祖に從ひ、十九
 年甲申七月十五日、阿勒馬里克に居たるなり。また丁亥九月望日に作れる過夏
 國新安縣の詩ありて、昔年今日度松關の句あり、その原注に、西域陰山有松關と
 云へり。陰山は、即天山なり。松關は、賽喇姆諾兒の西南に在り、西游記に、左右峰巒
 峭拔、松樅陰森、高踰百尺、自巔及麓、何啻萬株と云へる所なり。西域水道記に、賽喇
 木淖爾、當惠遠城正北二百里、在松樹頭嶺下、また果子溝、谷長七十里、北有峻嶺、扼
 之、嶺上多松、名曰松樹頭嶺とありて、松樹頭嶺は、山にして、關に非ざれども、その
 險隘なるに由り、詩には松關と云へるなり。昔年今日とは、丁亥の三年前なる甲
 申の九月十五日を云へるなり。阿勒馬里克より松樹頭嶺までは、二日路に過ぎ
 ざれば、楚材等の阿勒馬里克を發したるは、早くとも九月望日の三四日前にし
 て、九月上旬までは阿勒馬里克に留まれるならん。然らば阿勒馬里克は、即甲申
 の駐夏の地なるべし。又多遜の史に、皇孫二人、十一歳なる忽必來、九歳なる忽刺
 古は、額米勒河まで迎へに出で、忽必來は兔を殺し、忽刺古は鹿を殺して上れり
 とあり。額米勒河は、今の塔兒巴哈台城南にあり、西に流れて阿刺克庫勒の湖
 に入る。その溪は、牧場として名高し。元史憲宗紀の葉密立地、耶律希亮の傳なる

額米勒河甲申の駐冬

者別速不台の大軍に追ひ附き

葉密里城は額米勒河の邊なり。西域水道記は額敏河と書き、額敏者、回語清淨平安之謂。音轉爲額密爾と云へり。忽必來は、即世祖にて、太祖十年乙亥に生れたれば、十一歳なる時は、二十年乙酉なり。松樹頭嶺を踰えて、翌年猶額米勒に畱れるは、蓋甲申の冬額米勒に駐冬して、翌年の春未だ出發せざるに、二皇孫の至れるならん。又者別速不台の軍は、乞魄察克康克里的地より還り、いづこにて大軍に會せしか、東西の諸史に明文なし。者別は、多遜の史に途にて死にたりと云ひ、曷思麥里の傳にも、軍還、哲伯卒とあれば、大軍に會してまもなく歿したるなり。速不台の傳に、西征より還りて、後略也。迷里霍只部獲馬萬匹以獻とあれば、二將は、甲申の額米勒駐冬の前に大軍に會したるにて、庚辰の夏速勒壇追討の命を受けたる時、抹古里思壇に會せんと宣へる勅旨に適合せり。但三年の期限は後れたり。かくて太祖は、壬午の冬、兒河を渡りてより、甲辰の冬額米勒河に駐まるまで二年の間徐行したるは、何故ぞ。洪鈞曰く、太祖東歸之時、正哲別速不台入欽察敗俄羅斯之時、豈因二將暴師於遠故遲行以俟軍信耶と云へるは、さもあるべし。

七年に當る雞の年の秋、秃刺河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。(雞の年は、後堀河天皇嘉祿元年乙酉、宋の理宗寶慶元年、金の哀宗正征録に乙酉春、上歸國、自出師至此、凡七年。元史に二十年乙酉春正月、還行宮。喇失惕は、雞の年の春と云ひ、親征録に同じ。多遜は、一二二五年二月と云ふ。西曆の二月は、即東曆の正月なり。この春額米勒を發したりとすれば、元史の正月は早きに過ぎ、祕史の秋は遅きに過ぎたり。親征録の春に従ふべし。合喇屯即黒林の斡

乙酉の歸國

四皇子の分封

兒朶は、王罕の舊營なり。多遜は、この處に四皇子分封の事を敍べて、成吉思汗東に歸り、四子の分地を定め、喀喇科嚕姆の山と斡難河の源との間を拖雷に與へ、額米勒河の邊を斡歌台に與へ、昔渾河の東を察合台に與へ、喀思關の海の北關喇自姆の湖(阿喇勒海)の周圍を拙赤に與へたりと云ひ、額兒篤曼は、斡歌台の分地を亦米勒孫噶哩亞の諸子とし、察合台の分地を牙里克貨喇自姆より不勒噶兒撒克新まで蒙古の馬の蹄の跡を任せられたりと云へり。今これを短く言ひ換ふれば、拖雷は、蒙古の地を得、斡歌台は、乃蠻の故地を得、察合台は、西遼の故地を得、拙赤は、闊喇自姆、康克里、乞卜察克の地を得たり。祕史の太祖西征の條は、親征録元史より委しけれども、敍事の顛倒錯亂多きは惜むべし。今尙書の(今考定武成)の例に倣ひ、試にその次序を左の如く考へ正せり。

今考定西征之役

兔の年、撒兒塔兀勒の民の處に阿喇亦に依り越え出馬するに、成吉思合罕は、合屯より忽闌合屯を伴れ進み、弟だちより斡惕赤斤那顔を大老營に畱守せしめて出馬せり。途に額兒的失に駐夏して、成吉思合罕は、自兀的喇兒の城に下營せり。かくて成吉思合罕は、龍の年の春、兀都喇兒の

戦の始まり

三將の速勒壇追撃

城を下して、兀都喇兒の城より動きて、不合兒の城に下營せり。その夏、不合兒の城より動きて、薛米思加卜の城に下營せり。そこに成吉思合罕は、**巴刺を待たん**。金の寨の嶺なる、莎勒壇の避暑處に避暑して、者別を先鋒に遣りぬ。者別の後援に速別額台を遣りぬ。速別額台の後援に脱忽察兒を遣りぬ。この三人を遣るに、外面に往きて、速勒壇の彼方に出でて、我等を到らしめて、夾攻めん。宣ひて遣りぬ。者別は、かく往きて、罕篋里克の城ごもを経て動さず、外面を過ぎけり。その後より速別額台も、その理由に依り動さず過ぎけり。その後より脱忽察兒は、罕篋里克の傍の城ごもを侵して、彼の田禾を掠めき。罕篋里克は、城ごもを侵

三將の賞罰

されたりとて、背き動きて、その後、札刺勒丁莎勒壇に合ひけり。成吉思合罕は、者別速別額台二人を甚く恩賞して、者別汝は、只兒豁阿歹と云ふ名なりき。台赤兀惕より來て、者別となりたるぞ。汝、脱忽察兒は、罕篋里克の傍の城ごもを己が心に依り侵して、罕篋里克を叛かせたり。法に當て斬らしめん。と云ひ畢へて、却て斬らしめず、甚く責めて、彼の軍を知るこそより罰ひて下せり。

三皇子の兀囉格赤せめ

かくて成吉思合罕は、その年の秋、拙赤察阿歹、斡歌歹、三人の子だちを、右手の軍にて、阿梅木噠を渡りて、兀囉格赤の城に下營せよとて遣りぬ。拖雷をば、亦魯亦薛不兒を始とせせる多き城ごもに下營せよとて遣りぬ。蛇の年の春、拙

赤察阿歹斡歌歹三人の子だち奏して遣るには我等の軍
ごも揃へり。兀囉格赤の城に到れり。誰の言に依り行はん、
我等と奏して遣りたれば、成吉思合罕勅あり。斡歌歹の言
に依り行へと宣ひて遣りぬ。

拖雷の凱旋

〔又その春成吉思合罕は、塔里罕に在して、拖雷の處に使
を遣りぬ。〕年熱くなりぬ。別の軍ごもは下馬するぞ。汝は、我
等の處に會せよと宣ひて遣りたれば、拖雷は、亦魯亦薛不
兒等の城ごもを取りて、昔思田の城を破りて、出黑扯噠の
城を破り居る時、使はこの言を致したれば、拖雷は、出黑扯
噠の城を破るぞ、回り下馬して來て、成吉思合罕に會しぬ。

三皇子の叱られ

〔その夏〕拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちは、斡囉格赤の

城を降して、三人にて城ごもの民を分け合ひて、成吉思合
罕に分前を出さざりき。この三人の子だち下馬して來ぬ
れば、成吉思合罕は、拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを咎
めて、三日見えさせざりき。そこに孛斡兒出 **木合黎** 失吉
忽都忽三人奏さく、服はざりし撒兒塔兀勒の民の莎勒壇
を平けて、彼が城ごもの民を取れり、我等分けて取らるゝ
斡囉格赤の城も、分け合ひて取る子だちも、都て成吉思合
罕のものなり。皇天后土に力を添へられて、撒兒塔兀勒の
民をかく平けたる時、我等爾のあまたの男驕馬歡びて馬
孩してあり。合罕は、何ぞかく怒りて在せる。子だちは過を
悟りて畏れたるぞ。後を戒めよ。然らずば、子だちは、性行を

怠らん恩賜せば見えさせば可からんと奏したれば成吉思合罕怒息みて拙赤察阿歹斡歌歹三人の子だちを見えさせて聲を出し翁等の辭を引きて舊き辭を尋ねて立ちたる地に巴黑塔阿勒答休るまで額の汗を拭ひ敢へぬまで陳べて合元臣譴責により教訓により諭して在せる時晃孩豁兒赤晃塔合兒豁兒赤斡兒乞揚搠兒馬罕合答勒豁兒赤この三人の箭筒士は成吉思合罕に奏さく雛なる鷹の調習にやつこ入りたる如く子だちはやつこかく征伐を學び居る時子だちを退くるが如くいかんぞかく叱りませる子だちは懼れて心を落さん。日の没る處より出る處に至るまで敵の民あり我等を脱亭都惕の狗ごもを嗾けて遣らば敵の民を我等は皇天后

豁兒赤三人の奏議

土に力を添へられて金銀段物民住具を爾に持ち來ん。その民と云へばこの西に巴黑塔惕の合里伯莎勒壇と云へるありと云へり。それらの處に我等出征せんと奏しければ合罕悟りてこの言に怒息みて成吉思合罕は可しとして勅あり晃孩晃塔合兒搠兒馬罕三人の箭筒士を恩賞して阿答兒斤の晃孩朶龍吉兒の晃塔合兒二人を我が前に居れとて畱めて幹帖格歹の搠兒馬罕を巴黑塔惕の民の處に合里伯莎勒壇の處に出征せさせたり。又欣都思の民巴黑塔惕の民二つの閒なる阿魯馬魯馬答撒哩の民の阿卜禿の城に朶兒別惕の朶兒伯朶黑申を出征せさせたり。

又者別那顏速別額台巴阿秃兒二人を北なる康鄰乞卜
 察兀惕巴只吉惕斡嚕速惕馬札喇阿速惕撒速惕薛兒客速
 惕客失米兒孛刺兒客喇勒この十一部落なる外國の民の
 處に到るまで亦的兒札牙黑なる水ある河を渡り乞瓦綿
 客兒綿の城の處に到るまで者別那顏速別額台巴阿秃兒
 二人を出征せさせたり。

〔蛇の年の秋成吉思合罕は塔里罕より南に動きたれば、
 その冬〕札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は成吉思合罕の迎
 に出馬せり。成吉思合罕の前に失吉忽秃忽先鋒に行きけ
 り。失吉忽秃忽と對陣して札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人
 は失吉忽秃忽を敗りて成吉思合罕の處に到るまで勝ち

札刺勒丁罕蔑里
 克の追ひ捲くら
 れ

て來つるに、**者別速別額台**脱忽察兒三人は札刺勒丁莎
 勒壇罕篋里克二人の後より入りて却て彼等を敗りて殺
 して不合兒薛米思加卜兀答喇兒の城に彼等を會せしめ
 ず勝ち申木噠に到るまで追ひて行かれ申木噠に跳込
 みて入るこなり多き撒兒塔兀勒をそこに申木噠の處に
 滅したるぞ。札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人は命を助かり
 て申木噠に浜り逃れたり。成吉思合罕は札刺亦兒の巴刺
 を札刺勒丁莎兒壇罕篋里克二人を追はしめに遣りて馬
 の年の春申木噠に浜り往きて巴惕客先を掠めて去りて、
 〔その夏〕母小河牝馬小河に到りて巴嚕安原に下馬してそ
 こに札刺亦兒の巴刺を待ちて居る時巴刺は申木噠を渡

りて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を欣都思の地に到るまで追ひて、札刺勒丁莎勒壇罕篋里克二人を失ひて、欣都思の中に到るまで尋ねて得かねて回りて、欣都思の傍の民を掠めて、多き駱駝多き羯羊を取りて來けり。

答魯合臣の設け

又撒兒塔兀勒の民を取り畢へて、成吉思合罕勅あり、城に答魯合臣を置きて、兀嚨格赤の城より牙刺哇赤馬思忽惕と云へる父子二人、忽魯木石の姓ある撒兒塔兀勒來て、城の緣故體例を成吉思合罕に奏して、緣故に遵ひ知らせと云はれて、その子を馬思忽惕魯木石を、我等の答魯合思と共に不合兒、薛米思堅、兀嚨格赤、兀丹、乞思合兒、兀哩罕、古先答哩勒などの城ごもを知らしめに任して、その父

大凱旋

を牙刺哇赤を伴れ來て、乞塔惕の中都の城を知らしめに伴れ來ぬ。撒兒塔黑の人より牙刺哇赤、馬思忽惕二人の、城の體例緣故に通じたるの故に、乞塔惕の民を知らしめに、答魯合思と共に任したり。

かくて成吉思合罕は、馬の年の秋、巴魯安原より回りて、その冬、薛米思堅に下馬して、羊猴の二年は、駐夏駐冬して、徐に動きて、者別速別額台二人を待ち合はせ、撒兒塔兀勒の民の處に七年行きて、七年に當る雞の年の秋、秃刺河の合喇屯に斡兒朶の處に下馬せり。

成吉思汗實錄卷の十一終り。

成吉思汗實錄卷の十二

唐兀惕最後の征伐

乙酉丙戌兩説の可否

その冬冬籠して唐兀惕の民の處に出馬せんさて新しき
數(兵)を數へて、狗の年(我が嘉祿二年丙戌、宋の寶慶二年、金の正大三年、元の太祖二十一年、西紀一二二六年、太祖六十五年)
時(歲)秋、成吉思合罕は、唐兀惕の民の處に出馬せり。合敦より
也遂合敦を伴れて往けり。(この出陣を、親征錄集史は乙酉の秋とし、元史本紀は丙戌の正月とし、皆本書と異なり。)
湛然居士集なる辨邪論の序に、乙酉、南至、斡於瀚海軍之高昌城とあり。瀚海軍の高昌城は、西游録に、回鶻城、名別石把、有唐碑、所謂瀚海軍城之南五百里有和州、即唐之高昌とありて、畏兀兒に屬する和州の城を唐の名にて呼べるなり。その地は、今の哈喇和卓にして、西域水道記に吐魯番の東七十里にありと云ひ、一八七九年にその地に至りし、嚕西亞の博士咧格勒は、名を喀喇古札と書き、禿兒番の東南四十嚕里に在りと云へり。この征夏の役に楚材の従へることは、楚材の

再征の理由

傳に見え、この役は夏國の西より進みたること本紀に見え、金國志にも蒙古由
 同鵠往攻西夏、西夏遂亡」とあれば、太祖二十年乙酉の冬至の日に楚材は大軍
 に従ひて哈喇和卓に在りしなり。然らばその出陣を本書元史の成の年とした
 るは非にして、親征錄集史の酉の年としたるは是なり。元史に曰く「二十一年春
 正月、帝以西夏納仇人赤騰喝翔昆及不遣質子、自將伐之。赤は亦の誤寫にして、續
 通鑑綱目には亦とあり。赤騰喝翔昆は即親征錄の亦刺合鮮昆、祕史の你勒合桑
 昆なり。癸亥の年王罕の滅びたる時、亦刺合走西夏、日剽掠以自資。既而亦爲西夏
 所攻、走至龜茲國。龜茲國主以兵討殺之」と元史に有り。仇人を納るとは、その事を
 指せるなり。然るに西夏書事實慶元年、太祖二十年の處に「九月、蒙古仇人赤騰喝
 翔昆來奔、納之。赤騰喝翔昆乃蠻部屈律罕子云云。德旺以其同仇納之、給以糧糗」と
 の事なれば、その事を以て西夏を責めたるは、乙丑の年始めて西夏を征したる
 時の事なるべし。今度の理由は、祕史の前文に詳なるのみならず、集史には唐古惕又叛け
 りとあり。西夏書事に嘉定十七年、太祖十九年二月、德旺聞蒙古主征西域、未還遣
 使結漠北諸部爲外援、陰圖拒守計。諸部出兵應之」とあり。この事もし實ならば、集
 史の「叛けり」と云へるも、形なきことにはあるまじ。また續通鑑綱目に「蒙古鐵木
 眞伐夏を乙酉の冬十月としたるは、耶律楚材の序文に合ひて、是なるが如くな
 れども、元史本紀丙戌の夏避暑の後に記せる戰事、取甘肅州、西涼府、十一月取靈
 州、進次鹽州川をみな乙酉の年の内に記したるは、また非なり。集史に曰く「唐古
 惕又叛けりと聞きて、雞の年秋、軍を整へて合申を攻め、察合台には本部の兵に
 て老營の後路を守らしめ、拙赤は已に死し、幹歌台は軍に従へり。拖雷罕はその

續綱目集史の記

太祖の負傷

妻失兒忽克屯別乞痘を出せるに由り、數日後れたり。妻の名は、（路にて冬に
 祕史に莎兒合黑塔泥別乞、元史に唆魯禾帖尼とあり、皆音近し。）
 阿兒不合の多き野馬を圍獵したれば、成吉思合罕は、（馬の種類の名に）
 孛囉（して、明譯紅沙馬）に騎りて在しき。野馬ごも撞きて來つれ
 ば、（馬の種類の名に）孛囉驚きて、成吉思合罕を馬より落したれば、膚を
 甚く痛めて、搦鞞兒合惕に下營せり。その夜宿りたれば、朝に
 也遂合敦言く「諸王眾官人に告げ合はん。合罕は夜膚熱り、寢
 ね給へり」と云へり。そこに諸王眾官人聚れば、晃豁塔惕の脱
 兪扯兒必建議して言く「唐兀惕の民は、築きたる城ある、動か
 ざる營盤（嫩秃黑）あるなり。築きたる城を擡げては去らじ、彼等動か
 ざる營盤を撤てては去らじ、彼等退きて合罕の膚冷め
 なば、又却て出馬せんぞ、我等」と云へば、眾の諸王官人等、この